

音楽系 3 大学による共同プロジェクト

音大連携による教育イノベーション
音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成 22 年度
活動報告書

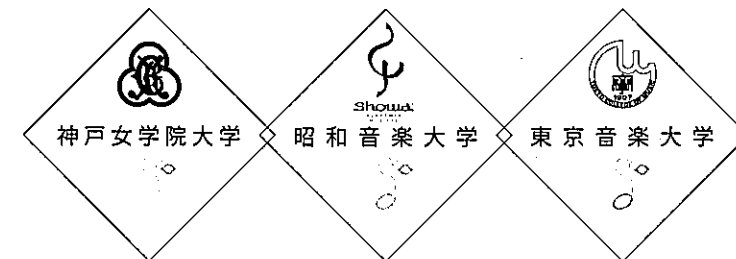


文部科学省平成21年度大学教育充実のための戦略的_的大学連携支援プログラム選定

音楽系3大学による共同プロジェクト

音大連携による教育イノベーション
音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成22年度
活動報告書



<http://www.music-communication.com>

目次

はじめに	03
I. 3大学共通・新規開設科目「ミュージック・コミュニケーション講座」 —平成22年度の教育効果と今後に向けた課題—	07
1. 新規開設科目「ミュージック・コミュニケーション講座」教育効果測定	08
2. 「ミュージック・コミュニケーション講座」実施報告	18
2-1: 第1回 人気アンサンブル結成の極意～「ゆうがたクインテット」誕生の舞台裏～	18
2-2: 第2回 あなたのための公立ホール	20
2-3: 第3回 見えないところにある音楽の仕事	22
2-4: 3大学合同夏期セミナー2010	24
2-5: 第4回 弾く人・聴く人・つなぐ人	30
2-6: 第5回 私たちの音楽が、生まれた～ギルドホール音楽院での学び～	32
2-7: 第6回 ホールの内でも外でも本物の音楽を！～アートNPOの社会的役割とその仕事～	34
II. 3大学合同コンサート「子どものためのスペシャル・コンサート～音楽で広がるイメージの世界～」実施報告	37
III. 研究活動報告	41
1. アメリカにおける先進的音楽教育・音楽活動について	42
1-1: ニューイングランド音楽院「Entrepreneurial Musicianship Program」	42
1-2: ニューイングランド音楽院「Abreu Fellows Program」	47
1-3: イーストマン音楽学校	54
1-4: マンハッタン音楽院	57
1-5: YOLA (ユースオーケストラ・ロサンゼルス) 並びにコルバーン音楽院	62
1-6: アウトリーチ教育担当者会議 (CEOCSM) 並びに各種アウトリーチ活動	67
1-7: ジュリアード音楽院	70
2. 日本の大学における事例報告—「音楽コミュニケーション・リーダー」養成の観点から	77
IV. 3大学連携事業学外評価員会議報告	81
資料編	87
1. 地域創造フェスティバル2010「おんかつシンポジウム」	88
2. 平成22年度大学教育改革プログラム合同フォーラム	89
3. 3つの音楽系大学による連携事業とFD	90
4. 新聞・雑誌等掲載記事	94
おわりに	96

はじめに

「音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」は、音楽系の3つの大学(東京音楽大学・神戸女学院大学音楽学部・昭和音楽大学)がそれぞれの特性を生かした連携のもとに、教育研究資源の相互補完や学生・教職員の交流を実現し、関連団体との協働を通して、社会の様々な場で音楽活動を創造・実践することができる、専門力・社会性・コミュニケーション能力を備えた「音楽コミュニケーション・リーダー」の養成をめざすものです。

平成21年度文部科学省「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム*」の選定を受け、平成21年9月に連携運営委員会が発足し、半年間の準備を経て、本年度より取組を本格的にスタートいたしました。

3大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」では、大学間をインターネット・ビデオ会議システムでつないだ講義に加えて、3大学の学生たちが一堂に会しての夏の合同セミナーを行い、学生・教員の相互交流による「複合的な学びの場」を数多く持つことができました。10月に実施した合同コンサートでは、各大学の特徴や強みを理解するとともに、次年度の活動に生かしていくための基盤を作ることができました。研究活動では、国内外の興味深い取組事例を幅広く収集し、本取組の目的や内容について、予定以上に充実した情報発信の機会を得ました。また、学外評価員会では、この取組の目指すところ・教育方法・効果に至るまで、きめ細かなご意見やアドバイスをいただきました。

本報告書は、これらの活動を、教育、実践、研究、評価、それぞれの視点でまとめたものです。ご高覧の上、今後とも本取組の展開・発展に向けて、ご助言・ご指導をいただけますよう、お願い申し上げます。

平成23年3月

3大学連携運営委員会
委員長 坂本 紀男
(東京音楽大学副学長)

*「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」とは、国公私立大学間の積極的な連携を推進し、各大学における教育研究資源を有効活用することにより、当該地域の知の拠点として、教育研究水準のさらなる高度化、教育活動の質保証、個性・特色の明確化に伴う機能別分化と相互補完、大学運営基盤の強化等とともに、地域と一体となった人材育成の推進を図ることを目的としています。

「音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」の趣旨および概要、取組図については、本報告書の90ページを参照ください。

3 大学連携運営委員会

連携運営委員会構成・メンバー（平成 23 年 3 月現在）

東京音楽大学	坂本 紀男	東京音楽大学副学長
	武石 みどり	〃 音楽学部教授
	村中 洋子	〃 音楽学部准教授
	原山 耕造	〃 事務局長
	中村 旬一	〃 教務一課長
神戸女学院大学	澤内 崇	神戸女学院太学音楽学部長
	津上 智実	〃 音楽学部教授
	田中 修二	〃 音楽学部教授
	竹下 直美	〃 音楽学部事務長
昭和音楽大学	高田 俊治	昭和音楽大学音楽学部長
	武濤 京子	〃 音楽学部准教授
	赤木 舞	〃 音楽学部助教
	榎 英夫	〃 学務部長
	下八川 公祐	〃 企画広報室長
連携コーディネーター	小島 レイリ	東京音楽大学連携コーディネーター
事務局	花畑 昌彦	東京音楽大学総務課係長

平成 22 年度連携運営会議実施日程

いずれもインターネット・ビデオ会議システムにより、3 大学間を結んで実施

- 第 1 回連携運営委員会：平成 22 年 5 月 26 日（水）
- 第 2 回連携運営委員会：平成 22 年 9 月 29 日（水）
- 第 3 回連携運営委員会：平成 23 年 1 月 19 日（水）
- 第 4 回連携運営委員会：平成 23 年 3 月 2 日（水）

平成 22 年度の活動

●ミュージック・コミュニケーション講座の実施

合同夏期セミナー以外の講座は、いずれもインターネット・ビデオ会議システムにより、3 大学間を結んで実施

- 第 1 回：平成 22 年 5 月 12 日（水） 発信校：神戸女学院大学
- 第 2 回：平成 22 年 6 月 9 日（水） 発信校：昭和音楽大学
- 第 3 回：平成 22 年 6 月 30 日（水） 発信校：東京音楽大学
- 3 大学合同夏期セミナー：平成 22 年 9 月 1 日（水）～9 月 3 日（金） 於：東京音楽大学
- 第 4 回：平成 22 年 10 月 6 日（水） 発信校：東京音楽大学
- 第 5 回：平成 22 年 11 月 10 日（水） 発信校：神戸女学院大学
- 第 6 回：平成 22 年 12 月 1 日（水） 発信校：昭和音楽大学

●3 大学合同コンサートの実施

平成 22 年 10 月 16 日（土） 於：神戸女学院大学

●平成 22 年度研究会スケジュール

- 第 1 回研究会：平成 22 年 4 月 19 日（月） 於：東京音楽大学
- 第 2 回研究会：平成 22 年 5 月 17 日（月） 同 上
- 第 3 回研究会：平成 22 年 6 月 14 日（月） 同 上
- 第 4 回研究会：平成 22 年 7 月 12 日（月） 同 上
- 第 5 回研究会：平成 22 年 8 月 25 日（水） 同 上
- 第 6 回研究会：平成 22 年 10 月 5 日（火） 同 上
- 第 7 回研究会：平成 22 年 11 月 9 日（火） 同 上
- 第 8 回研究会：平成 22 年 12 月 21 日（火） 同 上
- 第 9 回研究会：平成 23 年 1 月 25 日（火） 同 上
- 第 10 回研究会：平成 23 年 2 月 28 日（月） 同 上

研究・調査活動

- 地域創造フェスティバル参加（財団法人地域創造主催）：平成 22 年 8 月
- 米国視察（イーストマン音楽学校、マンハッタン音楽院）：平成 22 年 10 月～11 月
- 米国視察（YOLA, コルバーン音楽院）：平成 22 年 12 月
- 音楽団体・音楽大学主催ネットワーク会議参加（ニューヨーク）：平成 23 年 1 月
- 平成 22 年度大学教育改革プログラム合同フォーラム参加：平成 23 年 1 月
（文部科学省・合同フォーラム推進事務局主催）
- 舞台芸術フェア・アートマネジメントセミナー 2011 参加：平成 23 年 2 月
（文化庁・社団法人全国公立文化施設協会主催）
- 2010 年度第 16 回 FD フォーラム参加：平成 23 年 3 月

研究会メンバー（平成 23 年 3 月現在）

東京音楽大学：武石みどり、小島レイリ
神戸女学院大学：津上 智実
昭和音楽大学：武濤 京子、赤木 舞、布目 藍人、佐藤 良子

3 大学連携事業学外評価委員会

3 大学連携事業学外評価員（平成 23 年 3 月現在）

久保田 慶一 国立音楽大学 教授

澤 恵理子 社団法人日本演奏連盟 事務局長

田村 孝子 静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」館長

原 武 サントリーホール 総支配人

善積 俊夫 社団法人日本クラシック音楽事業協会 常務理事

3 大学連携事業学外評価員会議

いずれもインターネット・ビデオ会議システムにより、3 大学間を結んで実施

第 1 回評価委員会：平成 22 年 9 月 28 日（火）

於：東京音楽大学

第 2 回評価委員会：平成 23 年 3 月 2 日（水）

於：東京音楽大学

1. 3 大学共通・新規開設科目
「ミュージック・コミュニケーション講座」
—平成 22 年度の教育効果と今後に向けた課題—

1. 新規開設科目「ミュージック・コミュニケーション講座」教育効果測定

1. 「ミュージック・コミュニケーション講座」の概要と教育効果測定の目的

平成22年度音楽系3大学による共同プロジェクトにおける主要な取り組みのひとつに、3大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」(以下、MC講座)の新設が挙げられる。

MC講座は、音楽に関連する幅広い分野で活躍する講師陣を迎え、インターネット・ビデオ会議システム(IV会議システム)を通して各大学から2回ずつ(計6回)90分の講義を3大学に同時配信・同時受講するものである。また、MC講座の一環として3大学合同夏期セミナーを開催し、平成22年度は、米国より招聘した3名の講師による「インタラクティブ・コンサート」を主眼とするワークショップが行われた¹⁾。

以上の内容によるMC講座について、平成22年度の教育効果を分析し、平成23年度のMC講座の企画及び今後の教育方法の検討に資するため、教育効果測定を実施した。本稿では、調査の概要及び結果について報告し、平成22年度の教育効果と今後に向けた課題について考察する。なお、本調査は、3大学の教員の協力により、実施及び取りまとめられたものである。

2. 調査方法

調査の実施に先立ち、平成21年度に調査手法の検討を行った²⁾。今年度は、その検討をもとに次のような枠組みで調査を実施した。調査対象期間は、平成22年度のMC講座(第1回2010年5月12日～第6回2010年12月1日)及び3大学合同夏期セミナー(2010年9月1日～9月3日)である。調査対象者は、東京音楽大学、神戸女学院大学音楽学部、昭和音楽大学の受講生(学生)である。そして、調査は①MC講座受講前(第1回講座開始前)及び講座受講後(第6回講座終了後)の「履修者調査シート」³⁾による調査、②夏期セミナー終了後の受講生に対するアンケート調査並びに3大学教員に対するコメントシートによる調査、の大きく2つの枠組みから成る。

3. MC講座受講前後の調査結果

第1回MC講座開始前及び第6回同講座終了後に、受講生に「履修者調査シート」³⁾を配布し回答を得た。「履修者調査シート」の設問は、MC講座独自の指標によって設計されており、受講前後の調査結果を比較するため基本的に同様の内容となっている。

回答者数は3大学合計で、講座開始前が78人、講座終了後が42人である。講座前後で大きく回答者数が異なるのは、3大学ともに履修者数に大きな変動はないものの、履修者以外の受講者数(聴講者等)が変動したことによる(表1・表2参照)。よって調査結果は継続して受講した学生を含めた回答者全体について集計することとした。以下、設問ごとに講座前後の調査結果について述べる。

表1 講座開始前・回答者内訳

	履修		専攻			学年					計
	履修者	非履修者	A群	B群	C群	1年	2年	3年	4年	大学院	
東京	4	28	27	5	0	6	8	13	2	1	32
神戸	15	0	11	0	4	0	1	12	2	0	15
昭和	14	17	15	16	0	20	10	1	0	0	31
合計	33	45	53	21	4	26	19	26	4	1	78

1 第1回から第6回のMC講座及び夏期セミナーの詳細については、18頁～35頁を参照のこと。
 2 音楽系3大学による共同プロジェクト【平成21年度研究報告書】において、検討段階の報告を行っている。「新規開設科目「ミュージック・コミュニケーション講座」効果測定に関する検討—その手法と調査シートの作成について—」(同報告書45頁～49頁)を参照のこと。
 3 17頁、表12・表13を参照のこと。

表2 講座終了時・回答者内訳

	履修		専攻			学年					計
	履修者	非履修者	A群	B群	C群	1年	2年	3年	4年	大学院	
東京	4	10	11	3	0	5	5	1	0	3	14
神戸	15	0	11	0	4	0	1	12	2	0	15
昭和	10	3	2	11	0	12	1	0	0	0	13
合計	29	13	24	14	4	17	7	13	2	3	42

※ A群は、器楽、声楽、作曲専攻。B群は、音楽学、音楽教育、アートマネジメント、舞台スタッフ専攻。C群は、舞踊専攻。

3-1. 設問1

設問1では、講座開始前には学生のMC講座に対する期待を、講座終了後にはMC講座による成果について質問している。

【講座開始前】あなたが「ミュージック・コミュニケーション講座」を履修しようと思ったきっかけは何ですか？

回答は、3大学によって大きく異なり、各大学の特徴が現れた結果として注目される。東京音楽大学の学生の回答(図1)では「将来、仕事をするときに役立ちそうだから」を選んだ者が57%で大きな割合を占め、次いで「音楽に関して幅広く知識を得たいから」が30%となっている。神戸女学院大学の回答(図2)では「音楽を通していろいろな人とコミュニケーションする能力を高めたいと思ったから」「授業の形態に興味を持ったから」がそれぞれ30%を超えるとともに、「他の大学の学生と交流したいから」が20%で他の2大学よりも割合が大きい。昭和音楽大学の回答(図3)では「音楽を通していろいろな人とコミュニケーションする能力を高めたいと思ったから」「将来、仕事をするときに役立ちそうだから」「音楽に関して幅広く知識を得たいから」がそれぞれ25%～29%となり、他の2大学に比べ全ての選択肢に回答が分散する傾向が見られる。

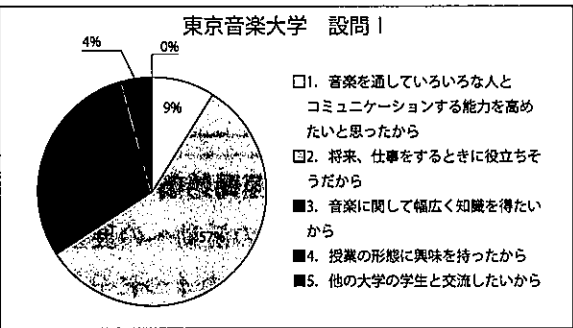


図1 講座開始前・設問1 (東京音楽大学の回答)

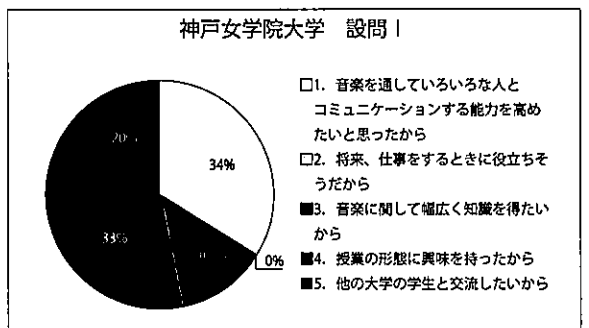


図2 講座開始前・設問1 (神戸女学院大学の回答)

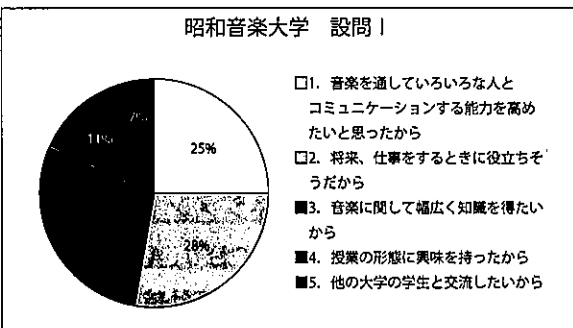


図3 講座開始前・設問1 (昭和音楽大学の回答)

【講座終了時】あなたが「ミュージック・コミュニケーション講座」で得た成果は何ですか？

次に、講座終了時の回答は、複数選択可で、多いものから順に1位が「3. 音楽を取り巻く社会の現状など、幅広い知識を得ることができた」85.7%、2位が「6. 他大学の学生と交流することができた」64.2%、3位が同率で「2. 将来、音楽に関わる仕事をするために役立った」と「4. 音楽を理解するためのアプローチ方法について考えることができた」54.7%が並ぶ結果となった。また、「7. その他」の自由記述は、1名のみであるが「自分がやりたい事への導きになった」という回答であった（表3参照）。

一方、各大学の結果では、「音楽を通して広くいろいろな人とコミュニケーションする能力が高まった」「他大学の学生と交流することができた」について神戸女学院大学が最も多い回答者を得ており、この点で他の2大学と比べ関心が高いことがうかがわれる。

表3 講座終了時・設問1集計結果（3大学合計） n=42, MA

	度数(人)	割合(%)	東京(人)	神戸(人)	昭和(人)
1. 音楽を通して広くいろいろな人とコミュニケーションする能力が高まった。	15	35.7	1	9	5
2. 将来、音楽に関わる仕事をするために役立った。	23	54.7	9	9	5
3. 音楽を取り巻く社会の現状など、幅広い知識を得ることができた。	36	85.7	11	14	11
4. 音楽を理解するためのアプローチ方法について考えることができた。	23	54.7	8	9	6
5. インターネット・ビデオ会議システムによる3大学同時受講で講義が一層有意義なものになった。	12	28.5	3	5	4
6. 他大学の学生と交流することができた。	27	64.2	8	12	7
7. その他	1	2.3	0	1	0

3-2. 設問II-1【講座開始前・講座終了時】あなたは将来、どのような活動をしたいですか？

設問II-1では、将来の活動への展望について、①音楽家②スタッフとして音楽に携わる③音楽指導者④まだわからない、の4つに分類し、受講前後で同一の質問をすることにより変化を見た。対象者を同じくして比較するため、履修生に限定したデータの集計を行った（表4・表5参照）。

受講前後の調査結果を比較すると、「音楽家（演奏家や作曲家）として音楽活動をしたい」と回答した割合は、講座開始前10.7%から講座終了時には22.2%へと増加している。一方、「まだわからない」と回答した割合は、講座開始前の46.4%に対し、講座終了時には22.2%となり、減少している。特に、C群では、講座開始前に「まだわからない」と回答した者が3人見られるが、講座終了時には0人となっていることから、将来に向けた目的意識が高まったと言えるのではないだろうか。

また、B群（アートマネジメント・舞台スタッフ専攻）の学生は全員が「スタッフとして音楽に携わる仕事をしたい」と回答しており、A群・C群の学生に比べ活動の方向性は概ね定まっていると見られる。

表4 講座開始前・設問II-1集計結果（3大学履修生合計） n=28

	度数(人)	割合(%)	A群(人)	B群(人)	C群(人)
1. 音楽家（演奏家や作曲家）として音楽活動をしたい	3	10.7	2	0	1
2. スタッフとして音楽に携わる仕事をしたい	8	28.5	0	8	0
3. 音楽指導者として活動をしたい	4	14.2	4	0	0
4. まだわからない	13	46.4	10	0	3

表5 講座終了時・設問II-1集計結果（3大学履修生合計） n=28

	度数(人)	割合(%)	A群(人)	B群(人)	C群(人)
1. 音楽家（演奏家や作曲家）として音楽活動をしたい	6	22.2	3	0	3
2. スタッフとして音楽に携わる仕事をしたい	9	33.3	0	8	1
3. 音楽指導者として活動をしたい	6	22.2	6	0	0
4. まだわからない	6	22.2	6	0	0

※A群は、器楽、声楽、作曲専攻。B群は、音楽学、音楽教育、アートマネジメント、舞台スタッフ専攻。C群は、舞踊専攻。

3-3. 設問II-2

設問II-1を踏まえ、設問II-2では記述式でより具体的な回答を求めた。講座開始前はどのような音楽活動をしたいかと質問しているのに対し、講座終了後は将来に向けた、現時点での自分自身の課題について質問している（表6・表7参照）。

講座終了時（表7）の回答では、複数の学生から「コミュニケーション」というキーワードが挙げられた。「何か音楽で伝えたいという思いはあるので具体的にどうしたいのか考える事」という回答からは、自分の意志やそれを達成するための方法を具体的に考えようとする姿勢が見られる。

また「音楽の勉強を続けると共に、積極的に現場へ足を踏み入れてみる事」という回答では、実際の職業としての「現場」に対する関心や意識の高まりを読み取ることができる。

さらに「楽曲を理解する力、音楽家の事を理解する力をつける事、社会が今何を必要としているのか知る事」や「演奏ができるだけではいけない。言葉で説明することも必要だと思う」との回答から、作品、アーティスト、それらと関わる社会について幅広く知った上で、演奏はもとより言葉

表6 講座開始前・設問II-2回答（3大学学生から抜粋）

【講座開始前】1または2と答えた人にお聞きします。具体的にどのような音楽活動をしたいですか？（自由記述）
オペラへの出演。アリアや歌曲などのコンサート開催。
オーケストラで演奏したい。
伴奏ピアニスト。
芸術療法を利用したコンサートを作りたい。
ミュージカルの制作に携わりたい。
演奏会（クラシック）の企画・制作・運営。
ホールまたはコンサートの企画制作にたずさわりたい。
舞台芸術のプロデュースをしたい。
音響をやりたい。
舞台スタッフとして舞台に関わりたい。
作詞作曲編曲をし、歌いたい。また、イベントのPAなどもやりたい。
分野・場所を問わずに音楽を届けて、それを通してクラシックも気軽に聴いてもらえる環境をつくりたい。
音楽を通して社会貢献したい。
他大学の学生と一緒に企画してみたい。
より幅広い人に演奏を通して音楽の楽しさを広めたい。
舞台に立ち続けたい。
チラシやサイトデザインで音楽を伝えたい。
クラシックだけでなく、ジャズやポップスの面でも活動したい。

でも「伝える」必要性を実感できたと言えるだろう。

表7 講座終了時・設問Ⅱ-2回答(3大学学生から抜粋)

【講座終了時】あなたにとって今何が課題だと考えていますか？(自由記述)
もっと自分の専攻楽器を頑張る。
発音と発声、感情を表現すること。そしてどうやって音楽を伝えていくかが課題です。
人と人のコミュニケーション力と音楽を通してのコミュニケーション力。
楽曲を理解する力、音楽家の事を理解する力をつける事、社会が今何を必要としているのか知る事。
日本のことを知る、日本の音楽を知る。とりあえず企画書をたくさん書いてみる。
演奏ができるだけではいけない。言葉で説明することも必要だと思う。
社会の動向についての深い理解・語学力・専門的な知識を得ること。
臨機応変な対応。コミュニケーション能力、判断力。
自分の音楽的知識、技術をもっと深める。
自分の専門分野としての音楽、音楽教育についての見解、見聞を深めること。
音楽のすばらしさをどうやって伝えるか。
何か音楽で伝えたいという思いはあるので具体的にどうしたいのか考える事。
自分がしたいことを、将来に向けて前向きに考えること。また、そのための活動をする事。
考えたこと、実現したいことを目標をもって行動していくこと。
ただ単に生徒が持ってきた曲を通して教えるだけでなく、音楽の成り立ち、楽しさまで幅広く伝えられるようになること。
音楽の勉強を続けると共に、積極的に現場へ足を踏み入れてみる事。
自分が音楽の何を伝えたいのか瞬間で考え、伝える力(意見をまとめる)。
更なる精進にはげむと共に、発言力、影響力のある存在になること。
音楽にとらわれず、様々な分野を経験すること。

3-4. 設問Ⅲ

設問Ⅲでは、「音楽コミュニケーション・リーダー」となるための意欲を持ち、必要な学習を行っているかどうかを、受講前後で同一の質問をすることによって調査した。ただし、設問番号5・6・7については、講座開始前から講座終了時には若干の修正を加えた。

対象者を同じくして比較するため、履修生に限定したデータの集計を行った。また、「はい」を1、「いいえ」を-1、「どちらともいえない」を0とし、等間隔であると仮定して、間隔尺度のデータとみなして解析を行った(表8・表9の最下段に示す)。

表8 講座開始前・設問Ⅲ集計結果(3大学履修者合計) n=28

設問番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
はい	27	22	19	18	27	28	26	16	12	21	22	2	25	22	6
いいえ	0	1	1	4	0	0	1	7	8	1	1	13	1	0	5
どちらともいえない	1	5	8	6	1	0	1	5	8	6	5	13	2	6	17
数値平均	0.96	0.75	0.64	0.5	0.96	1	0.89	0.32	0.14	0.71	0.75	-0.39	0.86	0.79	-0.04

表9 講座終了時・設問Ⅲ集計結果(3大学履修者合計) n=28

設問番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
はい	27	20	24	20	14	25	26	20	16	23	20	6	25	22	9
いいえ	0	2	1	3	7	2	1	4	5	1	1	10	0	0	4
どちらともいえない	1	6	3	5	7	1	1	4	7	4	7	11	3	6	15
数値平均	0.96	0.64	0.82	0.61	0.25	0.82	0.89	0.57	0.39	0.79	0.68	-0.15	0.89	0.79	0.18

- 受講前後の調査結果を比較し、顕著な数値の変化が見られる設問は、以下の通りである。
- ・設問番号3「曲目を選ぶときには、聴く人のことを考えている」は、講座終了時に「はい」と回答する割合が高まった。
 - ・設問番号5「コンサートができるまでのプロセスを勉強したい」は、講座終了時調査で「コンサートの制作プロセス(企画、交渉、広報等)を学んだことがある」に設問を変更したところ、「はい」と回答する割合が減少し、「いいえ」「どちらともいえない」の回答者が増加した。
 - ・設問番号8「音楽に関連する職業について調べたことがある」は、講座終了時に「はい」と回答する割合が高まった。
 - ・設問番号9「新聞を読むなど、社会の動きに関心を持っている」は、講座終了時に「はい」と回答する割合が高まった。
 - ・設問番号12「自分の意見をわかりやすく述べることができる」は、講座終了時に「はい」と回答する割合が高まった。
 - ・設問番号15「チームの仲間をまとめることができる」は、講座終了時に「はい」と回答する割合が高まった。

4. 3大学合同夏期セミナーにおける調査結果

MC講座の一環として開催された3大学合同夏期セミナーにおいては、終了後に学生に対しアンケート調査を実施した。その結果を以下にまとめる。回答者は3大学合計で52人である(表10参照)。

表10 夏期セミナー・回答者内訳

	専攻			学年					計
	A群	B群	C群	1年	2年	3年	4年	大学院	
東京	13	4	0	5	1	8	1	2	17
神戸	11	0	4	0	1	12	2	0	15
昭和	3	17	0	11	7	1	1	0	20
合計	27	21	4	16	9	21	4	2	52

※A群は、器楽、声楽、作曲専攻。B群は、音楽学、音楽教育、アートマネジメント、舞台スタッフ専攻。C群は、舞踊専攻。

4-1. 参加学生による自己評価の結果

アンケートでは学生の自己評価として、図4に示す通り、5項目について「よくできた」を5とする5段階評価で回答を求めた。①及び⑤において、5あるいは4という高い評価の割合が大きい結果となった。

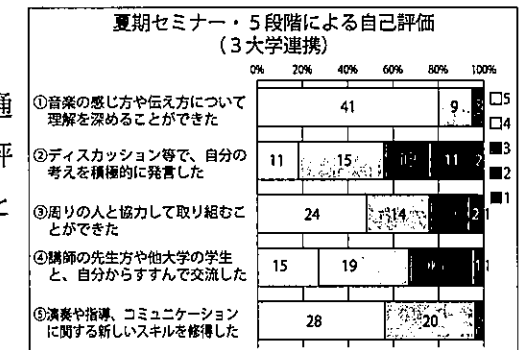


図4 夏期セミナー・5段階による自己評価(3大学合計)

4-2. 記述回答のまとめ

次に、夏期セミナーを受講して良かった点や今後の活動に活かしていきたい点について、自由記述による回答を表11にまとめる。

自由記述からは、大学や専攻を超えた交流により様々な考え方に触れるとともに、例えば音楽と舞踊という分野の違いがあっても、本質的に共通する点があること等、新たな気づきが表れている。また夏期セミナーのテーマである「インタラクティブ・コンサート」について、実践により、その目的や構造の理解が深まったと言えよう。そして、ディスカッションを含むワークショップ形式による受講は、コミュニケーションに対する意欲を高め、特に自分の意見を積極的に発言したいという前向きな回答に繋がったと考えられる。

表11 夏期セミナー・自由記述 (3大学学生から抜粋)

夏期セミナーを受講して良かった点や今後の活動に活かしていきたい点 (自由記述・抜粋)
学校が違う、学科が違うというだけで出てくる意見が全然違って、話し合いがとても楽しかった。
音楽を楽しんでもらうだけでなく、音楽を理解してもらおうという観点を持てて良かった。
今回の講座はついていけるかとても不安だったのですが、いろいろ体験していくうちに、音楽もダンスも同じだということが分かりました。同じオーディエンスを前にしたプレイヤーであること、音楽を伝えていく人間であること、すべてが同じでとても親近感を覚えました。
参加型の演奏会がもっと増えてほしいと考えています。クラシックは受け身というイメージでしたが、これからはもっと一般の方々に親しみやすい音楽にしていきたいと思います。
漠然とインタラクティブなコンサートの必要性は理解していたが、今回の講座で具体的な段階のふみ方などを教わることができたので良かったです。
今回は混ぜ合わされている素材の提示→混ぜる(実際に曲の鑑賞)という流れだったがそのシンプルな構造の中に音楽と向き合う(感じる)ための要素(リズム・感情・文化)が含まれており見事だった。難しいことを簡単に見せることはすごいと思った。
初対面の人とこんなに意見交換をしている自分を発見できてとても良かった。
3つの学校が顔を合わせたということで緊張してしまい、進んで発言することができなかった。次回の講座の時はできるだけ自分の考えをまとめて発言できるようにしたい。
自分の意見を言い、ディスカッションによって深めるという行動を今後続けたい。
新しいジャンルの音楽活動を教わり、音楽の魅力を伝える手段は今あるものだけではないこと、まだ新しい方法を開拓できる可能性を強く感じました。
エデュケーションプログラムを考える際にとても役に立つと思いました。

4-3. 教員による講評

夏期セミナー終了後に、3大学連携取組担当教員⁴よりコメントシートでセミナーの講評を得た。下記の①から⑤の観点について、コメントをとりまとめた。

①音楽の感じ方や伝え方について理解を深める

学生は1日目は、これまで触れたことのない新しい内容を理解できていない様子であったが、2日目以降、アクティビティやインタラクティブ・コンサートを実際に体験することによって理解を深めていった模様である。その背景に、セミナーの目標設定が明快であったこと、3人の講師の丁寧な説明や同時通訳的確な表現に支えられたことが挙げられる。フォローアップの方策としてセミナー前の事前学習や、今後の継続的な学びが必要である。

⁴ コメントシートは、武石みどり教授(東京音楽大学)、津上智実教授(神戸女学院大学)、高田俊治教授(昭和音楽大学)、赤木舞助教(昭和音楽大学)より提出された。

②自分の考えを積極的に発言する

積極的な学生がグループリーダーとなって引っ張る一方、ほとんど意見を出せない学生も見られた。3日間を通して学生たちの成長が明らかであり、自分なりに適切な表現に結びつける活動を熱意を持って実践していた。学生があまり慣れていない、ディスカッションやワークショップ形式での学びであったため、教員・スタッフのフォローも必要である。

③周囲の人と協力して取り組む

3大学の学生が和気あいあいと取り組んでいた。その理由としては初日の初めに講師が「知らない人とペアを作って相手のことを知る」課題を課したことが挙げられる。リーダーもフォロワーも各々の役割を担って活動しており、グループワークでもまとまっている様子が見られた。

④周りの人と自分からすすんで交流する

3日間で学生同士がどんどん親しくなっていく様子が見られた。また、講師の熱心な姿勢が際立っていた。最初の日には教員・講師・学生全員の顔合わせ会をやっておくという方策もあるのではないかと。セミナーの参加者はそもそも積極的な学生が多かったが、とりわけ神戸女学院大学の舞踊専攻の学生が積極的な姿勢で他の学生に刺激を与えていた。

⑤演奏や指導、コミュニケーションの方法を工夫する

学生が新しい視点を得たことは確かであるが、スキルの定着に向けては今後のフォローアップや継続的な取り組みが求められる。音楽から何を引き出すかは楽曲分析力や洞察力も求められるため、その意味でもより良いセミナーとするためには課題がある。

5. 今後に向けて

以上に述べてきた調査結果をもとに、MC講座の教育効果を考察したい。講座前後の調査において、学生の期待は各大学で異なり、様々なニーズがある中で、今年度のMC講座のラインナップは各大学の強みを活かして企画されたが、設問Ⅰの結果で「音楽を取り巻く社会の現状など、幅広い知識を得ることができた」と回答した学生が最も多いことから、3大学の取り組みならではの多彩な内容を活かすことができたと考えられる。また、同じ設問Ⅰで「他大学の学生と交流することができた」が2番目に多く挙げられていることは、講座でⅣ会議システムを活用し3大学間で積極的に意見交換が行われたことや、3大学合同夏期セミナーによると考えられる。

次に、設問Ⅱ-1、Ⅱ-2の結果で、受講生が将来に向けた目標や活動のイメージを持ち始めたことが表れた。さらに、設問Ⅲでは聴き手の存在に対する意識や、より広い社会あるいは職業についての関心の高まりが見られるとともに、実際のコミュニケーション能力についても向上したという実感を得ているようである。

一方、夏期セミナーは、3大学の学生が一堂に会して受講する貴重な機会であった。積極性や協調性については、多くの学生に成長の様子が見られた。また、音楽をいかに伝えるのかを考える、新たなきっかけをつかむことができたと言える。

しかし、具体的なスキルの定着や学び得た事を活かしていくためには、継続的なフォローアップが必要となる。そのため、ディスカッションやワークショップ形式の授業形態を取り入れることも、今後の課題と考えられる。

なお、調査の設計とMC講座の企画に共通する課題として、全6回のMC講座と夏期セミナー

をより密接に結びつけていくことが挙げられる。

すなわち MC 講座を通して「音楽が持つ力を伝えたいという思いはあるので、今後は具体的にどうしたらいいのかを考えたい」「積極的に仕事の現場について知り、実際に体験して学びたい」「演奏だけでなく、言葉でも音楽の力を表現して説得力をつけたい」といったポジティブな意識の変化が見られる。

一方で、実際にコミュニケーション能力を高めるための教育内容は今後の課題であり、本プロジェクトが提唱する専門力・社会性・コミュニケーション能力を備えた「音楽コミュニケーション・リーダー」の養成に向け、調査結果を反映させていくことが求められる。

(佐藤 良子)

参考文献

辻新六・有馬昌宏『アンケート調査の方法—実践ノウハウとパソコン支援—』、東京：朝倉書店、1989年。

堤宇一編著、青山征彦・久保田亨著『はじめての教育効果測定—教育研修の質を高めるために—』、東京：日科技連出版社、2007年。

表 12 「ミュージック・コミュニケーション講座」
履修者調査シート（講座開始前）

平成 22 年度 「ミュージック・コミュニケーション講座」履修者調査シート【講座開始前】				
学籍番号	学年	性別 男・女	記入日	月 日
専攻		「アーツ・イン・コミュニティ」に		
		1. 参加する 2. 参加しない		
I あなたが「ミュージック・コミュニケーション講座」を履修しようと思ったきっかけは何ですか？（どれかひとつに○）				
1. 音楽を通していろいろな人とコミュニケーションする能力を高めたいと思ったから。				
2. 将来、仕事をするときに役立つから。				
3. 音楽に関して幅広く知識を得たいから。				
4. 授業の形態（インターネット・ビデオ会議システムによる3大学同時受講）に興味を持ったから。				
5. 他大学の学生と交流したいから。				
6. 教員にすすめられたから。				
7. その他 記述：				
II-1 あなたは将来、どのような活動をしたいですか？（どれかひとつに○）				
1. 音楽家（演奏家や作曲家）として音楽活動をしたい。				
2. スタッフとして音楽に携わる仕事をしたい。				
3. 音楽指導者として活動をしたい。				
4. まだわからない。				
II-2 1または2と答えた人にお聞きします。具体的にどのような音楽活動をしたいですか？				
記述：				
III 以下の設問に、【はい・いいえ・どちらともいえない】のうち、当てはまる箇所を選択して○をつけてください。				
1	ホールだけでなく、いろいろな場所で演奏したい。	はい	いいえ	どちらともいえない
2	コンサートの企画をやりたい。			
3	曲目を選ぶときには、聴く人のことを考えている。			
4	音楽を伝えるために、演奏だけでなくトークにも挑戦したい。			
5	コンサートができるまでのプロセスを勉強したい。			
6	自分の専攻以外の楽器や、学科について興味がある。			
7	音楽に関わるいろいろな仕事に興味がある。			
8	音楽に関連する職業について調べたいことがある。			
9	新聞を読むなど、社会の動きに関心を持っている。			
10	地域の学校の子供たちや、施設にいる人たちに音楽を届ける活動をしたい。			
11	広く多くの人とコミュニケーションすることが好きである。			
12	自分の意見をわかりやすく述べることができる。			
13	他人の話をよく聞くようにしている。			
14	周りの人と協力して物事に取り組むことができる。			
15	チームの仲間をまとめることができる。			
調査は以上です。ご協力いただきありがとうございました。				

表 13 「ミュージック・コミュニケーション講座」
履修者調査シート（講座終了時）

平成 22 年度 「ミュージック・コミュニケーション講座」履修者調査シート【講座終了時】				
学籍番号	学年	性別 男・女	記入日	月 日
専攻		「アーツ・イン・コミュニティ」に		
		1. 参加した 2. 参加しなかった		
I あなたが「ミュージック・コミュニケーション講座」で得た成果は何ですか？（複数回答可、当てはまる数字に○）				
1. 音楽を通して広くいろいろな人とコミュニケーションする能力が高まった。				
2. 将来、音楽に関わる仕事をするために役立った。				
3. 音楽を取り巻く社会の現状など、幅広い知識を得ることができた。				
4. 音楽を理解するためのアプローチ方法について考えることができた。				
5. インターネット・ビデオ会議システムによる3大学同時受講で講義が一層有意義なものになった。				
6. 他大学の学生と交流することができた。				
7. その他 記述：				
II-1 あなたは将来、どのような活動をしたいですか？（どれかひとつに○）				
1. 音楽家（演奏家や作曲家）として音楽活動をしたい。				
2. スタッフとして音楽に携わる仕事をしたい。				
3. 音楽指導者として活動をしたい。				
4. まだわからない。				
II-2 II-1の回答について具体的に、あなたにとって何が課題だと考えていますか？				
記述：				
III 以下の設問に、【はい・いいえ・どちらともいえない】のうち、当てはまる箇所を選択して○をつけてください。				
1	ホールだけでなく、いろいろな場所で演奏や音楽活動をしたい。	はい	いいえ	どちらともいえない
2	コンサートの企画をやりたい。			
3	曲目を選ぶときには、聴く人のことを考えている。			
4	音楽を伝えるために、演奏だけでなくトークにも挑戦したい。			
5	コンサートの制作プロセス（企画、交渉、広報等）を学んだことがある。			
6	自分の専攻以外の楽器や、学科の人と交流がある。			
7	音楽に関わるいろいろな仕事を体験したい。			
8	音楽に関連する職業について調べたいことがある。			
9	新聞を読むなど、社会の動きに関心を持っている。			
10	地域の学校の子供たちや、施設にいる人たちに音楽を届ける活動をしたい。			
11	広く多くの人とコミュニケーションすることが好きである。			
12	自分の意見をわかりやすく述べることができる。			
13	他人の話をよく聞くようにしている。			
14	周りの人と協力して物事に取り組むことができる。			
15	チームの仲間をまとめることができる。			
調査は以上です。ご協力いただきありがとうございました。				

2. 「ミュージック・コミュニケーション講座」実施報告

2-1 2010年度「ミュージック・コミュニケーション講座」 第1回実施報告

講座の名称	第1回ミュージック・コミュニケーション講座 人気アンサンブル結成の極意～「ゆうがたクインテット」誕生の舞台裏～
講師	新 真二氏（大阪フィルハーモニー交響楽団首席コントラバス奏者、 アンサンブル・ベガ所属）
実施日時	2010年5月12日（水）18:30-20:00（20:00-20:30 意見交換会）
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 オルチン館
講座の概要	<p>3大学共通科目として今年度新規開講した「ミュージック・コミュニケーション講座」の第1回を、5月12日（水）に新真二氏を講師に迎えて、神戸女学院大学で実施した。</p> <p>講座は「音楽業界の未来は明るい？暗い？それとも変わらない？」という学生への問いかけから始まった。アイデアを出すのにお金はかからないのに、それが知的財産となると語る新氏は、「クラシック・ファンは総人口の約1%と言われている。そうであるなら残りの99%の中からファンを増やそう」「リピーターがリピーターを呼ぶ」と発想の転換の重要性を語った。NHK教育番組「ゆうがたクインテット」でも活躍するアンサンブル・ベガのアイデア満載の活動を例に、DVD映像や写真を使用しながら具体的に説明が進められた。</p> <p>楽しい語り口の講義に学生たちは終始リラックスした様子で臨み、終盤の「どうすれば音楽業界が活発になると思うか？」という問いかけに対して、始めは発言を躊躇していたものの、次第に学生たちから意見が出るようになった。</p> <p>「自分の足でその場に赴き、実際に見聞きすることが大切」「やりたいことをやるのではなく、ニーズを考えて」と、演奏や企画に携わっていく上でのアドバイスを新氏が学生に与えて、講座は締めくくられた。</p> <p>授業終了後も引き続き3大学間での議論が展開され、20時30分に打ち切るまで続いた。学生たちが画面の壁を越え出したのが印象的であった。</p>

《学生のことば》

・「人と同じことをしていても音楽業界は発展しない。逆発想が大切。失敗してもいい」という言葉にそうか！と思いました。

（神戸／フルート／3年）

・PRするにもデジタルなどではなく、面と向かって説明の方が伝わりやすい。一方的では

だめだという言葉に納得しました。

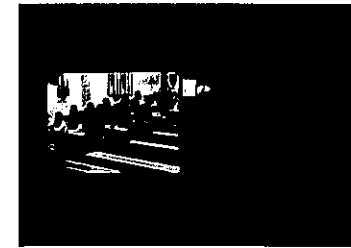
（神戸／舞踊／3年）

・この講義を聞いて、クラシックを多くの人に聴いてもらえるチャンスはまだあると思えました。

（神戸／ピアノ／3年）

・クラシックとポップスの違いは何だろうと考えました。（中略）実はクラシック音楽を別物

として扱って敷居を高くしているのは私達演奏者なのではないかと思うのですが、他の大学の方にも意見を聞いてみたいです。



（神戸／声楽／3年）

・私は質問されても戸惑うことも多く、なかなか意見を言えなかったのですが、他校の方は自分の意見をしっかり持っていたので見習いたいと思いました。

（神戸／ヴァイオリン／3年）

・私は教員を目指しているのですが、楽しい授業を作っていく時にも、情熱・使命・ビジョン・アクションの話（何かをする際に不可欠な要素として説明）等が活かしていけそうだと思います。

（昭和／作曲／3年）

・受講前には半信半疑でしたが、同世代で意欲のある人と、モチベーションを高め合いながら取組める内容でとても楽しかったです。もっとたくさんディスカッションしたり、実際に会って交流したり、一緒に何かを企画したりしてみたいです。

（昭和／作曲／2年）

・アートマネジメント的にもいろいろと勉強になりました。「アイデアはタダ！」この言葉を胸に刻んでいきたいと思います。

（昭和／アートマネジメント／2年）

・マルチな人間になることと、スペシャリストになることは意味合いが違って来るけれども、「何でもできる、やることができる」根拠のある人間となるために、無駄だと思おうが何でもやってみるフットワークの軽い人間になりたいと思いました。座して何かしようと思わず、イスから根っこを引き抜いて猪突の勢いでやってみたいです。

（東京／音楽教育／4年）

・小さい子から大人までが楽しめるコンサートを作るまでの努力や苦労がすごいなと思いました。演奏家だけが活躍するのではなく、楽器の

弾けない子なども参加できるのがすごく楽しそうです。

（東京／ピアノ／1年）

・自分が挑戦してみたいことにどんどん取り組んで、たくさんの経験を重ねていきたいと思いました。

そうすればそれが何かしらの形で将来良いように向いてくと思うし、それを自分だけの為ではなく、人の為に生かせるようになれば良いなと思いました。



（東京／ピアノ／2年）



※写真は神戸女学院大学の様子。

2-2 2010年度「ミュージック・コミュニケーション講座」 第2回実施報告

講座の名称	第2回ミュージック・コミュニケーション講座 「あなたのための公立ホール」
講師	榎本 広樹氏 (魚沼市小出郷文化会館)
実施日時	2010年6月9日(水) 18:30-20:00 (20:00-20:30 意見交換会)
実施場所	昭和音楽大学 南校舎 C511 階段教室
講座の概要	<p>3大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」の第2回は、魚沼市小出郷文化会館の榎本広樹氏を講師に迎えて、昭和音楽大学から発信した。</p> <p>講座では、全国の公立ホールの現状と課題について、(1)ハードウェア、(2)ソフトウェア、(3)ヒューマンウェア、(4)ローカリティの4つの項目に着目し、学生が公立ホールを通して演奏家として自分をアピールしたり、企画の魅力を伝えたりする際にはどうすれば良いか、その秘訣が具体的に解説された。</p> <p>小出郷文化会館の意欲的な取り組みは市民と施設職員の熱意に支えられており、市民の声が、会館の活動と魚沼市の文化振興ビジョンを結びつける原動力となっている。榎本氏は、小出郷文化会館が特別なのではなく、全国どこの公立ホールでも活発に活動することができると述べた。10ページにわたるレジュメをもとに「現場」で活躍する榎本氏ならではの視点で、学生にわかりやすく地域に求められる公立ホールのあり方が説明された。</p> <p>質疑応答では、各大学の学生からの「企画を持ち込むとすればいつの時期がよいのか」「公立ホール専属のカンパニーが少ないのはなぜか」等の質問に対し、実践的な観点からのコメントがなされた。授業終了後の3大学間のディスカッションでは、新真二氏(当講座第1回講師)の参加も得て、公立ホールへの就職を目指す学生に求められること等が議論され、学生にとっては将来を考える上で貴重なアドバイスとなった。</p>

《学生のことば》

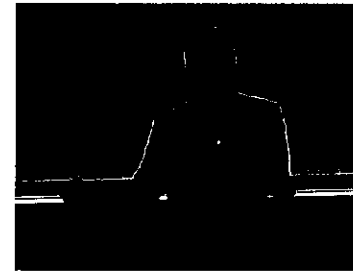
・話し方がとてもおだやかで、とても分かり易かったです。公立ホールがどのように企画をしているのか知ることができて良かったです。魚沼市の市民は町づくりに関してとても積極的なことを知って、素晴らしいことだなと思いました。

(昭和/アートマネジメント/1年)

・10年の計画(注:「魚沼市第一次総合計画」)から市民の思いが詰まっていることがわかりました。自分達の町が音楽を通してコミュニケーションがとれるようになればいいと思います。

(昭和/声楽/1年)

・私が普段何気なく使わせてもらっている公共ホールがこんな現状だと初めて知ったので、こ



れから良くしていけるように、何か自分にできることはないかと考えるきっかけになりました。(昭和/フルート/2年)

・プレーヤーとしてこれからホールと関わるのが必然で、公立ホールの現状が自分にとってのチャンスになるということがわかって感激しました。今まで自分の演奏をすることは必死で、どうすればホールで使ってもらえるかなど初めて考えたので、とても勉強になりました。(神戸/ピアノ/2年)

・原因の1つである、舞台芸術の専門家が公立ホールの発注者である行政側にいないという話に納得しました。発注者が目的を分かっているのに、目的の明確な公立ホールが建設されるわけがない。榎本さんが「家を作るために考える事と同じ様な事が公立ホールでも言える」とおっしゃっていましたが、確かに自分の家を建てる時は色々と注文をつけるでしょう。それと同じ様に、どのように使いたいか、その実現のためには…と全てを明確にしていく事が大切なのだなと思いました。(神戸/声楽/3年)

・自分から積極的に提案していくこと。受け身姿勢では絶対にやっていけないのだと思いました。公演させてもらうだけでなく、目的や企画も用意していかななくては取り扱ってもらえないのですね。(神戸/舞踊/3年)

・音楽大学に通っている自分は将来何ができるのか?この大きな課題でまず思ったのは“この国に対する流行だけでは計らない音楽の価値観の向上”でした。ホールに足をこぶ人は少ない。まして公立ホールではむずかしいと思います。でも地域で盛り上がらなければ音楽が広まる訳がありません。私は内側から上げられる、色々と求められるアート・マネージャーを目指したいです。(東京/ピアノ/1年)

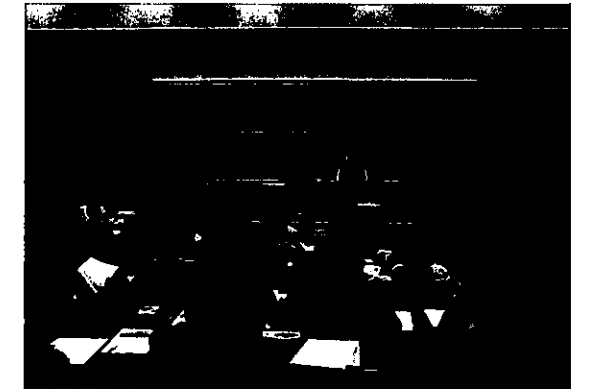
・演奏を主にしている演奏家の私たちにとって、ACT(注「アクト・プロジェクト」)で演奏会

の運営に携わっていますが公共ホール等の状況を考えたことはなかったので、施設側にお願いする際にとても良い講義だったと思います。公共ホールは3年ごとに異動だったりスタッフが5人以下しかいなかったり行政は評価ができなかったりと、芸術・音楽関係の職をする際にまだまだ知識と経験が足りないと感じたので、もっとたくさんお話を聞きたいと感じました。

(東京/ピアノ/3年)

・演奏会を企画するにあたって企画者側の思いだけで進めるのではなく、地域の方の意見も重視する事によってより良い演奏会を行ってきたいと思う。

(東京/ピアノ/4年)



※写真は昭和音楽大学の様子。

2-3 2010年度「ミュージック・コミュニケーション講座」 第3回実施報告

講座の名称	第3回ミュージック・コミュニケーション講座 「見えないところにある音楽の仕事」
講師	篠原 猛氏（フルート奏者、日本音楽家ユニオン代表運営委員） 安原 理喜氏（オーボエ奏者、東京音楽大学准教授）
実施日時	2010年6月30日（水）18:30-20:00
実施場所	東京音楽大学 A館地下100
講座の概要	<p>3大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」の第3回は、フルート奏者で日本音楽家ユニオン代表運営委員を務める篠原猛氏と、オーボエ奏者であり東京音楽大学准教授の安原理喜氏を迎えて、東京音楽大学にて実施した。</p> <p>講座は「見えないところにある音楽の仕事」と題し、安原氏との対談形式で、スタジオミュージシャンとして長く活躍されてきた篠原氏が様々な楽器の実演を交え、テレビやラジオ、映画音楽などの録音、スタジオの仕事などについての体験談や音楽家を取りまく問題に関する意見を述べられた。</p> <p>様々な種類の笛の紹介と実演を通し、音楽のプロとして生き残っていくためには自分の専門以外でも武器となる技術を持ち、多くのものに興味を持ち探求する姿勢が必要であるという事が強調された。</p> <p>スタジオ録音では練習時間は1時間ほどしかなく、その時間内で譜読みをし、求められている音楽を解釈するという技術が必要である。ただし、残念ながらスタジオミュージシャンという仕事は削減されつつある。</p> <p>今日、電子媒体の音楽が普及しているため、音楽家の収入源であるCDやコンサートの仕事が激減している。しかし、そんな時代であるからこそ、生演奏の貴重さを多くの人に伝えていく必要がある。今後、音楽家が生き残る術の一つとして、生演奏というものがいかに電子機器を通して聴くものと異なるか、音楽が鳴り響くその場に居合わせることの重要性を人々に伝えていくことが挙げられる。</p> <p>また、音楽に携わる仕事をしていると、ギャラのトラブルなどに直面することも多い。そのような場合には、音楽家ユニオンが力になり問題解決への手助けをするということが紹介された。</p>

《学生のことば》

・録音をするまでの時間の短さに驚きました。初見な上に他の人と合わせを含めて約1時間程度で出来上がることに、さすがプロだと思います。（神戸/フルート/3年）

・とても参考になりました。そして感動しました。私も、もっと深いところにある真の「音」を聴ける耳を育てていきたいと思います。（昭和/アートマネジメント/1年）

・将来、音楽講師として働くようになった場合、日本音楽家ユニオンの存在が活かされると思います。また、機械に出来ないような演奏を心がけることが大切だと感じたので、今後の演奏活動にその心がけが活かされると思います。（昭和/声楽/1年）

・自分でいろんな楽器を作ってしまうというところに驚きました。また、オーケストラの録音は、みんなで合わせて録るのではなく、個室で別々に録り、後で合わせていたことに驚きました。（神戸/舞踊/3年）



・近年音楽や書籍の電子化が際立っていて、それに関して音楽家の仕事の減少している事が気になっていましたが、対抗する方法は「生音を生の人間に発信」することにある、という考えに納得しました。（東京/音楽教育/3年）

・“現場”のこと、それは実際にそこで働いている人が肌で感じたことだから、その人がしゃべる言葉は興味深い。特にこちらから質問すればするほど、裏の裏がどんどん聞けるから、楽しかった。やはり質問形式の時が一番充実していた感じがする。「食欲だからこうしてここにいるのかな」音楽業界で自分の居場所を見つけるのはこれにつきと思う。時々かい間見える先

生の音楽に対する情熱も感じられて良かった。（東京/ピアノ/3年）

・ユニオンのことを私はよく知らなかったのですが、活動に参加してみたいです。スタジオで録音するにも生音でやるにも、「この音はなぜ鳴らす必要があるのか」「どのようにこの音を鳴らせば良いのか」を真剣に考えて演奏する事には変わらないということが分かりました。コンピューター技術が進化すればするほど、「演奏会で生音を聴く」ことの貴重さ、大編成オーケストラでしっかり演奏することの重要性がでてくると思いました。（昭和/アートマネジメント/1年）

・なかなか聞くことができない、様々な音楽の仕事についてのお話が聞いて本当に良かったです。スタジオ録音や演奏家のギャラのことなど、知らないことが多く、興味深かったです。コンピューターにはできない、人の音楽についてのお話は、これから音楽をやっていく上で、忘れてはいけないと思いました。（東京/ピアノ/2年）



※写真は東京音楽大学の様子。

ジュリアード音楽院を卒業し、ニューヨーク・フィルを始めとする諸団体にティーン・アーティストとして活躍する3名の講師を米国より迎え、3大学合同夏期セミナーが開催された。

プログラムは3日間にわたり、最終日には、講師による小学生を対象とした「インタラクティブ・コンサート」の実演が行われ、実践的で創造性に富む内容のセミナーとなった。以下、その概要を報告する。

本セミナーは2010年9月1日(水)から9月3日(金)まで、3日間の日程で実施された。受講生は、3大学の学生60名(内訳:神戸女学院大学15名、昭和音楽大学25名、東京音楽大学20名)。「ミュージック・コミュニケーション講座」では、インターネット・ビデオ会議システムを通して意見交換してい

る3大学の学生及び教員が、会場の東京音楽大学で一堂に会し、セミナーを通して活発に交流した。

講師は、ジェイニー・チョイ氏(Janey Choi, DMA、ヴァイオリン)、ジヘー・ホン＝パーク氏(Jihea Hong-Park、ピアノ)、ウェンディ・ロウ氏(Wendy Law、チェロ)の3名である。プログラムにおいては、アストル・ピアソラ作曲『ブエノスアイレスの四季』より《ブエノスアイレスの春》、エドワード・エルガー作曲《愛のあいさつ》、フランツ・ヨーゼフ・ハイドン作曲《ピアノトリオ》Hob. XV:5より第3楽章、ポール・シェーンフィールド作曲《カフェ・ミュージック》より第1楽章をもとに、アクティビティやインタラクティブ・コンサートが行われた。

[9月1日]

9:45-11:15 #1 Introduction to Aesthetic Approach (音楽の美的要素へのアプローチ 導入編)

はじめに、講師陣がピアソラ作曲の《ブエノスアイレスの春》を演奏し、圧倒的なパフォーマンスで学生の心をつかんだ。講師の自己紹介に続いて、学生同士の自己紹介やストレッチなどのウォーミング・アップを行い、皆が少し打ち解け始めたところでアクティビティへと移行。アクティビティは音楽の「繰り返しのパターン」を発見することから始められ、タンバリン、カスタネット等の楽器を持ち、講師のリードでドラムサークルの実施へと発展した。タンゴのリズムを構造的に体感した上で、講師による演奏を再度鑑賞。講師は学生に、「この作曲家がいかにしてシンプルでリズムミックなアイデアを拡大し発展させ、1つの曲にまとめていったか」を考えるよう促した。

12:15-13:45 #2 Understanding the Essence of Aesthetic Approach (音楽の美的要素へのアプローチの本質を理解する)

大学・専攻を混合した複数のグループに分かれ、午前中のアクティビティを通して気づいたこと等(reaction, question, confusion, observation)について意見を交換。アクティビティ、すなわち絵を描いたりジェスチャーをすることがどのようにして音楽を内側から理解することにつながっているかについて議論した。次に、アクティビティでは「scaffolding (足場づくり)」がどのように行われていたか、ロウ講師が学生に尋ねながら分析し、Warm-up activity、Entry point、Activity、Performance、Reflectionの5つのステップに分類した。

アクティビティにおいて重要なことは、interactive、つまり聴衆に話しかけるのみならず、もう一歩踏み込むこと。そして、あらかじめ唯一の正解というものではなく、学習者の個人的な学び(personal connection)に入口(doorway)を与えるだけである。したがって#1で実践したアクティビティでの「繰り返しのパターン」の発見は単なるきっかけであり、そこには様々な目的があることが解説された。

14:00-15:30 #3 How to Program Interactive Concerts Planning Process

(インタラクティブ・コンサートのつくり方:組み立てのワークシートについて)

「Skills and Strategies for Creating Interactive Concerts」と題したパワーポイントをもとに、インタラクティブ・コンサートのつくり方についての講義。アメリカでの実践例を紹介しながら、テーマや関連性を持たせること等のポイントが説明された。主な内容は、次の通り。

・「エントリー・ポイント」について

エントリー・ポイントとは、多重知性(Multiple Intelligences)理論に基づいて提示される、音楽に対する理解を促すヒントのようなもので、ジェスチャーやリズム打ち等の様々な手段を使用する。これを見つけるためには、楽譜を細部まで読み、何度も演奏を聴く必要がある。

・インタラクティブ・コンサートに必要なその他の要素について

その他の要素として、インタラクティブ・コンサートは、その80%が作り手の個性によると考えられ、個性を十分に発揮することが求められる。また、同時代のポップ・カルチャーを取り入れると良い。そして何よりも、楽しむこと。さらに、インタラクティブ・コンサートを行う場合は、自分たちで出向いて、アウトリーチ・コンサートや学校コンサートなどの機会を見つけてくるといった主体的な姿勢が必要なのである。

以上を踏まえ、Interactive Approachを、アーティストやアートマネージャーとしてそれぞれの分野にどのように適用できるのか、また、それが自分自身のキャリアの展望にどう関わるのか、講師も学生の席に入ってディスカッションが行われた。講師は「どんな人でも音楽を楽しめるということを知ってほしい」と強調し、このセミナーでは「ハイソサエティという壁を越えて音楽のコミュニケーターになること」を目指していると述べた。うまく弾くことだけではなく、演奏家、教育者、アドボケーターとして新しい聴衆を開拓していくことが重要なのである。

セミナー初日の終わりには、翌日に向けて「エルガー作曲の《愛のあいさつ》を聴き、そのエントリー・ポイントを考えてくること」が課題として出された。

[9月2日]

9:45-11:15 #4 How to Program Interactive Concerts Group workshop (II)

(インタラクティブ・コンサートのつくり方:グループ・ワークショップについて)

参加学生にとってはセミナーで初めて耳にする用語等があったため、2日目の初めに、初日の内容の復習が行われた。

続いて《愛のあいさつ》の演奏と、この曲のエントリー・ポイントをリストにする作業に入った。

まずは講師の演奏で《愛のあいさつ》を聴く。トリオ（三重奏）で演奏されることを念頭に置き、各楽器をよく聴いてエントリー・ポイントを考えるよう指示が出された。演奏後、学生が発見したエントリー・ポイントを書き出し、リストにして全員で共有した。

次に、全員が3つの教室に分かれて、グループ・ワークショップに移った。各教室で学生はさらに4～5名のチームに分かれ、チーム毎にリストの中から任意のエントリー・ポイントを選び、《愛のあいさつ》のアクティビティを考案する。その際、講師から次のような条件が出された。

- ・同学年程度の人を対象とする
- ・15～20人を対象にしたレッスンプラン
- ・5～10分程度のアクティビティ（ウォーミング・アップも含める）
- ・アクティビティを体験した後に、《愛のあいさつ》を聴いて「Aha～！（あ、わかった）」となるように
- ・いろいろな知能を活かせるよう、創造力を働かせて工夫する

12:15-13:45 #5 How to Program Interactive Concerts : Group workshop (2)
(インタラクティブ・コンサートのつくり方：グループ・ワークショップ2)

各教室においてチームで考えたアクティビティのプレゼンテーションが行われ、講師から「どんな知能を使うのか」「何をエントリー・ポイントにしているのか」を明確にしながら実践するよう助言があった。

14:00-15:30 #6 Discussion (ディスカッション)

ニューヨーク・フィルのティーチング・アーティストとしてのロウ講師の活動をDVDで視聴した後、各講師が指導した3つのグループから、各グループ1チームずつが参加者全員を対象にアクティビティをプレゼンテーションし、それに対して講師からフィードバックが行われた。

学生は、初日の午後は講義の内容を理解するのに若干苦勞している様子も見受けられたが、2日目は午前からのワークショップを経て、講師や他大学の学生とも随分と打ち解け、インタラクティブ・コンサートについても理解の足掛かりをつかんでいるようだった。また、翌日のインタラクティブ・コンサートに備え、「小学生のためのインタラクティブ・コンサート観察ポイント」と題したプリントが学生に配布された。



【9月3日】

9:40-12:10 #7 Interactive Concerts for Elementary School Children "Mixing It Up!"
(小学生のためのインタラクティブ・コンサート「まぜ、まぜ、まぜ！」)

セミナーのハイライトとなったのが、豊島区立目白小学校4年生を対象とした「インタラクティブ・コンサート "Mixing It Up!"」の鑑賞である。出演は3名の講師と通訳的那智上里子氏。小学生1クラス（29名）につき1回40分のコンサートを3クラス分、計3回開催された。

内容はピアソラ、エルガー、ハイドン、シェーンフィールドの作品4曲を演奏し、それぞれの曲についてアクティビティを行うというもの。楽曲が、いくつかの音楽的な素材を混ぜることによってできているということ、子どもにもわかりやすいイメージや体の動きを使って体験する。

ピアソラの《ブエノスアイレスの春》では、ベースのリズムに「ピアソラ」、タンゴのリズムに「わさび・わさび・タンゴ」という言葉を当てはめて、リズムを体験するアクティビティ。

エルガーの《愛のあいさつ》では、ベースのリズムに「I love you」という言葉を当てはめるとともに、メロディーに合わせて手を差し伸べるような動きを付けて表現するアクティビティ。

続くハイドンの《ピアノトリオ》では、特徴的な3つの音型に「かえる」、「うなぎ」、「ゴキブリ」のイメージを付け、それぞれの音型をヴァイオリン・チェロ・ピアノの3つの楽器で担当。そして、担当の音型を交代することによって混ぜてみるというアクティビティ。最後のシェーンフィールドの《カフェ・ミュージック》では、4人の小学生がシェフの帽子をかぶり、音のカードを持ってブルースの音型、スウィングのリズム、ラグタイムのシンコペーションを体験するアクティビティ。講師がカードを鍋に入れてこれらの要素が「混ざっている」ことをわかりやすく示した。4曲が終了した後には、小学生からの自由な質問に答えるというものであった。

コンサートは3回行われたが、対象となる小学生のクラスが異なると反応も異なる。例えば、やや大人しいクラスは、《愛のあいさつ》のアクティビティの際に神戸女学院大学の舞踊専攻の学生が小学生をリードするなど、サポートにも変化があった。回がすすむにつれ、会話や説明時の間の取り方が合うようになり、講師は小学生からの様々な反応や質問に応じていた。また、常に笑顔絶やさず、エネルギッシュに進めていくことによって、コンサート全体に流れがあり、小学生を惹きこむ元気いっぱいのコンサートが繰り広げられた。

12:20-13:20 Lunch Reception (交流会)

コンサート終了後、昼食を兼ねた交流会が開催された。3大学教員の挨拶や当日のゲストの紹介の後、3名の講師と3大学の教員・学生・通訳者ら全員が、会話や写真撮影等を楽しみ、交流を深めた。

13:45-15:15 #8 Summary (総括)

2日目に配布された「観察ポイント」に沿って、学生に質問しながらインタラクティブ・コンサートについての振り返りが行われた。主なポイントは次のようなものである。

- ①インタラクティブ・コンサートで、どのようなマルチプル・インテリジェンス（視覚、聴覚、運動能力、言語能力、対人関係の能力など）を使用したか
- ②ピアノ、エルガー、ハイドン、シェーンフィールド、それぞれの曲に、どのようなエントリー・ポイントが使われたか
- ③インタラクティブ・コンサートをするならば、どんなコンサートをどこでやってみたいか

振り返りが終わると、講師自身がインタラクティブ・コンサート活動に至った経緯について語った。講師がインタラクティブ・コンサートを始めたきっかけには、ジュリアード音楽院の大学院生を対象とする「モース・フェローシップ・プログラム」の経験があった。このプログラムでは講義のみならず、彫刻や絵画、即興等様々な種類の Aesthetic Education を体験する。そして、週に1度公立学校の音楽の授業で Aesthetic Education を行い、それらの活動を通して、常にパワフルであることを学んだのである。その後ティーチング・アーティストとして、学校での指導やインタラクティブ・コンサートを行う活動に至っている。

最後に「あなたにとっての Aesthetic Approach とは何か」という総括が行われた。セミナーで学んだいくつかの新しいキーワードの意味を、学生に質問しながら次のようにまとめた。

- ・Aesthetic Education…学生の回答は、「音楽の内側に入って理解する」。講師は英語で「go into the music, learning and connecting through experience」と定義した。しかし唯一の答えはない。実際に活動を見てもらうまで、友人でさえ理解できないかもしれない。「まず体験」なのである。
- ・Entry Point…「曲のセールス・ポイント」という学生の回答に講師も大いに賛成。聴き手にとって理解の手助けとなる入口であり、音楽にはたくさんのエントリー・ポイントがある。
- ・Multiple Intelligences…学生にとってはやや難解だったようだが、「音楽を耳で聞くこと以外の、視覚や身体を動かすこと、言葉等を使うこと」という回答。人によって学び方が異なるため、様々な能力を指す。
- ・Interactive…「コンサートの場に居合わせる全員が参加する」という学生の回答。講師は英語で「Everyone of the concert is involved」と表した。

まとめが終わり、講師はお互いの出会いに感謝の言葉で締めくくった。セミナーは、音楽をより一層理解するためにも、また、将来の音楽活動やキャリアに向けても大きな可能性を拓くことになる、期待感に満ちた3日間となった。

《学生のことば》

・音楽に対しての視点が変わった。インタラクティブ・コンサートを初めて見て、今まで聴きに行った演奏会よりも子供たちが集中しているのを見ることができて良かったです。この3日間で得たことを10月の合同コンサートで活かしていきたいです。

(神戸/ピアノ/3年)

・すごく色々な事を学びました。知る事ができました。私がこの先やっていきたい活動へのヒントがたくさん盛り込まれていました。自ら動くという事の大切さ、待っていても何も始まらない、本当にやりたいのなら動くしかないという事を改めて知りました。綺麗に演奏するだけではやっていけないという事がよく解りました。本当にこの授業を選択して良かったです。今回の学び得た事を活かして将来絶対に活動していきたいです。

(神戸/舞踊/3年)

・半年間IV会議システムを通してディスカッションをしていたので、他大学のみなさんが画面の中という遠い存在だったけど、今回直接にディスカッションできて、今後の画面でのディスカッションや講義がもっと発展していけるのではないかなと思った。色々な人と話し合い意見を出し合うことで、さまざまな気づきを得ることができた。

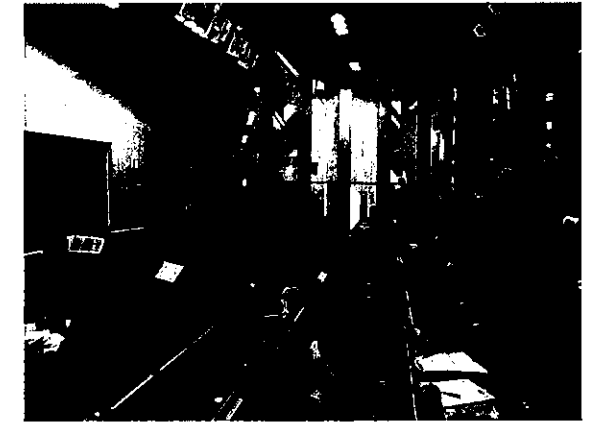
(神戸/フルート/3年)

・私は初めてインタラクティブ・コンサートに触れました！クラシック音楽界の観客層が高齢化している今、このようなとても新しくおもしろいコンサートのジャンルがあると知って、嬉しかったです。授業形式も、思った事をどんどん言える環境を作って下さったのでとても良かったです。よりよいインタラクティブ・コンサートをつくるために、私はもっと音楽以外の色々な事に興味を持ち、多方面から、多視点から音楽について考えられるようにしていこうと思います。

(昭和/アートマネジメント/1年)

・自分が思っている以上に音楽の伝え方がたくさんあるのだなと思いました。学校では習っていない事もこのセミナーで学ぶことができて良かったです。

(昭和/アートマネジメント/2年)



・教えてくださったこと全てが自分が学んでいる音楽療法につながっていて感動しました。よく活かしていきたいと思いました。ありがとうございました。

(昭和/音楽療法/1年)

・今後、私ができること、やるべき事は何なのか、ピアノばかり弾いてきた自分に、相手に何を伝えられるのか色々と迷っていましたが、入り口が見えたように思います。

(東京/ピアノ/1年)

・コンサートのプログラムを考える時にどうしても演奏者本位のプログラムになってしまいがちだが、演奏者だけでなく聴衆にもその音楽について深く知る権利があるし、知るための布石を投じることで、もっと聴衆にとって音楽が身近になる。そんなことを改めて考えさせられた講座でした。

(東京/ヴァイオリン/4年)



※写真は小学生のためのインタラクティブ・コンサートの様子。

2-5 2010年度「ミュージック・コミュニケーション講座」

第4回実施報告

講座の名称	第4回ミュージック・コミュニケーション講座 「弾く人・聴く人・つなぐ人」
講師	重本 昌信氏（重本音楽事務所代表取締役、NPO 法人文化行政サポートセンター理事長） 安原 理喜氏（オーボエ奏者、東京音楽大学准教授）
実施日時	2010年10月6日（水）18:30-20:00
実施場所	東京音楽大学 A館地下100
講座の概要	<p>3大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」の第4回は、重本音楽事務所代表取締役を務める重本昌信氏と、オーボエ奏者であり東京音楽大学准教授の安原理喜氏を迎えて、東京音楽大学にて実施した。</p> <p>「弾く人・聴く人・つなぐ人」と題された本講座では、重本氏と安原氏の対談形式により、講師の実体験を交えながら音楽家として成功するための条件、マネジメントする側の心得などが話された。</p> <p>演奏家になることを目指す人に必要なことは、ビジョンをしっかりと腕を磨き、早い段階から仕事を選ぶこと。そして学生時代は職業訓練期間だと考え、お金をもらって演奏する経験を必ずしておくことが大切だという。また、音楽家のマネジャーになるには、まずは自分自身も音楽家としての経験を積む必要性があり、音楽を聴く耳をもっていないマネジャーは良い演奏会を提供することができず、知らずのうちに演奏家に手を抜かれてしまう可能性があるとのことだった。</p> <p>重本氏は、現代の社会において「音大生は使えない」等と言われることが多々あるようだが、音大は素晴らしい人材であふれていると言い、音楽の練習で培った忍耐力は仕事をする上でも役立つと述べた。ただし、卒業後、演奏家になることだけが成功者だという考え方もつのは、その人の可能性を狭めてしまうことになるので注意が必要だとし、演奏というコミュニケーションツールを身に付けた人は他業種においても成功する可能性を秘めており、このツールをどのようなかたちで活かして行くかという事が大切であると、講座を締め括った。</p>

《学生のことば》

・やはり音楽マネジャーになるためにはコミュニケーション力が必要不可欠だと改めて思いました。それから社会人としてのマナー、態度、立ち居振る舞いも大切だと思いました。

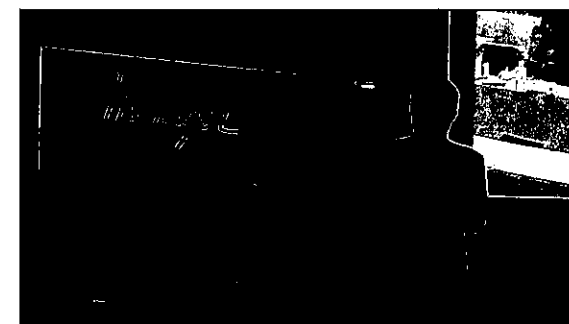
（東京 / ピアノ / 1年）

・自身が活躍するには、人と同じことをしてはいけないということ。目標を立てて、「私はこれが苦手だから、これでやっていくのだ！」という強い信念と、自信に圧倒されました。そして、周りのせいにはせず自分自身を客観的に捉えて、良いところをどう伸ばすか悪いところをどう処理するかなど、そのような考え方に感激しました。

（神戸 / 声楽 / 3年）

・音楽家には、自分をマネジメントする精神的な強さも必要だと思いました。就職するか起業するか、どちらかを決めた方が良いという言葉が印象に残りました。今の自分が、将来なりたい自分と比べて何が足りないのかを知る必要があります。

（昭和 / アートマネジメント / 1年）



・アートマネジメントについて、具体的なお話がたくさん聞けてよかったです。音楽家としてだけでなく、社会人として生きていく上で大事なお話だったと思います。これから音楽やマネジメントの勉強をしていく上で、とても元気が出るお話でした。

（東京 / ピアノ / 2年）

・今までマネジャーの方の話聞く事なんてなかったもので、何もかも新鮮でした。とても印象的で、業界人といった感じでした。一番印象に残っているのは、何度も重本さんが仰った「目標をつくる」ということ。確かに何も考えずに

過ごすより、目標を立てて過ごす方が行き先が見えて充実していると思いました。

（神戸 / 声楽 / 3年）

・マネジメントをする上で、判断力と即決力が大切であることを学びました。自分なりの優先順位を定める必要性を感じました。マネジャーとして大切な事は、大学生活の中で養われ、それは社会人としても大切な事なのだと思います。

（昭和 / アートマネジメント / 1年）

・将来を考え、決めるにあたって必要なことや、最近考えていたことが凝縮された授業だった。特に、コミュニケーション力についてのお話（コミュニケーション＝相手の欲しがっているものを知ることができる力）が印象に残ったし、役に立つことだと思った。

（東京 / 音楽教育 / 3年）

・もっと舞台の数を増やそうと思いました。学生の間にもっと経験して学んで恥をかき、その積み重ねが、自分の夢に繋がるのだと改めて思いました。もっと働こうと思います。

（神戸 / 舞踊 / 3年）

・今日、先生方の言葉で一番印象に残ったのは、始めの方におっしゃった「目標を決める」ことです。思えば自分も、提出する課題など、ぎりぎりだとしても何とかこなせていました。しかし、これは普段からもつことが大事で、それこそ自分自身への成長につながると思いました。すでに遅いかもしれませんが、まだ目標が定まっていません。それでぐらぐらと精神がゆれる日も多くあります。とにかく、自分自身をもっと見つめ直そうと思いました。

（東京 / ピアノ / 1年）



※写真は東京音楽大学の様子。

2-6 2010年度「ミュージック・コミュニケーション講座」 第5回実施報告

講座の名称	第5回ミュージック・コミュニケーション講座 「私たちの音楽が、生まれた～ギルドホール音楽院での学び～」
講師	東 瑛子氏 (英国ギルドホール音楽院リーダーシップ修士課程修了、神戸女学院大学大学院音楽研究科生)
実施日時	2010年11月10日(水) 18:30-20:00
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 オルチン館
講座の概要	<p>「ミュージック・コミュニケーション講座」の第5回は、この9月に2年間の英国留学を終えて帰国したばかりの東瑛子氏を講師に迎え、神戸女学院大学より他の2大学に配信された。</p> <p>講座は「コミュニケーション」と「クリエイション(創造)」をキーワードに、英国ギルドホール音楽院リーダーシップ修士課程での学びを踏まえて展開された。</p> <p>まず、ギルドホール音楽院におけるプロフェッショナル・ディヴェロップメント教育(学部での基礎教育)と大学院におけるリーダーシップ専攻の教育システムについて、写真やグラフを含むパワーポイント、DVDを用いて紹介がなされた。</p> <p>この音楽院には、世界各地から各々異なる文化的背景と専門(ジャズ、クラシック、民族音楽等)を持つ学生たちが集まり、自分達のアイデアを交換して相互に学び合う学習環境があり、講師(クラシックのヴァイオリンが専門)はこのような日本とは全く異なる場に身を置くことで、音楽には、異なる文化圏の人と互いにコミュニケーションを育み、新たなものを創造していく力があることに気付いたと言う。</p> <p>次に、実践の一例として、リーダーシップ専攻生たちが地元の小中高校生たちをリードしながら一丸となって自分達の新しい音楽を創り上げる「グローブタウン・プロジェクト～スマイル～」の様子がDVD視聴を交えて紹介された。歌詞や音楽的アイデアを子どもたちから引き出し、楽曲としてまとめ上げるには、音楽家として高い能力と大きな技倆が必要とされることが画面から伝わってきた。</p> <p>最後に、「音楽は言葉のようなもの。自分の音楽的な語彙を増やし、これまで知らなかった語彙を積極的に取り入れていくことで、コミュニケーションを促進し、新たな創造を生み出すことができる。クリエイション(創造)という音楽アプローチを用いることで、より広い世界で、より様々な人と繋がっていくことができることを皆に知ってほしい」と音楽の新たな可能性を示唆して、講座を締め括った。</p> <p>質疑応答では、受講生から「社会に出た際、具体的に自分に何ができるか悩んでいる。先生はどうですか?」といった質問が出て、講師が若く、受講生に近い立場であるからこそその共感性が強く感じられた。</p>

《学生のことば》

・音楽の使い方がたくさんあるということ。これから先、音楽が持っている力をどうやって育てていくか、音楽の世界は夢と期待であふれていると初めて感じた。

(神戸/フルート/3年)

・今日一番印象に残ったのは「創造から新しい自分を見つける」という言葉です。音楽を自己表現のツールだなんて考えたこともなかったので、新しい発見でした。

(神戸/声楽/3年)

・「音楽は目に見えない。数値化できない。だからこそ“力”がある」という言葉が印象に残りました。ダンスも数値化できないという点では同じです。今は何でも数値化しようとする傾向の世の中ですが、それが全てではないのだということに改めて感じました。

(神戸/舞踊/3年)

・日本の音楽大学もギルドホール音楽院と同じような活動を行っているような気がするのですが、やはり違うものなのでしょうか。日本に足りないものって何なのでしょう。

(神戸/舞踊/3年)

・映像と音楽とのコラボレーションの記録映像を見ていて、2つの芸術が力を合わせると、今までになかった新しい作品が作れるのかなと思いました。

(神戸/ピアノ/3年)

・「音楽に関わる人間としてのあなたの役割は何ですか」と突然質問を投げかけられた時はびっくりして、しどろもどろになってしまいましたが、音楽に関するどの仕事についても、自分の感じたこと等を伝え、共有し合うことが大切だ



と思いました。プロジェクトのDVDを見て、子どもの想像力はすごいなと思いました。

(東京/ピアノ/1年)

・音楽を小さい世界(日本)で見るとではなく、広い世界として見ていくということを今日の講座を聞いて感じました。新たな創造を生み出すのは難しいのでは?と聞いていました。しかし、私より5歳若い中学生、10歳若い小学生はいつも簡単にいろんな世界を創り出すことができます。創造するためには、自分の心や身体も若返って「純粋に楽しもう」と思う気持ちが大切なのではと思いました。

(東京/ピアノ/3年)

・先生の感じていらした不安や恐れを、私もとても思いました。2つの質問(音楽に関わる人間としてのあなたの役割は?社会における音楽家での役割は?)は私の中で、様々なことを考えるきっかけになりました。

(東京/ピアノ/1年)

・とても共感できました。特に最初の問いかけなど、私は音楽だけを学んでも、自分が世の中の役に立つことはできないと思ってアートマネジメントコースに入ったので、改めて説得されたような気持ちでした。音楽にかかわらず、芸術はもっと視野を広げるべきだと感じました。世界の他の国や他の芸術とコラボレーションするという行為は、とても興味深く、私もこれから実践したい分野です。

(昭和/アートマネジメント/1年)

・音楽だけでなく、美術や映像、ダンスなど、様々な芸術に触れて自分のスキルをより豊かに養う教育はとても新鮮でした。また、体験して養った芸術を地域に還元するという考え方がとても印象に残りました。

(昭和/アートマネジメント/1年)



※写真は神戸女学院大学の様子。

2-7 2010年度「ミュージック・コミュニケーション講座」 第6回実施報告

講座の名称	第6回ミュージック・コミュニケーション講座「ホールの内でも外でも本物の音楽を！～アートNPOの社会的役割とその仕事～」
講師	田中 玲子氏 (NPO法人トリトン・アーツ・ネットワークディレクター) 櫻井 あゆみ氏 (同アソシエイト・ディレクター)
実施日時	2010年12月1日(水) 18:30-20:00
実施場所	昭和音楽大学 南校舎 C511 階段教室
講座の概要	<p>今年度新規開講した3大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」の最終回は、NPO法人トリトン・アーツ・ネットワークの田中玲子、櫻井あゆみの両氏を講師に迎え、昭和音楽大学からインターネット・ビデオ会議システムを通じて発信した。</p> <p>初めに、両氏が現在の仕事に至るまでの経緯に触れ、続いてレジュメをもとにトリトン・アーツ・ネットワーク (TAN) の取り組みについて紹介があった。アートNPOとしての社会的役割にもとづき、TANは「音楽が広げる人間の輪」、および音楽を「広げる」「創る」「育てる」をキーワードとして活動を行っている。事業は第一生命ホールにおける自主企画公演とともにコミュニティ活動が柱となっており、特にアウトリーチはTAN独自の定義を持ち、アーティストの熱心な協力を得て活動の広がりを見せている。その現場の様子が、DVDを視聴しながら解説された。さらにTANの活動を支えるボランティア組織の重要性や、求められる人材像について「お客様にどんなものを届けるのか」「アーティストとして何をやりたいのか」を常に考えながら、関わる人が皆でひとつの良いものを作り上げていく姿勢の必要性が語られた。質疑応答では、学生からの「アウトリーチで現代音楽を演奏した場合の反応は」「子どもにどのように指導すれば興味を持ってもらえるのか」等の質問に経験を踏まえた具体的なアドバイスを得た。</p> <p>結びに東京音楽大学の武石教授より、音楽と関わるうえで、従来の立場を超えて仕事の間や活動の間を自分なりに「プロデュース」していくことが大切であるとの総括があり、今年度の講座の締め括りとなった。</p>

《学生のことば》

・私は子どもたちにも分かるような音楽を演奏するとなると、クラシックには何があるのか悩むときがあります。そんな中で、今回のDVDを見て、難しい曲を演奏しているのに子どもたちは興味を持ってきているのが印象に残り、私が演奏家になるならば、音楽でいろんな人との輪を築きたいです。

(昭和/声楽/1年)



・NPOやアウトリーチの活動が自分に近く感じられるようになりました。私もボランティアでアウトリーチに参加したいです。私の想像を絶する量の活動をしてもらって感激しました。音楽の可能性がどんどん広がっていることが分かりました。社会の中で、自分が「音楽」を通してどう貢献できるかを考えていこうと思います。

(昭和/アートマネジメント/1年)

・今日の講座で一番印象に残ったことは様々なコミュニティ活動です。サンキューコンサートや630コンサートに驚きました。聴衆のことをよく考えてコンサートを催しているなと思いました。コンサートの名前だけでも楽しそう！

(神戸/声楽/3年)

・アウトリーチの現場DVDを見せて頂き、幼稚園でのアウトリーチは印象的でした。幼稚園で「序奏とタランテラ」を持ってくるとは思いませんでした。私たち音楽を学ぶ人間はこの曲の「技巧的な曲で凄い」という点に目が向きやすいです。でも、子ども達はその曲を「面白い」と感じ、身体を揺らしたり、弦を弾いて弾く奏法や音の跳躍も楽しいと感じたりして貰えるのだと知ることができました。

(神戸/ヴァイオリン/3年)

・アウトリーチの現場 (DVD 視聴) での「Meet the 和楽器」で、お箏を使って子どもたちに創作 (作曲表現) という発想が新鮮でした。

(神戸/ピアノ/3年)

・トリトン・アーツ・ネットワーク (TAN) というものを今回初めて知りました。ライフサイクルコンサートやクリスマスコンサートなど、たくさん盛り込まれていてとても良いと思います。実際に行われたアウトリーチのDVDを見ましたが、演奏者側の熱意のようなものはたとえ幼稚園児であっても伝わるといことが分かりました。音楽を通して伝えるのは簡単ではないと改めて思いました。

(東京/ピアノ/1年)

・普段よく耳にしている「NPO法人」でしたが、どのような団体なのか理解できていなかったのが、今回の講座で「NPO法人」の目的や主な事業内容を知ることができて非常に良かったです。地域に愛されるホールにするために、たくさんのコンサートを企画し、それぞれ対象のお客様が違ってホールを活用して非常に素晴らしいと思いました。また、団体のメンバーはボランティア活動を望む人達で、NPO法人がその人たちの活動の場にもなっているので、非常に効率のよいものだなと感じました。

(東京/ピアノ/2年)

・これから音楽を伝えていかなければならない側となっていくと思います。そこで私は、ただ自分の演奏だけに集中してそれで終わり…というコンサートではなく、様々な人と一緒に音楽を知り、楽しめるようなコミュニケーションのあるコンサートを企画できるようになりたいです。

(東京/ピアノ/1年)



※写真は昭和音楽大学の様子。

第85期 (平成27年度) 学生生活のよきよき生活の推進と向上
Ⅱ-3 3大学合同コンサート「子どものためのスペシャル:コンサート~
音楽で広がるイメージの世界~」実施報告



神戸女学院が贈る「子どものためのコンサート・シリーズ」第29回

3 大学饗宴！子どものためのスペシャル・コンサート

～音楽で広がるイメージの世界～実施報告

演奏会の名称	神戸女学院が贈る「子どものためのコンサート・シリーズ」第29回 3大学饗宴！「子どものためのスペシャル・コンサート～音楽で広がるイメージの世界～」
出演者	昭和音楽大学、神戸女学院大学音楽学部、東京音楽大学の学生
実施日時	2010年10月16日（土）15:00-16:30（16:30-17:00 楽器体験）
実施場所	神戸女学院大学 講堂
概要	<p>本公演は「音楽で広がるイメージの世界」と題して、音楽のもつ広大で豊かなイメージの世界を、子どもたちに体験的に感じ取ってもらうことを目的として企画・実施した。企画の全体プランは、主催校の提案を基に3大学の教員が話し合って決定した。制作は3大学の学生たちが担い、遠隔地にいながらもインターネット・ビデオ会議システムやメールを活用して進めていった。出演も3大学の学生が務め、昭和音楽大学は声楽とピアノ、神戸女学院大学音楽学部はフルート・アンサンブル、東京音楽大学は小オーケストラを用い、子どもに分かりやすいお話を交えながら、それぞれが30分ずつの演奏を行った（各校のテーマとプログラム詳細は別途項目参照）。</p> <p>終演後の「楽器体験コーナー」では各大学の学生たちが、希望する子どもたちに対して、公演で使用した楽器（フルート、ヴァイオリン、ピアノ、打楽器、声楽）の体験指導を行った。</p>
入場者数	計330名（内訳：子ども151名、大人179名）
プログラム	<p>◇昭和音楽大学プロデュース＜水と光のイメージ＞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「ラクメ」より 花の二重唱（L. ドリーブ） 2. 競艇前のアンゾレータ（G. ロッシーニ） 3. 雨だれの前奏曲（F. ショパン） 4. 「愛の妙薬」より ラララの二重唱（G. ドニゼッティ） 5. 「シャモニーのリンダ」より この心の光よ（G. ドニゼッティ） 6. オーソレミオ（E. カプア） 7. フニクリフニクラ（L. デンツァ） <p>◇神戸女学院大学音楽学部プロデュース＜アラベスクの音楽＞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. アラベスク2番（C. ドビュッシー） 2. カノン（J. パッヘルベル） <p>「音楽の捧げもの」より（J.S. バッハ）</p> <ol style="list-style-type: none"> 3. 2声のカノン 4. 4声のカノン 5. 6声のリチェルカーレ <p>◇東京音楽大学プロデュース＜どうぶつの音楽＞</p> <p>「動物の謝肉祭」（C. サン＝サーンス）</p> <p>◇3大学合同アンコール</p> <p>ジャングル・ダンス（W. オッフエルマンズ）</p>

《学生のことば》

・持ち時間はどの大学も同じなのに、各大学の良さがそれぞれ出ていて、学校によってこれほど違うものが出来上がるのかと驚いた。

＜神戸／2年＞

・お客様への対応を見直して次に活かしたい。言葉遣い、目を見てお釣りをしっかり渡す、笑顔で声は高め。

＜神戸／3年＞

・1つのコンサートをするには、たくさんの時間とたくさんの手、アイデアが必要。舞台を作り上げることの厳しさ、難しさ、楽しさを知りました。

＜神戸／3年＞

・コミュニケーションをもっと積極的に取ること。自分の状況を相手に伝えること。

＜神戸／3年＞

・他大学のみなさんと子ども達に助けて頂きました。もちろん先生方やスタッフの方々、仲間にも助けられてばかりでした。

＜神戸／3年＞

・舞台に立って改めて、普段の演奏会とは違うと、たくさんの小さなお客様を見て感じた。同時に、ごそごそしている子どもが30分飽きずにいられるかと不安になったが、ステージが進むにつれて、どんどん笑顔が増えていく子どもの顔が心に残った。

＜神戸／3年＞

・舞台に立つ人が一番大変かと思っていましたが、裏方は相当大変だということが、自分や他の人を見て分かりました。

＜神戸／4年＞



・今回の演奏会では「演奏力」より「表現力」が求められたように思います。普段ない経験だったので新鮮でしたが、そういう心構えを持つのが遅すぎたように思えます。

＜東京／4年＞

・それぞれの団体の個性があるので、意見をまとめるのは大変かもしれない。でも、こういった交流の機会は沢山あるべき。

＜東京／4年＞

・楽器体験をしている子どもにメロディーを弾いてもらい、私が伴奏してアンサンブルをすると、親御さんが「いつもとは違う子どもの表情」にとっても驚いていたことが印象に残りました。

＜東京／3年＞

・自分から発信していくだけではなく、相手の話を聴き、引き出すことも大切だと思った。

＜東京／2年＞

・各大学とも企画は大変工夫されていたと思う。ただ、自分の大学もそうだが、子どもたちの年齢層が大変広がったので、言葉遣いなどはさらに工夫が出来たように思う。

＜昭和／4年＞

・各大学間での考え方の違いなどがあるため大変難しいことだと思うが、もう少し形式が固まっていけば、うまくバランスが取れると思う。

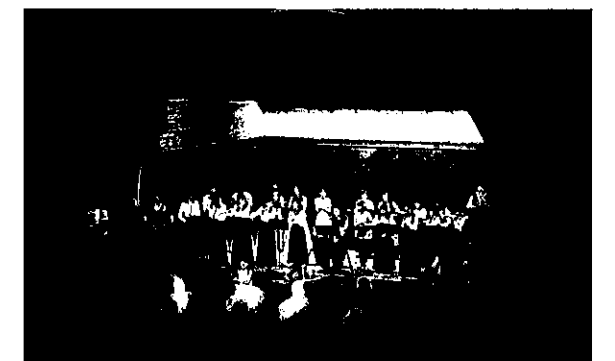
＜昭和／2年＞

・アクティビティなどを取り入れた際に、子どもたちが動作を一緒にやってくれていたことが大変うれしかった。

＜昭和／4年＞

・これまではレセプションの業務経験が多く、舞台袖に張りつく仕事はあまり経験がなかったので、舞台に近いところで仕事が出来たことが心に残った。

＜昭和／2年＞



※写真は合同コンサートの様子。

《当日配布されたプログラム（3大学の学生が共同で作成）》

3大学の音楽! 子どものためのスペシャルコンサート

音楽で広がるイメージの世界

2016.10.16(土) 18:00開演
神戸女学院 講堂

神戸女学院大学音楽学部、慶応義塾大学音楽学部、山梨大学音楽学部が共同で制作した、子ども向けのスペシャルコンサート。音楽を通して、子どもたちの想像力を刺激し、音楽の世界を広げたいという思いから、3大学の学生が共同で制作した、子ども向けのスペシャルコンサート。音楽を通して、子どもたちの想像力を刺激し、音楽の世界を広げたいという思いから、3大学の学生が共同で制作した、子ども向けのスペシャルコンサート。

神戸女学院大学音楽学部、慶応義塾大学音楽学部、山梨大学音楽学部が共同で制作した、子ども向けのスペシャルコンサート。音楽を通して、子どもたちの想像力を刺激し、音楽の世界を広げたいという思いから、3大学の学生が共同で制作した、子ども向けのスペシャルコンサート。

昭和音楽大学プロデュース

水と光のイメージ

○プログラム

- ①「ラクメ」より
花の二重唱——(L. ドリロー)
- ② 筑紫節のアンブレター——(G. ロクサーニ)
- ③ 雨だれの前奏曲——(F. ショパン)
- ④ 「夏の夢」より
ラララ二重唱——(G. ドニゼッティ)
- ⑤ 「シモニーのリング」より
この心の光よ——(G. ドニゼッティ)
- ⑥ オートレミア——(E. カプア)
- ⑦ ユニクリフニクラ——(L. テンツァ)
ト……みんなであらおう!

指揮者: 山田 賢
ピアノ: 井上 真

神戸女学院大学音楽学部プロデュース

アラバスクの音楽

○プログラム

- ① アラバスク2曲——(C. ドビュッシー)
- ② カノン——(J. J. ケーヘル)
- ③ 「音楽のつげもの」より——(J. S. バッハ)
- ④ 2声のカノン
- ⑤ 4声のカノン
- ⑥ 6声のリチェルカール

指揮者: 山田 賢
ピアノ: 井上 真

指揮者: 山田 賢
ピアノ: 井上 真

指揮者: 山田 賢
ピアノ: 井上 真

東京音楽大学プロデュース

どうぶつの音楽

動物の園内祭 C. サン＝サーンス

○プログラム

- ① 豚と獅子王の行進曲
- ② おんどりとめんどり
- ③ 羊と獅子王の行進曲
- ④ 豚と獅子王の行進曲
- ⑤ おんどりとめんどり
- ⑥ 羊と獅子王の行進曲
- ⑦ 豚と獅子王の行進曲
- ⑧ おんどりとめんどり
- ⑨ 羊と獅子王の行進曲
- ⑩ 豚と獅子王の行進曲
- ⑪ おんどりとめんどり
- ⑫ 羊と獅子王の行進曲

指揮者: 山田 賢
ピアノ: 井上 真

神戸女学院大学音楽学部、慶応義塾大学音楽学部、山梨大学音楽学部が共同で制作した、子ども向けのスペシャルコンサート。

Ⅲ. 研究活動報告

1. アメリカにおける先進的音楽教育・音楽活動について

1-1 ニューイングランド音楽院「Entrepreneurial Musicianship Program」

1. イントロダクション

「5年後もし君たちが結婚していて子供がいたら年取がいくらあればボストンで生活していけると思う？」という質問で講師のEd Gazouleas氏（ボストン交響楽団ビオラ奏者でニューイングランド音楽院教授）はその日の授業を始めた。「もし怪我や故障で楽器が弾けなくなり仕事が出来なくなったら？医療保険はどうする？」問いかけられた学生のひとりが答える。「多分、年間500万は生活費として必要。怪我や故障で仕事が出来なくなることなど考えたことがなかった…」Gazouleas氏が対応する。「経済的安定を得ることも音楽家としての成功また人生設計のひとつ。それにはまずお金に対する賢い知識を得る必要がある。現実を直視し今から人生のキャッシュフローをシュミレーションすることは、音楽家であったとしても社会人として当然のこと。」その他、クレジットカードの負債は決して作るな、保険にはきちんと入れ等々、音大3年生を相手に今日のテーマは“Personal Financial Plan”である。授業の終わりにはプレスキット（自分を売り込む際に渡す資料一式で、経歴書、写真、付録資料等が含まれる）作成に必要な具体的なツール、自己のウェブサイトやブログを立ち上げる際に有効なインターネットサイト、音楽プロジェクトに助成してくれる団体のリスト、そしてマンツーマンでのキャリア面談の予定が伝えられた。

これは米国最古の音楽専門学校としての歴史を誇るボストン、ニューイングランド音楽院 New England Conservatory（以下 NEC）が2010年度より新しくスタートした Entrepreneurial Musicianship（音楽起業家）



ボストン交響楽団マネジメントのトップ、Mark Volpe氏をゲストスピーカーに迎えたクラスの様子。この日のテーマは“Where the money comes from”であった。

コースの授業での1コマである。

2. プログラム設立の経緯と理念

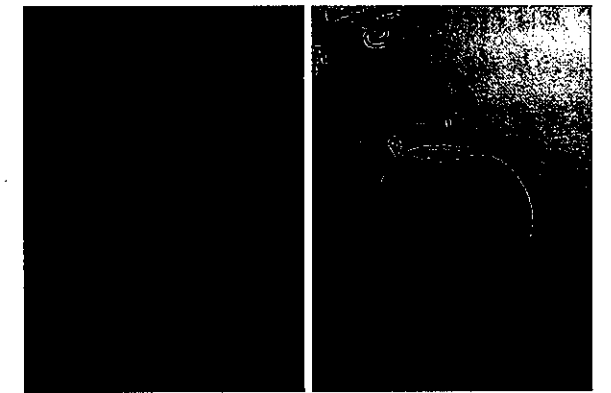
在学生、卒業生のキャリア開発に取り組んで18年、学生が有志で参加でき地域の様々な施設での演奏機会を得る Community Performances & Partnerships プログラムをスタートさせ8年となる NEC が、その集大成としてキャリア開発プログラムを体系的にまとめ更に“音楽起業家”というコンセプトをプラスし2010年9月の秋学期よりスタートさせたのがこの「Entrepreneurial Musicianship Program（音楽起業家プログラム）」である。これまではキャリアサービス部が NEC 学内にあり、そこで経歴書その他自己マーケティング資料、ウェブサイト立上げ等へのアドバイスや芸術団体でのインターンシップの照会、マンツーマンでの総合的キャリア相談などを必要に応じて学生に提供してきた。この既存の部門をリソースセンターと位置付け、引き続き親密に提携しながら、Entrepreneurial Musicianship Program は、学生である今現在から卒業後実社会で直面するであろう現実問題、例えばコミュニ

ケーション、ネットワーク作り、金銭マネジメント、健康等をクローズアップし、その考える動機や対処方法例等を提示する。音楽演奏技術習得以外に実際のキャリア構築に必要な項目を体系的に検証していくのだ。また一方で、従来の音楽家の雇用形態、例えばオーケストラや大学、その他音楽関連機関に雇用される、またはフリーランスになるに加え、自ら音楽事業を起業したり新たな雇用機会を創出できる様なクリエイティブな音楽起業家の育成を目的とする。全学生への必修科目の1つとなっている。

3. プログラムの目的

音楽家として、また一個人としての学生が持つ有効性と許容範囲を最大限に伸ばし、変化する市場や聴衆、また厳しさを増す経済状況からなる複雑な現代社会で成功出来るプロフェッショナルな音楽家を育成する。同時に音楽（教育）産業で音楽企業人として成功でき、将来このコースにアドバイザーの立場で戻り、次世代の音楽家達のロールモデルとなる様な人材を養成する。コースは専攻に限らず全学生への必修科目とし、専攻楽器・分野を超え互いに学び合い刺激し合うセッション形式の授業とする。コースが掲げる重要ポイントは以下の通り。

- 今日に可能な新しい機会を見つけ創り上げる企業家精神を発奮する。
- 音楽家として個人としての人生での成功につながるキャリア構築機会の創出プロセスを、具体的なツールを提供しながら指導する。
- 企画立案からリサーチ、実行プロセス、実施、そして事業評価まで、音楽プロジェクトの遂行過程を具体的なツールを提供しながら段階に沿って教授する。
- 現行の NEC キャリアサービスセンターのリソースを最大限に利用しながら、地域社会



クラス内に設置されたホワイトボードに学生やその他関係者が考える Entrepreneur Musician（音楽起業家）のイメージを自由に書き込める様になっている。

に存在するニーズや機会を学生につなげる。

- 学生に急速に変わりゆく社会また音楽業界への対応準備をさせる。

4. カリキュラム概要

学生が個々のゴール、成功の定義を考え、それらを盛り込んだ具体的なキャリアプランまたはプロジェクトプランをアドバイザーの指導を受けながら学期中2度、実際に作成する事が、このコース最大の課題となる。

コースは通算14週、1授業50分、2コースが設置されている。火曜日 4:00-4:50pm または木曜日 12:00-12:50pm。コースを必修にする試みとして短時間でフレキシブルな時間帯に設置された。

プログラムの専属スタッフは2名、また自らが音楽起業家として活躍する専任講師が14週間通して指導。加えてゲストスピーカー（新規音楽事業を起業したり音楽起業家と定義され実際に活躍する音楽家、オーケストラの執行部、音楽産業マーケティング担当者、メディア専門家、プロモーター等）が頻繁に授業に登場する。

2010年秋学期の授業テーマ

1週目：音楽起業家モデルの検証及びケーススタディ

- 2 週目：自己を最大限有効にするゴール、行動、信念
- 3 週目：キャリア開発における段階
- 4 週目：私は誰？何がしたい？専門性・実行可能な事業の分析そして開発
- 5 週目：成功を企画する -1 / ゴール設定とタイム・マネジメント
- 6 週目：成功を企画する -2 / マネー・マネジメントその予想と現実
- 7 週目：事業プランを書く
- 8 週目：チーム結成 / プロジェクトを遂行する際に必要な5人とは？
- 9 週目：キャリア成功必須ツール
- 10 週目：コンサート制作
- 11 週目：レコーディング&リリース
- 12 週目：ファンドレイジング / 助成金・スポンサーシップ・その他資金調達源
- 13 週目：インターネット & ソーシャルメディアマーケティング
- 14 週目：提携・連携先を探せ

5. プログラムのその他の特色

アドバイザー制度

創造性、事業性、生産性、独立性に代表される起業家精神を、前述した体系的なカリキュラムを通し学生に考えさせ、シミュレーションさせる機会を与えながら全員のボトムアップを図る一方、専攻を超えて集まる学生の持つ個々の違った課題に対応する為、「アドバイザー制度」が組み込まれている。マーケティング、広報、ファンドレイジング、マネジメントに代表される分野の専門家90名程度のボランティアリストがあり、個々の学生が必要とする分野の専門家がアドバイザーとして学生ひとりひとりに割り当てられる。1対1のコンサルティングが基本で、特にキャリアプランまたはプロジェクトプランを立てる課題に取り組む際に、学生に具体的な

アドバイスを提供する。

音楽起業家事業助成金制度

毎学期、NEC 全学生対象に公募された創造的で実行性のあるプロジェクトに助成金を供与する制度。助成金額は \$500 ~ \$1,500。助成されたプロジェクトは当該学生または学生グループが資金マネジメントを含め全てを遂行し、音楽制作を実社会でのマーケットに結び付けてゆく経験を積む。事業の進捗状況をプログラムのブログページまたはフェイスブック (Facebook) ページに掲載し共有することが義務付けられている。



2010年秋学期の助成金を獲得した作曲科大学院1年のライアン。助成プロジェクト：音楽家や他分野アーティストが自由に作品を発表、売買できるオンラインサイトの立ち上げ。

6. コースへの学生の反応及び今後の課題

2010年秋学期のコース修了時に行われた学生へのアンケートからその傾向と今後の課題を以下にまとめる。

- “音楽起業家” というコンセプトを初めて知り大変興味を持ったという学生がほとんどを占める中、受講した90名のうち2割程の学生は、卒業後のキャリア開発や音楽起業家養成に焦点をあてたプログラムにまだ実感が湧かない、目先のオーディションや演奏会の実技練習で時間的、精神的に余裕がないと感じている。
- 音楽家として今後想定される現実的な課題：故障や健康問題、金銭マネジメント、人脈づくり、プレゼンテーション能力の向上等、を克服する為の情報やスキルをもつ

と得たいと回答した生徒が半数を上回った。

- 自分の独自性を追求する方法、自己をブランドとして差別化していく方法などをもっと学びたいと回答した学生も多かった。
- 現在の学部学生向けのコースに加えて、次年度より大学院生向けのコースを別に設置予定。
- ジャズ、作曲科の学生に比べ、クラシック音楽関連専攻の学生の反応が低い為、来学期にクラシック音楽演奏実技の教授陣と連携したスタジオプロジェクトを計画。学生で室内楽グループを編成し、実技担当教授に協力を得ながらプログラミングや演奏準備を行い、レコーディングする。CDやインターネット、ダウンロード系チャンネルを通し、出版するまでを事業として学生に遂行させる。
- 既存するキャリアサービスや Community Performances & Partnerships 部門等との更なる一体化を目指し、特にキャリアサービス部門との組織的統合が進められている。

7. 音楽大学として NEC がプログラムに見出す意義と有効性

今回この研究調査に際し実現した NEC 学長 Tony Woodcock 氏とのインタビューを通し、この新設プログラムが音楽大学としてどのような意義を持つかを本稿のまとめとして検証したい。

3年半前に学長として就任した英国人の Woodcock 氏は英国と米国両国の数々のメジャー・オーケストラの経済面を建て直しオーケストラドクターと呼ばれている。同時に音楽教育プログラムに造詣が深く、今回が初めての高等教育機関トップ職就任となる。Woodcock 氏のプログラムへの理念は以下の通り。

変わり続ける現代社会に順応するべく古い19世紀型のクラシック音楽(産)業界の体質も変わってゆくべきである。そして音楽大学は現代社会に相応しい音楽家像をきちんと把握、定義しその育成に尽力すべきである。その最初の試みとして、従来の音楽家の雇用形態-オーケストラ、大学、その他音楽関連機関への就職またはフリーランス活動-に第3の選択肢を加えそれを音楽起業家と定義した。新定義に基づく音楽起業家養成は然ることながら、近い将来社会に出る音大生達に幅広い選択肢を持たせる、実社会への対応準備をする、自己の有効性や創造性を最大限に伸ばす、等の意味も含め「Entrepreneurial Musicianship Program」を設立した。そして将来の目標は、音楽家自らが起業するまたは起業家精神に則った音楽家が新しい雇用機会を創出する手助けをすることにある。起業家精神を培った音楽家達が世に出、変化し続ける社会に対応できる音楽家に成長し活躍することは、新たなクラシック音楽市場の開発や雇用機会拡大につながって音楽(産)業界全体を21世紀型に変えてくれるだろう。そして音楽業界の発展は必ず地域社会をも活性化させることとなる。高等音楽教育機関として地域社会にこの様な形で貢献していきたいと考える。

昨今世界各地のビジネスフォーラムで、新しい発想で現代社会を取り巻く問題解決に取り組む Social Entrepreneur (社会起業家) という言葉が頻繁に取り上げられている。私たちがイメージする営利的要素やニッチマーケット的な意味合いを強く帯びた従来の起業対象分野から、現代社会ではそのニーズにより環境、科学、教育、文化芸術の分野にまで及んでいる。音楽大学がそのニーズに対応すべく音楽家の雇用機会拡大を視野に入れた新しいタイプの音楽家育成に取り組むことは、

現実をよく理解した先見性のある行動であり、クラシック音楽界における新しい21世紀型ビジネスモデル誕生の日も夢ではないと言えるのではないだろうか？

(内藤 るみ*)

※研究協力者：アーツ・デベロップメント・
スペシャリスト (在ボストン)

研究協力及び参考文献

Tony Woodcock, President of New England Conservatory

Rachel L. Roberts, Director of Entrepreneurial Musicianship, New England Conservatory

Entrepreneurial Musicianship Strategic Planning, November 2010

Entrepreneurial Musicianship Course Syllabus

Entrepreneurial Musicianship Fall2010 Class Evaluations

1-2 ニューイングランド音楽院 [Abreu Fellows Program]

1. プログラム設立の背景

約15年前、南米ベネズエラの国家的青少年音楽教育プロジェクト「エル・システマ」が全米の音楽関係者に注目され始めたその頃から、音楽専門大学として全米最古の歴史を誇り、また音大生のキャリア開発プログラムのパイオニアとしても知られるボストンのニューイングランド音楽院 New England Conservatory (以下 NEC) は、何度も現地ベネズエラへ足を運びエル・システマの成功の要因を探りながら、ベネズエラ関係者との交流、信頼関係を深めていった。エル・システマを米国の風土、環境に合ったものへ応用できる可能性を確信しその具体的戦略を練る中で、ボストン地域にその応用プログラムをスタートさせることから始める決断に至る。

一方、エル・システマ応用プログラムを指導、遂行する新しいタイプの人材「地域市民であり芸術家である若い指導者」の必要性を強く認識。同時にその人材が21世紀型の新しいタイプの音楽家像「急変し続ける現代社会に柔軟に対応でき、音楽を通して地域社会のリーダーに成り得、またヨーロッパ先導型の古いクラシック音楽業界の体質をも変えられる」になると考える。音楽大学として持つ既存のリソースを活用できること、また高等音楽教育機関として人材育成の観点から地域社会へ広く貢献できるという側面からも、その21世紀型の音楽家創出への取り組みは大変意義深く有効であると判断。NEC自らその人材養成プログラムを立ち上げることを決意した。これがNECが「Abreu Fellows Program アブレウ・フェローズ・プログラム」(ベネズエラのエル・システマ創設者、Dr. アブレウの名前が付けられている)を設立した由縁である。

2009年5月までに、運営戦略、プログラムデザイン、予算詳細をまとめ、同年7月までにNECの理事会役員とデベロップメント部(組織のミッション、プログラム遂行に必要な資金を個人、法人、民間財団から調達する専門の部署。米国では公的資金の助成はほとんどない)の尽力で\$500,000を調達(ア

ブレウ・フェローズ・プログラムの年間予算は約\$400,000)、同年2009年10月に初代10名のフェローを迎えプログラムが正式にスタート。今年度でプログラム2年目を迎える。各年10名、現在のところ5年計画で計50名のフェロー創出を予定している。

2. プログラム概要

NECの学生、卒業生に限らず全米に広く公募され通常約8-10倍の競争率の中、1年ごとに10名の現役の若い音楽家または音楽教育者を選抜、授業料無料+生活費の一部支給の1年間のフェローシップとして集中トレーニングを提供する。修了時にサーティフィケートを授与。フェローは、音大卒業または同レベルの優秀な音楽家であるだけでなく、幅広い国際的な視野と柔軟な感覚を持ち、バランスの摂れた起業家精神溢れる個人であること、地域社会サービス、青少年教育、人材開発に多大な関心があること等の基準で人選される。

プログラムは、エル・システマが持つ独特の教育哲学やその壮大な目的を検証する事から始まり、エル・システマの実践例に見る音楽教育的手法と実際のプログラム運営に必要なマネジメント能力の習得を目指す。カリキュラムは大きくその2つの分野「音楽教育」と「マネジメント&組織運営」から構成される。プログラム修了後、フェロー達が実際にエル・システマ関連プロジェクトの立ち上げに関わるか既存プロジェクトをディレクターとして運営する可能性が高いので、カリキュラムは全て実践ベース、最初の4ヶ月をかけてエル・システマと前述2分野の基礎専門知識を習得した後、2ヶ月間ベネズエラに滞在しオリジナルのエル・システマプロジェクトに接する。帰国後は、米国内に既存するエル・システマ関連プロジェクトでインターンシップを行いトレーニングの成果をスパイラル式に高めてゆく。全てのカリキュラム修了後、フェロー達にはトレーニングを活かした就職が約束されている。また、彼らが実際に稼働した時に援助や相談をお願いできる様、各分

野の専門家となるゲストスピーカーや、修了生同士のネットワーク構築を強く推奨している。

また一方、このトレーニングを通しハイレベルでクリエイティブなティーチング・アーティストとしての技量を磨くことができる。即興演奏法をはじめとして、楽器、合唱、パーカッション等の教授法を、NECの世界トップクラスの教授陣から学ぶことができるのだ。全ての項目はNECの評価基準に従い評価され、フェロー1人1人にグレードが与えられる。プログラム専属スタッフは2名。

3. カリキュラム概要

経験値と知識値のバランス、音楽家としての演奏機会を重視しながら、強固なリーダーシップ、自然なコミュニケーションスキル、特に子供への音楽指導力向上、現代的テクノロジーによるコミュニケーション、及びネットワークワーキングツールへの知識習得等が主な目標となる年間カリキュラムは以下の通り。

1) 最初の約4ヶ月間

NECの教室にて、前年度のプログラム修了生や既存するエル・システム関連プロジェクトの現場ディレクター等と、セミナーやディスカッション形式でまずはエル・システムに関する活きた基礎知識を消化する。それに引き続き音楽教育、青少年開発、ビジネス、テクノロジー、コミュニケーション等の分野の専門家によるワークショップや実践型セミナーを通し、トレーニングの柱となる2大分野、「音楽教育」と「マネジメント&組織運営」のより具体的な知識、スキルを習得していく。

更にプロジェクトベースのトレーニングとして、また様々な実際の現場を学ぶ機会として、ボストン地域にある最低9ヶ所の類似プログラムの見学が義務付けられる。その経験を基にカリキュラム・デザイン、運営戦略、助成金申請シミュレーション、パートナーシップ構築などのレポート提出が課される。

音楽教育分野におけるカリキュラム概要とテーマ

エル・システムの音楽教育的アプローチはオーケストラアンサンブル、合唱アンサンブ

ル、パーカッションアンサンブル。指導対象は3歳から12歳の幼児及び児童。グループ学習、生徒同士の教え合い、喜びと楽しみを共有し合える環境づくりをモットーとし、楽器演奏指導だけでなく広範囲な要素、項目を組み合わせた指導が求められる。以下に示す通り従来の伝統的な音楽教育メソッドと一線を画す。

- エル・システムにおける音楽教育論
- 幼児期における音楽教育既存メソッドの検証：スズキ・メソッド、コダーイ、ダルクローズ、オルフ等
- 年代別オーケストラアンサンブル指導法：エル・システム教材及びプロセス、指揮法、パート指導の検証
- 児童合唱指導法
- パーカッションの基本テクニック習得とパーカッションアンサンブル指導法
- 楽器演奏指導法及び教授法
- 作曲及び即興の基本テクニック習得
- 音楽理論及び聴音トレーニング手法
- 音楽教育におけるテクノロジー活用法
- 楽器の購入、メンテナンス、保管について
- 青少年開発及び児童の行動分析とその対応法
- 疎外された環境にある地域及びその子供たちへの対処法

マネジメント&組織運営分野におけるカリキュラム概要とテーマ

音楽教育分野に加え、プロジェクト運営に役立つマネジメントに関する知識、スキルの習得を目的とするカリキュラムが以下、まるで短期MBAコースのごとく提供される。

- リーダーシップとコミュニケーション能力開発
- 運営戦略とビジネス計画
- マーケティング及び広報：ウェブサイト、ソーシャルネットワークワーキングサイトの活用法
- 組織ガバナンス及びボード・メンバー（理事会役員）開発と管理
- ファンドレイジング（資金調達）
- 財政運営
- 人事、スタッフ採用、給与、福利厚生その他コンプライアンス



NECの教室で、子供の行動分析のレクチャーを受ける今年度10名のフェロー達。活発なディスカッションが飛び交う。



NECジャズ科講師による即興のセッションでのフェロー達。自分たちを自ら“CATS” Citizen-Artist-Teacher-Scholarと呼ぶ。

- パートナーシップ構築方法：学校、青少年及び地域社会関連施設、自治体及び政府等
- 保護者及び地域との関係構築方法：価値観・文化的相違への理解力向上

その他、1週間にそれぞれ1回、各フェローの経験や興味に基づく自主研究の時間と、10名のフェロー全員でグループとして音楽作りをする時間とが設けられている。

2) 次の約2ヶ月間：ベネズエラ滞在（レジデンシー）

ボストンで約4ヶ月の助走期間を終えるといよいよエル・システムの本拠地、ベネズエラでの2ヶ月間のレジデンシープログラムに臨む。現地では、エル・システムのプロジェクトリーダー、プログラム指導者、生徒たちと共に“ベネズエラ音楽教育ミラクル”の場面と直面することとなる。首都カラカスを中

心に全国に無数に散らばる「nucleo」と呼ばれる学習センターでインターンシップを行い、フェロー達は、教える（teaching）、演奏する（performing）、プログラムを運営する（managing）の総合的な実地研修の機会を得る。

また出来るだけ過疎地域または小さな市町村の「nucleo」を訪れ、様々な環境や条件の中で運営されているプログラムを学習する。同時に、現地で実際に使われている指導楽曲や教材、海外各国とのコミュニケーションに使用されている音楽学習開発のための斬新なテクノロジーについても検証する。

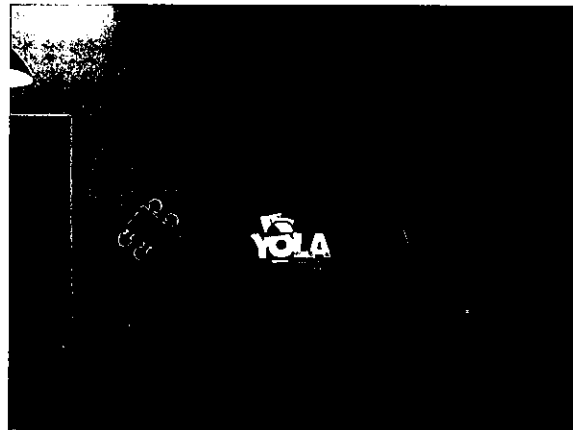
3) 米国内インターンシップと約束された就職
一度ボストンに戻った後、フェロー達は米国各地の関連プロジェクトでの3週間の指導付きインターンシップへ配属される。インターンシップ先のプログラムディレクター及びアブレウ・フェローズ・プログラムディレクターの指導を受けながら、生徒のサポートの仕方、他団体との有効なパートナーシップ構築方法、生徒の両親、地域との関係の作り方、資金調達、生徒募集、理想的なカリキュラムの探求等々、特にリーダーシップとプログラムマネジメントの実力を養う。インターンシップ終了後はボストンのNECの教室へ再び戻り、全員で結果報告及び意見交換を行うこととなる。

全てのカリキュラムを修了したフェロー



エル・システムを代表する卒業生グスタボ・ドゥダメルが音楽監督を務めるロサンゼルス交響楽団の教育部門が、ドゥダメル獲得と同時に立ち上げたユースオーケストラLA (YOLA) プロジェクト。地域の児童に平日放課後及び土曜にエル・システム応用プログラムを提供。2名の前年度フェロー+22名のティーチング・アーティストが雇用された。

は、既存の関連プロジェクトで最低1年間の有給、フルタイムの職に就く。その間に次のキャリアステップ（他の可能性や自らが新しいプログラムを立ち上げる等）を考えられる様になっており、研修を終えたフェロー達にはその後も100%雇用機会が約束されている。これはこのプログラムがエル・システマUSAプロジェクトに属する形で位置付けられているその特筆されるべき点のひとつで、新しい人材/音楽家を育成するだけでなく全米に増え続けるエル・システマ関連プロジェクトを育成した人材/音楽家の就職現場として提供していくのである。



前年度フェローでロサンゼルス交響楽団教育部門に採用されたダニエル。優秀なトロンボーン奏者であると同時にアジア経済専門家。現在 YOLA プロジェクトのマネージャー。紙で作られたヴァイオリンを見せてくれた。

4. エル・システマ USA が創り出す成果物 = フェローの就職現場

楽器を一度も手にしたことがない、クラシック音楽を聴いた事もない、そんな子供たちが3ヵ月後にはオーケストラの一員としてヴァイオリンをチェロをコントラバスをトランペットを手に席につく。教室一杯70名程の小学1~3年生が、クラス指導者（ティーチング・アーティスト）が指揮者として中央に出てきた途端お喋りを止め、演奏のポーズを取る。簡単にアレンジされた“喜びの歌”を全員で演奏し出した。顔は真剣そのもの、途中で止まってしまった子供に隣の子供が今どこを演奏しているかを教える。指導はしつこく中心に予想以上に厳しい。だが指導者の言葉には否定語は一切含まれず出来たことを褒め、次の前向きな目標を与える。夢や音楽

の美しさ、一人で演奏するのではなくグループでコミュニティで演奏を達成することの素晴らしさを巧みに子供たちへ伝えてゆく。アブレウ・フェローズ・プログラムの第1期生2名がディレクターを務めるボストンのコンサバトリー・ラボ・チャータースクールのオーケストラアンサンブルクラスを見学した時の風景である。

この学校でエル・システマ応用プログラムのディレクターを務める前年度フェローのレベッカは、フルート奏者でペルーに滞在し音楽と英語を現地の子供たちに教えた経験を持つ子供へ平等に音楽に参画する機会を与えるエル・システマに共感、意義を感じ現在に至る。もう1人のディレクターで、やはり前年度フェローのデビットは、全米で活躍するクラリネット奏者である。独自の室内楽グループを持ち週末はレコーディング、ツアーに飛び回る日々である一方、音楽を通してコミュニティに関わることに大きな意義を感じ Abreu Fellows Program に応募。児童の対応に明け暮れながらもその成長ぶりに「現在が人生で一番手応えのある充実した時間」と語ってくれた。

コンサバトリー・ラボ・チャータースクールは、ボストンの公立学校の中で初めて正式にエル・システマ応用プログラムを学童保育としてでなく公式なスケジュールに組み込んだ小学校である。このプログラム導入によりスクールアワーは2:30から5:30までに伸び、月曜日~金曜日の毎日午後3時間、合唱、リコーダー、パーカッション、ヴァイオリン、管楽器のクラスを45分おきにローテーションし、一日をオーケストラアンサンブルで締め括る。児童たちは、友達や熱心な先生、その他学校関係者の大人たちと共に音楽を演奏するというコミュニティの中で、人格形成にも大切な要素を学んでいく。学校関係者がこのプログラムを導入してからの児童たちの一般教科の成績向上について、驚きの表情で話してくれた。また、エル・システマ応用プログラムの評判を聞きつけこの学校に入りたいと順番待ちする児童の数は600名を超えるとのことである。昨年秋にプログラムがスタートした際、前述した2名のディレクターに加

え16名のティーチング・アーティストが採用された。



公立小学校で初めてエル・システマ応用プログラムを導入後放課後毎日3時間の様々なアンサンブルトレーニングを行うボストンのコンサバトリー・ラボ・チャータースクール。在校児童154名対象、600名の児童が入学待ち。2名の前年度フェローがプログラムディレクターとして採用+16名のティーチング・アーティストが雇用された。

5. 音楽学習エコシステム：人間本来の生態系に準じるエル・システマの音楽教育哲学

音楽教育を超えた青少年開発プログラムと世界各地で高く評価され、音楽関係者が「音楽特有の力を証明する歴史上最大の社会実験」「音楽をツールに社会変革する今世紀最大のソーシャルプログラム」と色めき立つエル・システマ、その本質とは一体何なのか。

素晴らしい音楽教育は人間を生まれ変わらせる一個人またはその環境的な限界を超越し、希望と情熱とを欠かすことなく常に理想的に生き方をマインドセットする力、人生の困難を乗り越える為の強い忍耐力、また自分を信じる事、人との協調など、この現代社会で身に着けるのは簡単なことではない。こ

れら人間に潜在する可能性を幼少時期からオーケストラ訓練を通じて養成すること、これがエル・システマである。そして以下に示す通り、その独特な教育哲学（El Sistema Philosophy）は、音楽教育の範囲に留まらず元来私たちが生きる社会サイクル、人間の生態系に自然に立ち戻るオーガニックな考え方の上に成り立っている。

- 1) 有効な教育プログラムは愛情、楽しみ、喜び、排除するのではなく受け入れること、そして単独ではなくコミュニティの中での経験を通し成り立つ。
- 2) オーケストラをそのコミュニティと定義し、全員が誰かの為に、誰かは全員の為に責任を持ち、美しい音楽を創り上げる事だけに協調し合う。そして協調すると言う経験、達成した時の充実感を通し、またハーモニー、リズム、本物の凄さ、神秘・美しさ等の目に見えない五感を、音楽の持つ力を通し自然に身に付けてゆくハイセンスな人格形成プログラム。
- 3) 素晴らしい物事を勝ち取る為の挑戦、努力、奮闘は人生一番の勉強であり前向きな実務経験となる。
- 4) 人生に多々ある困難を克服するには、前述した個人の精神を強め感覚を豊かにすることが非常に有効。
- 5) エル・システマから恩恵を受けるのは生徒だけでなく、このプログラムを遂行する際に関わる全ての関係先（指導者、生徒の家族、プログラムスタッフ、研究者、地域社会）である。

上記エル・システマ教育哲学を基に組まれたエル・システマ応用プログラムを実行に移す際の実務論（El Sistema Practices）は以下の通り。

- 安定また体系化された資金確保
- 教育サービスの行き届かないまたリスクを持つ子供たちのいるロケーションを選ぶ
- 強い連携力、機動力のある地域社会で行われるべき
- ハードで集中したスケジュール/最高で1日4時間、週に5-6日
- エル・システマのビジョンに賛同、理解した熱心で優秀な指導者

- 両親、家族の献身的関与
- バランスの摂れたカリキュラムと教材
- 指導者は音楽指導だけでなく、物理的、身体的、感情的、知的面での指導にも従事する
- 可能な限り多ければ多いほど、演奏及びその他プレゼンテーションの機会を子供たちに与える
- 生徒間での教え合い学び合いを最大限尊重する

6. NEC が音楽大学としてエル・システム USA を誘致したその結果は？

エル・システムが南米ベネズエラでオーケストラアンサンブルを通じた青少年教育プロジェクトとして大成功を収め、今や世界各国でその応用プログラムの導入が積極的に進められている中、エル・システム関連プロジェクトが全米でも急増し一大ムーブメントとして注目されている。ムーブメント以前から既存していた類似プロジェクトを含めると現在全米で60ヶ所。米国のほぼ全州に最低ひとつの関連プロジェクトが存在する。エル・システムのスコープはあくまでも地域、その環境やニーズに付随するものとされ、全米各地域に広がるエル・システム関連プロジェクトの独自性が尊重される中、NECはベネズエラの当局と築いた特別な信頼関係のもとに「エル・システム USA」を立ち上げた。(3名の常勤スタッフ、オフィススペースの提供を含む) エル・システム USA は、前述したエル・システム教育哲学及び実務論を自国アメリカ向けに応用・実用化し、更に言えばベネズエラモデルを先進国向けに1歩前進させ、全国に分散する関連プロジェクト発展の為にリソースセンターとネットワーク拠点として機能することを目的としている。今回の調査研究対象プログラム「アブレウ・フェローズ・プログラム」はそのエル・システム USA プロジェクトの一部になる。

ベネズエラでは、エル・システムを通じた国家への多額のリターンがその社会便益及び経済波及効果として報告されている。エル・システムへ150億ドルの投資をした Inter-American Development Bank による

と、ベネズエラの社会経済へのリターンは現在300億ドル相当－国民の教育レベル向上に伴う労働賃金や消費率のアップ等－としている。人々はスポーツでもロックコンサートでもなく親子揃ってクラシック音楽コンサートへ行き、街でヒップホップでなくクラシックのCDを買う。また学術的研鑽にも著しい影響を及ぼす証明として、ベネズエラ国内75%の医学生はエル・システム出身者であると言う。米国でもこのエル・システムムーブメントをクラシック音楽界の現代ピック構想、ソーシャルエンタープライズと評価し新しいビジネスモデルとして注目され出した。

この数年で倍々の勢いで全米で増加するエル・システム関連プロジェクトは同時に雇用の機会を産む。「アブレウ・フェローズ・プログラム」の修了生に代表されるプログラムディレクターから他のティーチングアーティスト、マネジメントスタッフ、プログラムコンサルタント等人材の採用、楽器の需要に対応する楽器メーカーまで、実際新しいビジネスチャンスに恵まれつつある。また、関連プロジェクトの増加に伴い参加児童も激増している。5年-10年後、彼らはクラシック音楽コンサートへ行き、CD、楽器、楽譜を買うクラシック音楽消費者に成長するであろう。音楽大学入学を志すかもしれない。クラシック音楽市場が米国で大きく拡大する期待が膨らむ。

ニューヨークのカーネギーホールに代表される大手音楽団体やニューヨーク、ボストン、シカゴに代表されるメジャー・オーケストラが長年尽力してきた「音楽をコミュニティへ」を一瞬にして実現してしまったのもエル・システムだ。卒業生の就職口、音楽家としての将来を憂う音楽大学にエル・システムは21世紀型の答えを運んでくれた様に思う。

しかし今年1月、NECは「アブレウ・フェローズ・プログラム」は手元に残し、エル・システム USA に求められる更なる拡張事業からは手を引く決断を下した。米国ナショナルセンターとしての機能を持つエル・システム USA は来る6月に NEC を離れるこ

ととなる。音楽大学としての事業の優先順位から「アブレウ・フェローズ・プログラム」は音楽家養成プログラムとして経費をかけても保持すべきであるが、その他のエル・システム USA 機能のサポートに関して経費的負担を含め見直したいという結論に NEC は音楽大学として至ったということになる。

(内藤 るみ*)

※研究協力者：アーツ・デベロップメント・スペシャリスト (在ボストン)

研究協力及び参考文献

- Tony Woodcock, President of New England Conservatory
 Mark Churchill, Director of El Sistema USA & Dean Emeritus, Preparatory and Continuing Education of New England Conservatory
 Stephanie Scherpf, Managing Director of El Sistema USA, New England Conservatory
 Erik Holmgren, Education Director of Abreu Fellows Program, El Sistema USA, New England Conservatory
 Boston Conservatory Lab Charter School Youth Orchestra LA
 El Sistema USA Strategic Planning, January 2011
 El Sistema USA Nucleo List, November 2010
 Abreu Fellows Program Curriculum & Schedule
 Abreu Fellows Program Handbook
 El Sistema USA website <http://elsistemausa.org/>

1-3 イーストマン音楽学校

1. 大学の概要とキャリア教育

イーストマン音楽学校 Eastman School of Music は、1921年に創設され、ニューヨーク州ロチェスター市 (Rochester, NY) に位置する。学生数は、学部生 500 名、大学院 400 名で、留学生の割合は全体の 25% となっている。同校の学科の内訳は以下のとおりである。

- 《学部》 Applied music (performance) (器楽、声楽の演奏系)
Composition (作曲)
Jazz studies and contemporary media (ジャズ、コンピューター音楽など)
Music education (音楽教育)
Musical arts (音楽芸術)
Theory (楽理)
- 《大学院》 Composition (作曲)
Ethnomusicology (民族音楽学)
Music Education (音楽教育)
Music Theory Pedagogy (楽理教育学)
Musicology (a combined MA/PhD program) (音楽学)
Theory (a combined MA/PhD program) (楽理)

イーストマン音楽学校では、1985年より Audience Building Project と呼ばれるアウトリーチ活動を始め、学生のキャリア教育を積極的に行ってきたが、2001年に Institute for Music Leadership (以下、IML)¹ という組織を学内に立ち上げて、システム化された多岐にわたるキャリア教育を提供している。IML のようなキャリア教育専門の組織を設立したのは、イーストマン音楽学校が全米で初めて

であり、設置目的を「競争が激しく変化し続けるプロの音楽業界において、リーダー的人材を育成するため」² と掲げている。IML では、次の5つが大きな柱となっている³：

- ① Arts Leadership Program (ALP) の運営
- ② Office of Careers and Professional Development の運営 (卒業生のサポートや gig の斡旋)
- ③ Orchestra Musician Forum (OMF) の運営と Polyphonic.com のサイト運営 (プロオーケストラ・ミュージシャンに関する情報が一元化されている)
- ④ Center for Music Innovation and Engagement (Ewing Marion Kauffman 財団の寄付による entrepreneurship の教育プログラム)
- ⑤ Alumni Relations (同窓会組織、卒業生からの寄付集め)

2. Arts Leadership Program について

① Arts Leadership Program (以下、ALP) は、キャリア教育の核となるプログラムで 1996年にスタートした。教育や地域コミュニティ活動の重要性を理解しながら、広い視野とビジョンを持った音楽リーダーを育成するために設立された。学部3年生以上の優秀な成績の学生を履修対象者とし、小論文と推薦状により毎年15名が選抜される。アント

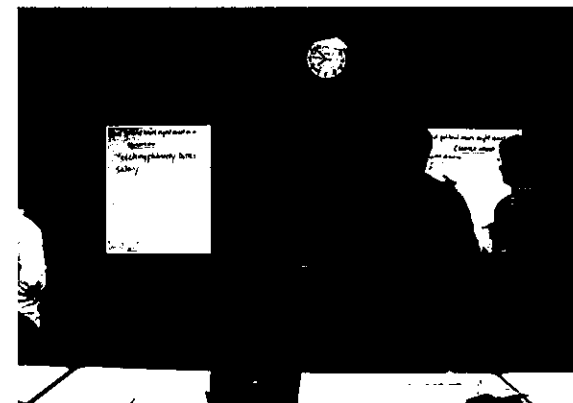
1 Andrew W. Mellon Foundation から資金を得て設立。現在は Ewing Marion Kauffman 財団の寄付金を運用しており、毎年予算は 1000 万～2000 万円程度である。プロジェクトごとに寄付を得ているものもある。

2 IML のウェブサイトより引用：<http://www.esm.rochester.edu/iml/about.php> (2011年)

3 詳しくは、<http://www.esm.rochester.edu/iml/alp/> を参照。

レプレナーシップ、リーダーシップ、パフォーマンス (アウトリーチ)、オーケストラ事情、音楽と健康といった5つの柱に沿った約30科目の中から6クラスの履修とインターンシップを行うことが要件となり、2年間で修了できるように組まれている。ALP コースを修了した学生は、certificate が得られ、卒業後のキャリアにおいて一定のステータスとなっている。このプログラムでは、競争が激しく常に変化している音楽業界に対応できるよう、幅広い教育、専門技術、経験などを提供することが目的である。

アウトリーチ関連では、パブリック・スピーキングの「Speak for Yourself: Public Speaking for Musicians」、観客との関わり方を学ぶ「Music Presentations that Connect: How to Engage Your Audience」、アウトリーチにおける知識とスキルを学ぶ「Outreach-Sharing the Magic of Music」、小学生対象のマスタークラス・レクチャーコンサート・授業の仕方を学ぶ「Music Outreach: Performance, Master Class & Music Appreciation」の講座が開設されているが、どのクラスを履修するかは履修者の自由となっている。さらに、ワークショップやインターンシップも組み込まれており、各科目の担当教員はイーストマン音楽学校の専任教員がほとんどである。



「Career Skills for the 21st Century」授業の様子。自由に活発な意見交換がおこなわれる (2010年10月、筆者撮影)。

また「Entrepreneurship in Music」、「Career Skills for the 21st Century」、「Problem Solving in the Arts」、「How to Win an Orchestral Audition」、「Grant seeking & Proposal Writing for Individuals」などの多様な授業やゲストスピーカーによるセミナーシリーズがあり、起業、セルフプロデュース、助成金の取り方など、卒業後の進路の参考となる科目が多い。ALP の修了証書を得られるのは毎年15名の学生だけであるが、いくつかの科目は選択科目として一般学生にも開かれている。

3. その他のキャリア関連科目について

ALP 以外にも、演奏専攻学生の必修科目で室内楽レッスンと連動している「Music for All」という科目があり、こちらも ALP とほぼ同時期の 1995年にスタートした⁴。金管楽器、木管楽器、弦楽器、ピアノ専攻の学部3年生が春学期に全員履修する。この科目では、通年の室内楽のレッスンを受けながら、プロの室内楽グループによる子どものためのコンサートを視察することからスタートし、小中高生及び大人を対象とした2種類のプログラム案を作成する。教授陣や同級生の前でトークを含めた演奏をし、フィードバックを得た後、最終的に小学校や老人福祉施設等で2回の異なる聴衆を対象とした演奏活動を実践する。室内楽の科目と連動しているため、講義部分はないが、実際に現場を経験するプロセスを踏むことで、プログラミングスキル、コミュニケーション能力、ファシリテーション⁵能力が培われるものとなっている。

4 1985年から始まった Audience Building Project の活動が正式な科目となったものである。

5 ファシリテーションとは、会議やワークショップの場で参加者の発言を促したり、話の流れを整理したりして進行し、まとめていくこと。

対象を学部3年生とするのも、それまでに必要と思われる一般教養、専門科目を履修していることを前提にしているからだと考えられる。4年次以降は、より多くの地域コミュニティ活動に参加したり、付属音楽教室で教えたりと、「Music for All」の実践で培ったスキルをより実務レベルで活用できるシステムが確立されている。つまり、演奏者として教育・地域活動を行うこと、社会と結びついていくことの重要性を「Music for All」という科目を通して学び、学生たちの音楽以外のものへの意識の高まりを喚起している。さらなるキャリア教育の場としてALPが位置づけられており、各方面で活躍する卒業生を輩出している。

④ Center for Music Innovation and Engagementでは、インターネット等の最新の技術を使ったプロジェクトを複数展開している。例えば、「eTheory」ではインターネットを使って誰でも楽典やソロフェージュについて学ぶことができ、「Speed Lessons」ではテレビ会議システムを駆使した遠隔レッスンを受けることができる。また、「New Venture Challenge」というプロジェクトでは、実用的で優れた学生のアイデアに対し、奨学金を与え、そのアイデアを具現化している⁶。常に社会に適応した形で学生の起業精神を醸成し、キャリア育成を図っている、アメリカの音大では先進的な取り組みである。

また、③ Orchestra Musician Forum、⑤ Alumni Relationsの各部門は、卒業後の進路支援や卒業生ネットワークの充実といった、キャリア教育の側面の強化に欠かせない役割を担っており、IMLが総合的なキャリア教育の組織であることが明らかである。

⁶ 例えば、声楽家のためのロシア語の歌詞 diction システムなど。

4. キャリア教育の必要性

このように、イーストマン音楽学校では、最新の情報やインターネット技術を駆使し、実践的なカリキュラムを豊富に揃えている。音楽家として自立することが容易でない現代社会において、音楽大学在籍中より最低限のビジネス・スキルやコミュニケーション能力を備えることは、必要不可欠であるといえる。また、ポートフォリオの作成を通じて自分自身の個性や強みを認識することや、起業家精神を身につけることも音楽家としてのキャリアにおいて肝要であると考えられる。

イーストマン音楽学校のカリキュラムにみられるように、キャリア育成には多岐にわたる科目による複数年のプログラムが効果的であるため、運営組織を構築し全学的な取り組みとする必要があるだろう。さらに、キャリア教育のための奨学金給付のシステムも学生の学習意欲を促進でき、学外へのアピールにもつながると考えられる。アメリカの音楽大学では、キャリア教育プログラムに対する寄付が充実しているが、日本では寄付税制の仕組み等の状況からアメリカと同様におこなうことは難しい。しかしながら、わが国でもキャリア教育の充実は今後の音楽大学のカリキュラムの中で重要な位置づけとなるであろう。単発の講座として実施するのではなく、段階的なカリキュラムを構築することで、理論的なものから実践的なレベルまでの学生のキャリア育成が実現可能となると考えられる。

(赤木 舞)

参考文献

- Eastman School of Music, Arts Leadership Curriculum Course Offerings Fall 2010
_____, Arts Leadership Curriculum Course Offerings Spring 2010
_____, Arts Leadership Program Course Cluster History & Descriptions Through Spring 2010

1-4 マンハッタン音楽院

1. 大学概要

マンハッタン音楽院 Manhattan School of Music は1917年に創設された私立4年制音楽大学で、ニューヨーク市内アッパーウエストに位置する。クラシックおよびジャズの両分野で学士、修士、博士の各学位並びにディプロマを提供しているほか、近隣にあるコロンビア大学ティーチャーズカレッジとの提携による二重学位プログラムでは、K-12教員免許と教育学修士取得が可能となっている。現在、40カ国約800名の学生が学ぶ同院では、ピンカス・ズッカーマンやロバート・マンをはじめとした270名の教員とアメリカン弦楽四重奏団、メリディアン・アーツ・アンサンブル、ウィンドスケイプの3つのレジデンス・グループが指導にあたっている。音楽の伝統に則るだけでなく、イノベーションとオリジナリティの重要性を説くことにも重きを置いており、音楽の力を理解し、その力をどう社会に還元するのかを考えることのできる責任のある一市民として、学生を育成することを目標としている。ロバート・シロタ Robert Sirota 学院長が「本学のゴールは、周りの人々の人生を豊かにすることができ、本人自身にとって音楽がより慈悲深くかつ思いやりある社会を作るための1つの道であると理解する音楽家を育てること」¹と述べているように、学生を全人的音楽家として育成することを目指している。

学内では年間450以上の公演、ワークショップ、マスタークラスが行われているほか、学外の公立学校、博物館、ホームレスシェルター、病院など様々なパブリックスペース

¹ Manhattan School of Music, Manhattan School of Music 2009-2010 Course Catalogue, p.4

でのコンサートを行うなど、単に演奏技術向上と才能の助長を目的とするのみならず、大学をキャリアスタートの場所として機能させるべくアウトリーチ・プログラムをはじめとする多くの取り組みを行っている。学生に様々な演奏、創造、体験、教育の機会を与えることこそが、キャリア育成につながると考える同院の卒業生は、演奏家としてのみならず、作曲家、教育者、プロデューサー、アートマネージャーなどとして、音楽の様々な側面で活躍している。

2. アウトリーチ・プログラム

マンハッタン音楽院は国際的な教育そして演奏の場面での革新的な人材を輩出する教育機関としてのみならず、大学創設時よりコミュニティ・アウトリーチ活動に積極的に取り組んでいる。当初は単純に学外でのコンサート開催というものであったが、現在では様々な切り口を持つ取り組みへと変化してきている。学生にとってはコンサートホール以外の場所で必要な、実践的かつ社会的スキル育成の場であり、音楽の力の重要性の再認識の場となっている。これらプログラムに参加するためのカリキュラムも構築されており、専攻によっては必修授業として取り組むことが義務付けられるほど、重要なプログラムとして理解されている。

2-1. プログラム概要

同院では、① Music Teaches、② Music Heals、③ Music Reachesの3つのアウトリーチ・プログラムが行われている。

Music TeachesはNY市内提携K-12学校に対するプログラムで、オーケストラ、オペラ、ミュージカル、ジャズ分野での教室単

位で授業を行うものである。大学院の学生が行うもので、対象によって内容は異なるものの基礎的音楽言語や音楽の美学的要素をテーマに、学生は各学校のカリキュラムに自身が教える授業がどうあてはまるかということを考え、他教科とのつながりを見出す必要があるため、高度な教育実習の場として機能している。加えて提携校における合唱や器楽レッスンも行っており、多くの在校生がレッスン用スタッフとして雇用されている。

Music Heals は、NY 市内の病院、老人ホーム、ホスピスなどでインタラクティブ・コンサートを行うプログラムである。音楽の持つ癒しの力に重点を置いたものであるが、病院関連施設のみならず、自分自身ではなかなかコンサートに行くことのできない低所得者やマイノリティ・コミュニティなどへも、その活動範囲を広げている。

Music Reaches は、NY 中心部の様々なパブリックスペースでコンサートを行うプログラムである。タイムズスクエアなどの観光名所や博物館、企業のロビーなど、コンサート会場ではない場所で演奏を行うことで、様々な観客との接し方や演奏方法を学び、視野を広げることにつながっている。

2-2. カリキュラム

上記3プログラムのうち、② Music Heals および③ Music Reaches は演奏を核としたプログラムであるため、学生の指導はコミュニティ・エンゲージメント・ディレクターが主として行っているが、①の Music Teaches に関しては実践を含むカリキュラムが構築されている。

秋学期開講の「Arts & Education Training」、 「Jazz Musician as Educator」、 「The Musician as Educator」、 「Opera Studio」、 春学期開講の「Jazz Residency」、 「Orchestra Residency」、

「Opera Residency」の7講座が設置されており、Arts & Education Training 以外の6講座が Music Teaches に直結するものとなっている。それぞれの講座は大学院の各専攻と密接に関わっており、「Jazz Musician as Educator」及び「Jazz Residency」はジャズ専攻修士課程1年生、「The Musician as Educator」及び「Orchestra Residency」はオーケストラ・スタディ1年生、「Opera Studio」及び「Opera Residency」はオペラ・スタジオ専攻の必修授業となっている。音楽専攻の学生にもアウトリーチ関連授業を必修化しているのは珍しく、専攻に関わらず社会との関わりを持つことを重要視していることがわかる。

秋学期授業は、担当教員に加えてコミュニティ・エンゲージメント・ディレクターや専任教員、スタッフ、卒業生を含むゲストスピーカーによって行われ、その内容は音楽教育理論からパブリック・スピーキング、活動実施方法論、デモンストレーションまで多岐にわたるが、座学を中心としたものになっている。そして春学期にはオーケストラ・スタディ専攻は地域の小学校6年生向けの「Orchestra Residency」、オペラ・スタジオ専攻及びジャズ専攻は小学2年生～中学1年生向けの「Opera Residency」及び「Jazz Residency」において、決まったテーマや演目に沿って指導案を作成し、各学校での実践活動を行う。これらの活動とそれぞれの専攻カリキュラムにつながりをもたせるため、レジデンシー活動の最後には学生たちが行うコンサートやオペラ公演などの学内公演に教えている子どもたちやその家族を招待するなど、大学全体として関わる包括的なカリキュラムとして構築されている。

3. ディスタンス・ラーニング

Distance Learning

マンハッタン音楽院の取り組みの中でもユニークかつ国内外からの評価が上がってきているのが、ディスタンス・ラーニングである。3大学連携プロジェクトでも活用しているインターネット・ビデオ会議システムと同様のものを導入し、プログラム展開しているため、今後のプロジェクトに大きな示唆を与えると考えられる。またアウトリーチ・プログラムの新たなステップとしても機能していることは大変興味深い。

3-1. 概要

音楽大学初の革新的遠距離教育プログラムとして1996年に創設されたこのプログラムでは、演奏や音楽教育におけるインターネット・ビデオ会議技術の活用方法を模索してきた。当初は国内外での演奏活動に忙しく、個人レッスンを休みがちになってしまうピンカス・ズッカーマンのアイデアによるものであったため、レッスンをを行うためのものとしてスタートしたが、現在ではレッスンのみならず授業やマスタークラスなど、幅広いプログラムが展開されている。またインターネット・ビデオ会議システム会社、ポリコム社と直接提携を行うことで、演奏時の時差を極限まで少なくすることのできる独自の「ミュージック・モード」というソフトウェア開発や、プログラム導入を希望するK-12機関に対する機材の無償貸与システムを構築している。現在のスタッフは、フルタイム3名。資金源は、弦楽器部門予算、財団助成金、活動収入その他申請ベースの助成金となっている。「教員の理解を得ることは15年たった今でも難しい」とクリスティアンヌ・オルト副学務部長兼ディスタンス・ラーニング部ディレクターは述べていたが、そのために実技教

員や学長を含む諮問委員会を作り、教員との協力体制を築いているという。まさに音楽大学におけるインターネット・ビデオ会議システム利用の基礎を作ったといえるもので、Internet²や国内外の音楽大学からその注目を集めている。

3-2. プログラム内容

ディスタンス・ラーニングでは、①授業等のプログラムの提供、②コンサルテーションを活動の2本柱としている。加えてクリーブランド音楽院などいくつかの選抜校とは連携も行っているが、これは極めて例外という。また学内では会議や学位授与式などの式典で使用されている。

授業等プログラムでは、「The Global Conservatory」と「K-12 & Community Programs」の2種類を提供し、合わせて年間約100プログラムを米国33州、世界18カ国、約1700人以上に配信している。「Global Conservatory」では、a) レッスン&コーチング（個人レッスンやクリニック、マスタークラス）、b) プロフェッショナル&アカデミックセミナー（学術セミナーやキャリアセミナー、パネルコロキウム）、c) 音楽史の3種類が提供されており、どれも大学～大学院レベルものとなっている。通常行われている音楽大学の授業を、インターネット配信版にしたものと言えるが、必ずディスカッションなど講師とコミュニケーションがとれる仕組みがあり、実際に同じ教室で授業を受け

² Internet 2とはアメリカの212の大学と75の企業から構成されるコンソーシアムで、超高速なネットワークを利用し、次世代インターネットプロトコルなどのネットワークに関する基礎技術の研究や、高度なアプリケーションの研究などが行われている。芸術分野ではこの高速ネットワークを利用した遠隔でのライブパフォーマンス・コラボレーションやマスタークラス、オーディションなど、大学や芸術機関間で様々な試みが行われている。

ているような環境を再現している。「K-12 & Community Programs」では、学校との提携により通常対面で行われるアウトリーチ活動を、インターネット・ビデオ会議システムを使って行うものである。必ずしもコンサートというわけではなく、インタラクティブ・コンサートやレクチャー、学年によってはマスタークラスなども行われ、提供するジャンルもアメリカ音楽、ジャズ、クラシック、ポップス、オペラ、ワールド・ミュージック、音楽一般と多岐にわたる。すべてのプログラムはNY州芸術教育基準に沿って構築されており、領域横断的かつ他教科との関わりを重要視するものとなっている。

コンサルテーションでは、K-12への技術・プログラム導入から音楽大学におけるシステム導入・プログラム開発まで、幅広く関わっている。最近ではクロンベルグアカデミー(ドイツ)や王立デンマーク音楽院のシステム導入を手がけたという。

3-3. アウトリーチ・カリキュラムとの関わり

「K-12 & Community Programs」は、前述のように通常対面で行われるアウトリーチ活動をインターネットを通じて行うものであり、コミュニティを周辺地域に限定せず、より広く多くの対象にアプローチすることを目的としている。学生が主として指導・演奏を行うため、アウトリーチプログラム・カリキュラムの中に、通常アウトリーチの応用ステップとして「Arts in Education and the Virtual Classroom」が設定され、カリキュラムと密接に関わっている。通年で履修した大学院生もしくは「Arts in Education」を履修し、実践を行った経験のある学部生向けに、単位取得可能な選択授業として開講されており、ディスタンス・ラーニング部ディレクターとコミュニティ・エンゲージメント・ディレ

クターが共同で指導に当たっている。インターネット・ビデオ会議システムを使用した地域コミュニティ活動方法指導論の講義を経て、ディスタンス・ラーニングで行うプログラムを実践していく。

4. センター・フォー・ミュージック・アントレプレナーシップ Center for Music Entrepreneurship

音楽業界がかなりのスピードで変化しているのにもかかわらず、音楽大学ではその変化に対応しきれていないことへの対応として、2010年秋に創設されたのがこのセンター・フォー・ミュージック・アントレプレナーシップである。それまで同院が授業やアウトリーチ・プログラムの中で提供してきたような基本となる考え方や経験のみならず、より実践的な授業と学生たちの精神的サポートを提供するための組織として立ち上がった。視野を広げ、多くの経験を積むことで、コミュニケーション力、パブリック・スピーキング力、問題解決力などが培われたことから、今までも自身のオーケストラ、フィルハーモニック・オーケストラ・オブ・ザ・アメリカズ Philharmonic Orchestra of the Americas を創設し、そのオーケストラとともに南アメリカツアーを成功させた女性指揮者アロンダ・デ・ラ・パッラ Alonda de la Parra や音楽業界内外で高い評価を得るパフォーマンス・スペース「ル・ポワソン・ルージュ Le Poisson Rouge」を創設した作曲家/ヴァイオリニストのデイビッド・ハンドラー David Handler とチェリストのジャスティン・カンター Justin Kantor らの起業家とも言える人材を輩出してきた。しかし今日の音楽業界でキャリアを構築するためには、卒業後即戦力となりうる人材を育てる必要があることから、新しいテクノロジー・スタンダードやマネージャー、ホール、出版社、パトロン等

との新しいコミュニケーション方法など、より現実的かつツールとなりうるプログラムが展開されている。そのためキャリア支援部及び同窓会と密接な関係構築がなされ、在学生のみならず卒業後もサービスが受けられるシステムを作っているという。

現在センターが行う授業は、芸術的目標を目指しながら生活をしていくために必要な、ファイナンス、自己プレゼン方法、パブリシティ方法、マーケティング方法などの基本ポイントを学ぶ「Practical Foundations for Music Careers」、様々なゲストスピーカーによるワークショップシリーズ「Setting the Stage」³、「インターンシップ」の3つだが、学生のアイデアに奨学金を出す「Entrepreneurial Project」やキャリア・カウンセリング、レコーディング・サービスなども行っている。

初年度ということから現在は選択授業となっているが、専攻横断的なセンターとして作られていることから、今後は必修授業となる可能性が高いとのことである。またディスタンス・ラーニングとの連携事業も考えられており、ゆくゆくはインターネット・ビデオ会議システムを活用し、他大学への授業配信やインタラクティブ授業を行うことも可能性の1つとのことである。今後、センター主催授業がどのようなポジションでカリキュラムに組み込まれていくのか、注目していきたい。

(小島 レイリ)

3 ワークショップといっても日本で頻繁に使用される身体的ワークショップではなく、「新しいメディア」、「フェンドレイジングのあり方」、「コンサートシリーズのはじめ方」、「プレスキットの作り方」など、基本的には授業形態のものとなっている。

参考文献

- Charnow, Rebecca. Interview Transcription by the author, January 19, 2010
- Manhattan School of Music, Manhattan School of Music Center for Music Entrepreneurship <http://www.msmnyc.edu/cme/>
- _____, Manhattan School of Music Course Catalogue 2009-2010
- _____, Manhattan School of Music Distance Learning website <http://dl.msmnyc.edu/>
- _____, Manhattan School of Music website <http://www.msmnyc.edu/>
- _____, Manhattan School of Music View Book 2010
- Orto, Christianne. Interview Transcription by the author, November 4, 2010

1-5 YOLA (ユースオーケストラ・ロサンゼルス) 並びにコルバーン音楽院

ロサンゼルスにおける新しい音楽教育の試み

2010年12月6日～14日にボストンとロサンゼルスに出張し、ボストン在住アーツ・デベロップメント専門家の内藤るみ氏にご協力をいただき、ニューイングランド音楽院 New England Conservatory、ユースオーケストラ・ロサンゼルス Youth Orchestra Los Angeles、コルバーン音楽院 The Colburn School の各所を視察した。ニューイングランド音楽院で行われている二つのプログラムについては内藤氏の報告が掲載されているため、ここではロサンゼルスでの視察について報告する。ボストンでは、ニューイングランド音楽院にエル・システムUSAの本部が置かれ、指導者養成のためのアブレウ・フェローズ・プログラムが実施されているが、実際に小学生への指導を実施しているのは1箇所のみである。これに対してロサンゼルス周辺では、エル・システムを応用したオーケストラ教育が複数箇所実践されており、ボストン周辺よりも実践面で進んでいるように見受けられる。その背景となっている要因は何であろうか。

1.YOLA(ユースオーケストラ・ロサンゼルス)

1-1. 組織

2009年にベネズエラ出身のグスターボ・ドゥダメルがロサンゼルス・フィルハーモニックの音楽監督に就任したことから、ロサンゼルス周辺で実施されているエル・システムによる音楽教育の存在が注目を浴びるようになった。これは、YOLA (ユースオーケストラ・ロサンゼルス) と呼ばれるもので、ロサンゼルス・フィルハーモニックの教育プログラムとして立ち上げられ、約55の団体・グループから成るステークホルダー・ネットワークによって運営されている。しかし一部の協

力組織はそれよりも前から存在し、YOLAのベースとなる活動をすでに蓄積していた。

エキスポ・センターでの活動 (= YOLA at EXPO) に協力する団体のひとつは、「音楽を通して子どもの人生を変える」を理念とするハーモニープロジェクト (NPO法人) であり、低所得層の子どもに無料で楽器と音楽教育を提供する活動を2001年から開始した。これは低所得層の子どもが放課後の時間になすすべなく非行や麻薬に走ることを避けるために、音楽に重心を置いた学童保育である。(日本の学童保育は、保護者が仕事等で見るできない児童を預かるという目的の下に、子どもが宿題をしたり遊んだりおやつを食べる場所として設置され、そこで積極的に特定の「教育」を行うという考え方はない。) ハーモニープロジェクトは、現在ではロサンゼルス周辺で複数のユース・オーケストラ、ヒップホップ・オーケストラやジャズバンドを学童保育の形態で指導するまでに至っているが、そのうち明確にエル・システムとの関連を打ち出しているのは、ロサンゼルス・フィルハーモニックの教育部門と連携しているエキスポ・センターのユースオーケストラ (YOLA at EXPO) のみである。またもうひとつの強力な支援組織はロサンゼルス市レクリエーション・公園部門であり、エキスポ・センターのスペースをYOLAの活動のために提供している。2歳から17歳までの生徒が、放課後および土曜の午前中に学年ごとのグループ学習の形で音楽教育を受ける。

他方、ランパート (Rampert) 地区で運営される活動 (YOLA at HOLA) の協力組織は、20年ほど前から低所得層の子どもに多彩な放課後活動を提供しているハート・オブ・ロサ

ンゼルスというNPO法人である。その理念は、6歳から19歳の低所得層の子どもに多様な機会を提供することによって関心を引き出し、暴力や麻薬から守るというもので、活動は音楽に限らず、勉強の補習、スポーツ、美術、情報教育など多岐にわたる内容で学童保育を展開している。これに加えてロサンゼルス市や企業、財団等、さまざまなステークホルダーがロサンゼルス・フィルハーモニックの支援団体となって、この地域のYOLAが運営されている。

どちらのYOLAにおいても受け入れ人数には限りがあるため、希望者が全員入れるわけではない。地域の小学校から情報を得て、低所得層の家庭では子どもの関心に合わせて、自分に向いていると思われるプログラムに申し込む。所得額の申告も含めた申込書を提出し、受け入れが決まると、放課後(場所によっては土曜も)に毎日スクールバスまたは保護者の車で練習場所に向かい、音楽の指導を受けることになる。

1-2. 音楽指導の特徴

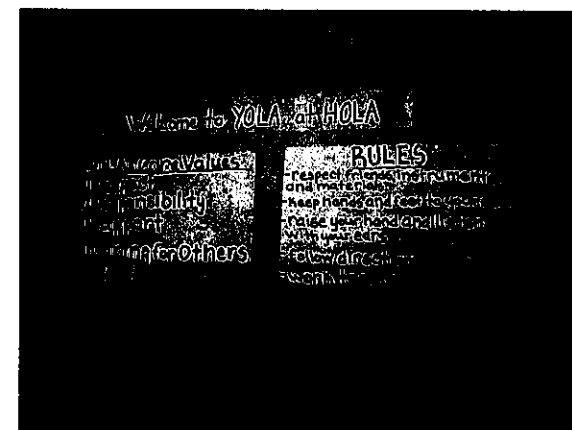
体制 YOLAの場合、必ずしもエル・システムの指導者としての資格を持つ人材を集めているわけではなく、もともと各地で学童保育プログラムが発足した当時から協力している地元の音楽指導者や若手演奏家に、アブレウ・フェロー (ボストンのニューイングランド音



時間ごとにリーダーを交替しながら複数の指導者がグループを指導する。

楽院で進められているエル・システムの指導者養成コース。1年間で指導法と運営法を学び、ベネズエラで実際にエル・システムの指導現場を体験する。) 修了者が加わり、エル・システムの精神を共有しながら進めている。(そのため、El sistema inspired programと称している。) 一つの学年に指導者が2～3人つくため、たとえば一箇所のYOLAで幼稚園～6年生までを指導するのに合計20人ほどの指導者がつくこととなり、その中にオーケストラの多様な楽器に対応できる人材、さらに音楽の初歩的な指導ができる人材が必要となる。このように、専攻楽器の異なる複数の指導者がチームとなって数十人の子どもを指導するという体制を特徴とする。

社会性 指導現場を見学して特徴的なのは、すばらしい音楽を生み出すオーケストラの姿を理想として、自分たちもあのようなためにはどうしたらよいかを考えさせ、まず指導者の言葉に耳を傾け、指示に従うこと、楽器や仲間を大事にすることから教えていることである。オーケストラとは、複数の人間が協力することによって一人では作り出せないすばらしい音を生み出す活動であり、一人が全体のために役立ち、全体が個々を大切に社会的縮図として捉えられる。ロサンゼ



「大切なことから」として

1. 互いに尊敬すること
2. 自ら責任をもつこと
3. 助け合うこと
4. 思いやることが強調されている。

ルス・フィルハーモニックの実際のコンサートを聴きに行った経験に基づき、自分たちも同じようにすばらしい音を生み出し、人に感動を与え社会に役立つ存在となりうることが指導の中で強調される。指導はグループで行われるため、グループ内での協調性も重視される。「Aの方がBよりも上達し、演奏がうまい」といった音楽的能力だけを評価の尺度にするのではなく、グループ内で教え合い、また他のグループの良い面に注目することで全体の進展を図る。また通常は異なる場所で教わっている異年齢の子どもたちが、同じ楽曲を合奏するために集まり、お互いのパートを聴き合うという機会も積極的に設けられている。こうした特徴は、日本の早期音楽教育では強調されていない点として注目に値する。

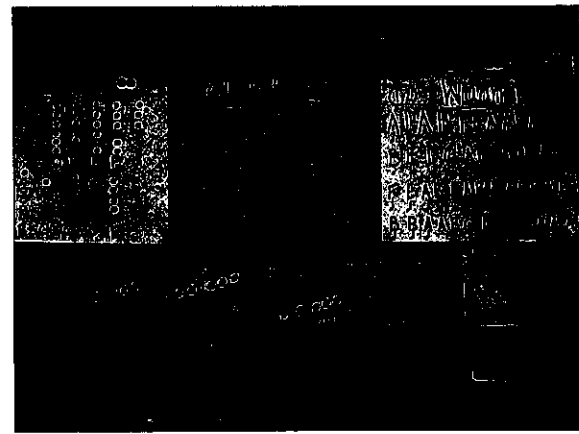
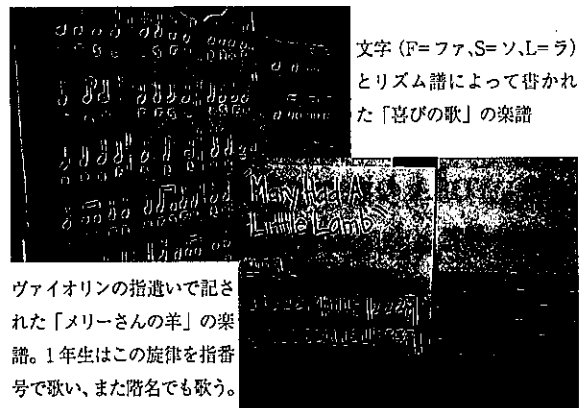
しつけ 一人一人の個性を尊重することはアメリカ文化の大きな特徴であるが、オーケストラでは、まず指導者の指示に耳を傾け規律をもって行動することが求められる。特に幼児～低学年においてはしつけの要素にウェイトが置かれ、椅子にすわって静かに話を聞いたり、楽器を大切に扱ったりすることから密着して指導する。理想とする姿をイメージさせ、良いところをほめながら活動を進めるが、気分の乗らない子どもや不機嫌な子どもに対応することも必要である。実際には、そ



貸与された楽器は、練習のため自宅に持ち帰ってもよい。楽器を自宅に忘れてきた生徒は、楽器を構えた姿勢で歌いながら練習に参加する。

う子どもたちはグループ学習の場から離れて一人で遊んでいるが、そのうち自分も仲間に加わりたくなった頃合いを見て、指導者が声をかける。学童保育にいる時間はいくつかの時間帯（たとえば最初に打楽器、次に弦楽器、最後にリコーダー、等）に区切られ、その間に必要に応じて違う教室に移動し、おやつを含めたリラククス・タイムも設けられている。指導者は音楽的指導のみならず、子どもの不満や問題への対応、トイレ、おやつのお世話もしなければならず、さまざまな年齢層に対応できる全人格的な教育者であることが求められる。

ソルフェージュ 読譜の指導は、音楽教育において最も大切であり、また難しい問題である。最終的な目標は五線譜が読めるようになることであるが、五線の読み方を教わるだけでは楽器の演奏はできない。リコーダーやヴァイオリンでその音がどの指遣いになるか



4年生のクラスでは移調楽器によって記譜音が変わることも指導内容に加わる。

を示すほかに、その旋律の流れを歌って学ぶために階名唱法（移動ド）やハンドサイン（階名を手の形で表す）も一部で用いられている。これにクラリネットやトランペットのような移調楽器の問題（記譜音と実音が異なる）が加わると、読譜指導は混乱を招きやすい。YOLAの指導者に質問したところ、ソルフェージュの指導法は実際に指導者によって方針が異なっている面があり、これから改善を加える必要があるとのことであった。複数の指導体制の長所を生かして、混乱が少なく効果的な指導法が整えられていくことが望まれる。

1-3. 保護者・地域との関係

YOLAに子どもを送り出す保護者は、単に子どもを預けるだけではなく、積極的にその活動に加わることを求められる。年間スケジュールとしてクリスマスや学年末に全学年によるコンサートがあり、その際には保護者も演奏に参加する。実際に保護者有志が受けたリコーダー指導を参観してみると、日本と異なり保護者の出身国もさまざまに音楽教育の素地が共通でないため、リコーダーに触るのも初めてという人もいた。指遣いの図を見ながら四苦八苦して1曲が吹けるようになった人は、毎日楽器を練習している我が子に一目置き、コンサート成功への努力を共に体験することになる。また、保護者が楽器を演奏



保護者のリコーダー演奏を聴く子どもたち

するのを初めて見る子どもたちも、静かに聴いて拍手を送り、家族の間に音楽を介する関係が生ずる。

コンサートにはYOLAに所属していない友達や地域住民も参加する。YOLAで子供たちが使用する楽器はすべてロサンゼルスに本部を置くヤマハ・アメリカから割引価格で提供されている。また時には、NPO法人の支援団体であるロサンゼルス・フィルやNBAのロサンゼルス・レイカーズの有名スターがYOLAを見学に訪れることもあり、そうしたイベントを通して地域との結びつきを感じ、自分たちの活動が注目されているという自負を抱くことができる。特にロサンゼルス・フィルハーモニック音楽監督のドゥダメルの来訪は、子どもたちにとって大きな喜びであり誇りとなる。

2. コルバーン音楽院

ロサンゼルスダウンタウンにあり、2003年に開校された新設校である。コルバーン家の資金援助により、116名の学生は全員が寮費・食費を含む学費全額を給付されており、入試は約30倍という高倍率になっている。116名の専攻楽器はオーケストラを組織できるように配分されており、それぞれが卒業後に演奏家として立つことのできるよう高度な技能の習得を第一としている。

しかしそれと並行して、「教える音楽家 The Teaching Musician - Realizing Social Action through Music」という科目（通年・2単位）を設置し、YOLAで楽器を学ぶ小学生の個人指導やグループ指導を体験させ、音楽を通して社会に貢献する意識の明確化を目指している。この科目では、エル・システム、ティーチング・アーティスト、各種音楽教育メソッド、貧困問題、コミュニケーションスキルについてのクラス授業と並行して、

YOLAの活動に参加し、YOLAの指導者に協力しながら現場で子どもたちの指導を体験する。学期の後半に各自の体験を持ち帰ってクラス討論を行い、最終的には、YOLAで指導した子どもたちを交えたコンサートを企画・実施することが課題となる。学生が音楽院の中で目指す「コンサート・アーティストとしての高度な演奏」と、実際の社会で求められている「教える力」とのバランスを見出すことが課題であり、「演奏」と「教えること」の具体的な接点を模索する実践的な機会を与える授業となっている。

卒業後の学生がコンサート・アーティストまたはオーケストラ団員として自立していくことは容易ではない。また既存のYOLAだけでは卒業生を受け入れきれない。そこで自ら人的ネットワークを作り、資金調達し、新しい音楽教育の場を生み出していく能力を育むために、2011年秋からは起業とマネジメントを学ぶ新科目の設置を予定している。演奏実技中心の音楽院であるが、卒業後の「生きる力」の育成にも配慮している点、地元の音楽教育組織と連携を図っている点で大変参考になり、注目に値する。

3. 日本での応用の可能性

ロサンゼルス周辺で「音楽による学童保育」(YOLA)が活発に進められていることの要因として、①音楽を通して社会を改善したいという強い目的意識がある、②その理念に基づく種々のNPO法人が存在し、各種プログラムの運営において連携し、継続的な財政支援を獲得している、③地元のオーケストラの教育プログラムに、行政や地元企業のみならず音楽大学や音楽産業までもが連携しており、高いコミュニティ意識がある、という3点が挙げられる。また音楽指導の面では、④ひとつの方法論に固執することなく、柔軟か

つ多様な指導法を採用している、⑤異なる出自、異なる楽器、異なる年齢層の指導者が互いに協力しながら指導するシステムを採用している、といった特徴が挙げられる。

また日本との大きな違いとして、⑥アメリカでは初等中等教育における音楽という教科の設定が州ごとに異なり、「音楽」の時間の無い小中学校が多数あること、そしてそれを補う役割が地元オーケストラのティーチング・アーティストやアウトリーチ・プログラムに求められているという背景が指摘できよう。

翻って日本では、全国の小中学校に音楽科の授業が備えられており、それ以外に鼓笛隊やブラスバンド等のクラブ活動がある。また放課後にはお稽古事として各種の楽器を習うことが可能である。しかし、これらすべての事柄が縦割りの体制で実施され、相互の流通性は少ない。また未就学児童と小学生、中学生がともに演奏を共有する機会や場もほとんど見られない。縦割りと年齢割りの思考方法に支配されて、小中学生の音楽活動と学童保育、さらには音楽大学を結び付けようという独創的なアイデアはこれまで日本では生まれてこなかった。今回の調査を通して、3大学連携事業の成果として「音楽を通して社会を変えていく」実践的な取組を具体化するためには、強い目的意識と哲学(エル・システムで強調される、互いを愛し、互いにつながることによって互いに役立つ存在となるという考え方)を持つことが必要であり、柔軟な発想と着実な組織・資金計画をもって活動を継続することが何よりも重要であることを痛感した。「コミュニケーション」「コミュニティ」「ネットワーキング」「ファンドレイジング(資金調達)」「起業精神」といった語が、今後、事業を展開する上で重要なキーワードとなるものと考えられる。

(武石 みどり)

1-6 「アメリカ出張報告」アウトリーチ教育担当者会議(CEOCISM)並びに各種アウトリーチ活動

2011年1月8日より1月19日まで、東京、米国(シカゴ、ニューヨーク)へ出張し、アウトリーチ担当者会議(CEOCISM)に出席した他、各種アウトリーチ活動の研究と視察を行ったので、その報告を行いたい。

1. アウトリーチ教育担当者会議(1月14日、10～16時、於:ニューヨーク、マンハッタン音楽院)

今回の米国出張の眼目は、この会議において3大学連携事業について報告することを主催者から求められたことであった。「音楽大学と音楽院におけるアウトリーチ教育担当者会議 Consortium for Educational Outreach at Conservatories and Schools of Music」は2007年に開始されたもので、第5回の今年は3カ国13機関から19名の参加があった。前々日のニューヨーク地方は吹雪警報が出るなど荒れ模様で、雪の影響で出席できなかった参加予定者も数名あったと聞いた。

今年のトピック「病院でのアウトリーチ活動」や「テクノロジーの活用」(昨年の3大学連携取組についての発表に触発された問題提起と思われる)について他大学の取組や問題意識に学ぶと共に、日本における3大学連携事業(本取組)について初年度の活動報告を行った。ミュージック・コミュニケーション講座や合同コンサートに関する英文資料を配布し、15分間の口頭発表を行ったところ、参加者から質問やコメントが寄せられて、今後の方向性を考える材料を得ることができた。来年度の合同夏期セミナーにギルドホール音楽院のショーン・グレゴリー先生を招聘する計画に触れたところ、「彼は素晴らしい」「ピーボディ音楽院にも来てもらった」「先日はシンガポールで一週間のプロジェクトを行って大きな成果を上げた」といった反応が

あり、知名度の高さが窺われた。

今回初参加のオーストラリア国立大学音楽学部スーザン・ウェスト Susan West 教授からは、今後東京ないしは関西での交流の可能性について打診があった。同校はすでにマンハッタン音楽院とインターネット・ビデオ会議システムを介しての交流実績もある様子なので、何らかの形で実現するべく努力していきたい。

2. 各種アウトリーチ活動の研究・視察

シカゴ(1月10～11日)では、1910年代にスタートした市民のための音楽アウトリーチ団体「市民音楽協会 Civic Music Association」について資料調査を行った。

ニューヨーク(1月12～16日)では、幸運なことに限られた日程の中でジュリアード音楽院、メトロポリタン美術館、ニューヨーク・フィルハーモニー(大人向けと子ども向けのプログラム各1種)、カーネギー・ホールの5つのアウトリーチ活動を見聞する機会に恵まれた。時間軸に沿って、順に紹介する。

2-1. ジュリアード音楽院「室内楽フェスティバル Juilliard Chamber Fest 2011」(1月12日、13～14時、ジュリアード音楽院、アリス・タリー・ホール)(入場無料)

1回約1時間で2ないし3グループずつ演奏する学生による室内楽コンサート。1月10日から15日までの6日間に全8回のコンサートを実施。プログラムが配布されるだけで、アナウンス等は特にない。曲は古典派、ロマン派に加えて、リゲティやメシアン、シェーンベルクなどの現代曲も含まれ、学生のアンサンブル研究の成果を広く市民が共有するという形になっていた。私が聞いたのは平日の昼間であったためか、聴衆(250人程度)は年配の人が多く、熱心に耳を傾けて温かい拍

手を送っていた。

2-2. メトロポリタン美術館レクチャー・コンサート「ロシアのロマン主義:スクリャービン」(1月12日、14時半～15時45分、メトロポリタン美術館レクチャー・ホール)(23ドル)

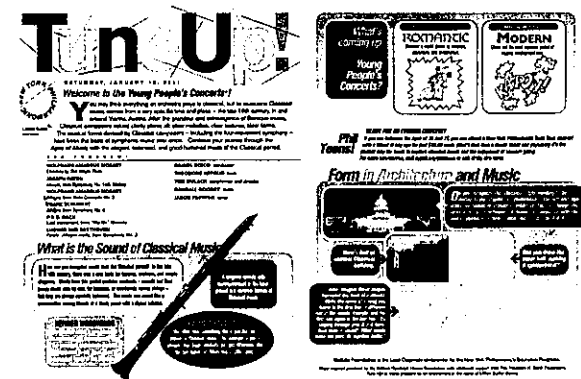
講師デヴィッド・デューバル David Dubal の個性的な語りで聴衆を引っ張っていくシリーズ物のレクチャー・コンサート。後半で若い女性ピアニストが登壇して実演を行った。最後に作曲者自作自演の歴史的録音を聞かせ、ホロヴィッツの演奏との聴き比べを行った。聴衆はやはり年配の人が多く、毛皮をまとったご婦人や優雅な夫婦連れが目につき、直前に聞いたジュリアード音楽院の無料コンサートとは全く異なる客層だった。

2-3. ニューヨーク・フィルハーモニー「プレ・コンサート・トーク」(1月14日、19時～19時40分、エイヴリー・フィッシャー・ホール、ヘレン・ハル・ルーム)(7ドル)

ニューヨーク・フィルのコンサートのチケット(92ドル)購入者で、かつ「プレ・コンサート・トーク」のチケット(7ドル)を購入した少数の聴衆のための直前講座。講師のデヴィット・ウォレス David Wallace が当夜のプログラムの様式的特徴を、個人的エピソード、ヴァイオリンやリコーダーの演奏、CD聴取などを交えながら分かりやすく講じた。途中で聴衆(35人程度、高齢者が半数を占めるが、熟年の親に連れられた若者も見られた)にリズム打ちで参加してもらったり、質問を投げかけて答えさせたりといった形で、自然に無理なくインタラクティブな形にしていたのが印象的だった。アウトリーチの主要テキスト『Reaching Out』の著者デヴィット・ウォレスにこのような形で出会うことができたのは幸運なことで、交流の発端となった。

2-4. 同「ヤング・ピープルズ・コンサート」(1月15日、14時～15時、エイヴリー・フィッシャー・ホール)(34ドル)

出演: Daniel Boico (指揮), Theodore Wiprud (解説), Tom Dulack (台本・監督), Randall Goosby (ヴァイオリン、14歳、ニューヨーク・フィル・デビュー), Jason Parrish (俳優)



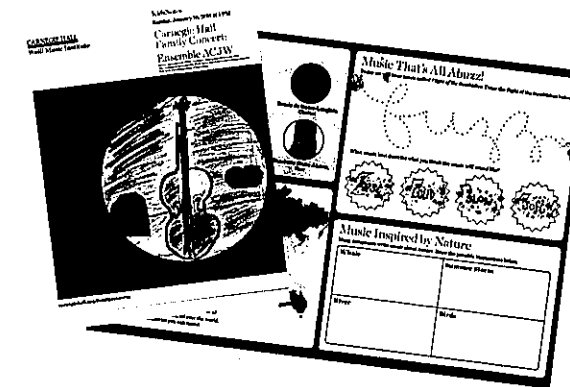
曲目: モーツァルト《魔笛》序曲、ハイドン《交響曲第100番》メヌエット、モーツァルト《ヴァイオリン協奏曲第3番》第1楽章、シューベルト《交響曲第5番》第1楽章、P. D. Q. バッハ《No-No-Nonette》最終楽章、ベートーヴェン《交響曲第2番》最終楽章。

「音楽の時代: 古典派 The Age of Music: Classical」と題する子どものための教育的コンサート(対象は6～12歳)。シリーズ物で、前回のバロック音楽との比較なども交えて、古典派の音楽の特徴を形式面と様式面から教え込んでいく(続く3月に「ロマン派」、4月に「現代音楽」の回を予定)。スクリーンを活用してABA形式、AABA形式、さらにソナタ形式などの説明を行い、子どもの参加は<Twinkle, twinkle, little star>(ABA形式)や<Old MacDonald had a farm>(AABA形式)といった歌を歌うことに限られていた。構造的聴取のための音楽形式と様式のレッスンと言える。ヴァイオリンのソリストとして14歳の黒人の男の子がニューヨーク・フィル・デビューを果たしたのは快挙で、盛んな拍手を受けていた。俳優(モー

ツァルトのような髪と服装)は道化役で、無知な聴衆の代表として舞台上がる役割を担う。親子連れだけでなく、祖父母に連れられた子どもが多いのが目立った。

2-5. カーネギー・ホール、ワイル・ミュージック・インスティテュート「ファミリー・コンサート」(1月16日、13時～13時50分、カーネギー・ホール、ザンケル・ホール)(21ドル)

出演: Ensemble ACJW: Michael Mizrahi (Piano), Elizabeth Janzen (Flute), Romie de Guise-Langlois (Clarinet), Joanna Kaczorowska (Violin), Julia MacLaine (Cello), Charlotte Blake Alston (Host)



テーマと曲目: Big Musical Question: How is nature musical?

• グリーク《ベール・ギェント》より《朝の気配》
*メンバーと楽器の紹介(子どもに言わせる)、上記の曲の一節を聞かせる
• サン＝サーンス《動物の謝肉祭》より《大きな鳥籠》
• リムスキー＝コルサコフ《熊と蜂の飛行》
• ネッド・ノーレム《蚊》(Vn+Pf): ピチカート
• ハインリッヒ・ビーバー《ソナタ・ラップレゼンタティーヴァ》6つの動物: (1) 小さな鳥、(2) 大きな鳥、(3) かえる、(4) 時を告げる雄鶏、(5) 歩く雌鶏、(6) ミャーミャー鳴く猫
*動物は自然の一部、ではお天気はどうか?
• ドビュッシー《雪上の足跡》
• メンデルスゾーン《春の歌》: 熊が冬眠から目覚める
*水の流れる音: 指を鳴らす、手をこする、膝を叩く、足踏みをする、戻る
• スメタナ《モルダウ》: 小さな流れが合わさってモルダウに流れ込む

• シューベルト《鱈》: クラリネットが飛び上がる魚、ピアノは水の中、ジャンプ/スイムの繰り返し
• ジョージ・クラム《鯨の声》(Fl+Vc+Pf)、ハーモニクス、息の音、ピンでひっかく、青い舞台
• 総括: 朝、鳥、嵐、雪、小川、大河、海
• 歌を歌おう、自然を讀えよう<This Land is Your Land>

アカデミーのメンバーによる子どものためのコンサート。「自然を音楽にするとどうなるかな」という問いからスタートし、鳥、蜂、蚊と進んで、H. ビーバーの組曲の後、天気転じて、雪、春の雪解けと進み、河、魚、鯨に至る構成で、すっきりとして分かりやすい。カラフルなプログラムが入り口で配布されたが、コンサートの中では活用されなかった。演奏のレベルは高いが、子どもの巻き込み方には問題が多い。旋律の特徴的な動きを手で真似させるものが多く、親たちは一生懸命やって見せているが、子どもはすぐに飽きて止めてしまう子が多かった。途中、ボディーパーカッションで、雨の降り始めから土砂降りまで、そしてまた雨が上がるまでを聴衆(500人ほど)を巻き込んで行ったのは秀逸だった。今年8月上旬にこのプログラムがサントリー・ホールに招聘されるとの情報を得た。

以上、5つのアウトリーチ活動を見聞して強く感じたことは、催しの内容や進め方から、主催者側の視点がよく透けて見えるという点である。聴衆の文化的・知的レベルをどの程度のものとするか、上から目線か、あるいは一定の敬意を持っているのかどうか、実施プログラムの端々から如実に感じ取られる。今後、主催者としてアウトリーチ活動を企画・実施する際に、この点を重々心しなければならないという教訓を得た。

(津上 智実)

1-7 ジュリアード音楽院

1. 大学概要

ジュリアード音楽院 Juilliard School は、ニューヨークのリンカーンセンターに位置する4年制大学で、国内外から高い実力と才能を持つ芸術家たちが集まる世界的名門芸術大学の1つである。ヨーロッパの音楽院に匹敵するような音楽教育を提供する機関として1905年にフランク・ダムロッシュ博士によって創立されたのち、1951年に舞踊部門、1968年に演劇部門が創設され、総合芸術大学となった。これに伴い名称もジュリアード学院と変更になっているが、本報告書では日本で一般的に使われている「ジュリアード音楽院」の名称を使用することとする。現在では、音楽（クラシック・ジャズ）・舞踊・演劇の各部門で学士、修士、博士の学位並びにディプロマを提供するほか、充実したプレカレッジや夜間部の運営も行われている。近隣のコロンビア大学及びバーナード大学¹との単位交換制度を持っているため、学部や大学院における一般教養科目をこれらの大学で履修することが可能となっている。「世界各国からの才能あふれる音楽家、舞踊家、俳優が芸術家として、リーダーとして、世界市民として彼らの持つ可能性を最大限に生かすことができるよう、最高の芸術教育を提供すること」²というミッションの下、約200名の教員及びジュリアード弦楽四重奏団 The Juilliard String Quartet、アメリカン金管五重奏団 American Brass Quintet、ニューヨーク木管五重奏団 New York Woodwind Quintet、ジュリアードバロック Juilliard Baroque の4レジデンス・グループが、約

¹バーナード大学はコロンビア大学付属の女子大学。

²ジュリアード音楽院ウェブサイト www.juilliard.edu より

800名の学生の指導にあたっている。

創設以来、技術向上並びに芸術性の育成を主とした指導を行ってきた同院だが、1984年にジョセフ・W・ポリッシュ博士 Dr. Joseph W. Polisi の第6代学院長就任以降、それまでの技術偏重教育からの脱却を目指し、大幅なカリキュラム・プログラム改定が行われてきた。その中でもポリッシュが重要視したのがコミュニティ・アウトリーチ・プログラムの導入である。音楽・舞踊・演劇の全専攻向けに構築されているプログラム及び関連カリキュラムは、各分野でのリーダー育成の一躍を担うものとなっている。

2. コミュニティ・プログラム

ポリッシュ学院長が重要視した「地域コミュニティに対して責任のある芸術家」を育てるというポイントは、ジュリアードで行われている数多くのコミュニティ・プログラムに反映されている。それまでの伝統的な自分よがりの芸術家というのは、21世紀の芸術界にとっては害でしかなく、今後は自分たちが関わる芸術と社会との接点を見つけ、社会にとって何ができるのかを考えることのできる教育者かつ実演家こそが芸術家と呼ばれるにふさわしいとする彼の考えがあってこそそのものと言えるだろう。

同院のコミュニティ・プログラムは、指導や演奏をベースとしたアウトリーチ・プログラムを核として、その他にミュージック・アドヴァンスメント・プログラム、サマーグラント、アカデミーの3プログラムが行われている。すべてのアウトリーチ・プログラムはフェローシップとして扱われていることから、誰もが参加できるものではなく、申請書並びに面接審査が必須となっている。フェ

ローとして奨学金が支給される分、オリエンテーションから準備ミーティング、リハーサルに至るまで、細かい指導を受けることが条件となっているが、在学生の約25%以上が何らかのプログラムに積極的に参加している。ニューヨーク市コミュニティにとっては芸術教育及び芸術を享受できる場として、学生にとっては演奏の場かつ実践的・社会的スキル育成の場として機能している。

2-1. 指導ベース・アウトリーチ

アウトリーチ・フェローシップの中でもティーチング、つまり指導をベースとしたものは、コンサート・フェローシップ Concert Fellowship Program、ゴールドマン・フェローシップ Goldman Fellowship Program、インストゥルメンタル・ミュージック・プログラム Instrumental Music Program (以下、IMP)、モース・フェローシップ・プログラム Morse Fellowship Program、ミュージック・アドヴァンスメント・プログラム Music Advancement Program (以下、MAP)、Combining Literacy Instruction Through Musical Beginnings (以下、CLIMB)、の6つがある。

コンサート・フェローシップ・プログラムは、演奏プログラムとして年7回行われるヤング・ピープルズ・コンサート (以下、YPC) に向けた授業を行うもので、通年で14クラスを提携先 NY 市内小学校の4年生児童に対して行う。事前授業を1回、フォローアップを1回というように、それぞれのコンサートに対し2クラスが実施されるようになっている。コンサート・フェローが必ずしも YPC に出演するわけではないが、プログラムに沿って自分なりの切り口で子供たちへの授業を行っている。小学校での指導が通年で行われることから、フェローシップ

には「Arts in Education」と「Insights into Learning」の履修が条件となっている。

ゴールドマン・フェローシップ・プログラムは2010年始まった新しいプログラムで、ゴールドマンサックスからの寄付を基金として創設された。このプログラムでは NY 市立学校の中でも経済的になかなか芸術に触れることのない地区の子供たちに、芸術体験の機会を提供する目的のため、音楽・舞踊・演劇のどの部門の学生でも参加できるようになっている。現在の提携先は、ハーレム音楽学校 Harlem School of the Arts、ジョージ・ジャクソン・アカデミー George Jackson Academy、ハンツ・ポイント・アライアンス・フォー・チルドレン Hunts Point Alliance for Children、ハーレム・チルドレンズ・ゾーン Harlem Children's Zone の4機関だが、これら提携先のニーズに合わせた指導をベースとしたアクティビティ設計を行い、各学期に数回それらを実施する。

モース・フェローシップ・プログラムは、アウトリーチ・プログラムの中でも最もインテンシブなプログラムであると同時に、ジュリアード音楽院の中で最も有名なフェローシップ・プログラムでもある。レスター・S・モース2世夫妻からの寄付によってスタートした同プログラムは、提携先ニューヨーク市立学校で週2回の授業を通年行うものとなっており、カリキュラムはすべて自分たちで作成し実施される。授業のほかに年2回のフェローアンサンブルによるコンサートも行われる。コンサート・フェローシップと同様に「Arts in Education」と「Insights into Learning」の履修が条件となり、しっかりと基礎力と高い応用力が必要とされるため、基本的には学部4年生以上を対象としている。また週2回の学外活動、週1回のフェローミーティング及び授業準備などでかなり

の時間が必要となることから、タイムマネジメント能力も問われるため、全体としてフェローはみな一般教養並びに演奏成績優秀者ばかりである。

同じくモース夫妻の寄付によって始まったのが、NY市立小学校の4・5年生に楽器のグループレッスンを提供するIMPである。このプログラムでは提携先小学校において金管、木管、弦楽器のレッスンを毎週行い、年に2回学内でコンサートを行う。

MAP自体の活動内容は後の項目で詳しく述べるが、このMAPに関わるMAPフェローシップでは、フェローは基本的に毎週土曜日に行われる楽器指導プログラムのインストラクターとなる。しかし、MAP自体にも専属教員がいることから、単に指導者としてだけでなく、子供たちのメンターとして、スタッフのアシスタントとして、父母との連絡係として、そしてMAP専属教員の連携相手として、プログラム運営をサポートするための様々な役割を担っている。

CLIMBはMAPで指導を受けている生徒の兄弟姉妹のためのプログラムで、MAPが行われている間に発音や音読指導のリテラシー育成を、音楽や芸術教育のアクティビティを利用しながら行うというものである。対象は4～10歳で、4～5歳、6～7歳、8～10歳という3グループに分けられ、それぞれの対象に相応しいアクティビティが行われる。

2-2. 実演ベース・アウトリーチ・フェローシップ

実演をベースにしたアウトリーチは、ダンス・マスターワークス Dance Masterworks、グルック・コミュニティ・サービス・フェローシップ The Gluck Community Service Fellowship Program、マッケイブ・ギター・フェローシップ、PEPSダンス Performing

Educational Programs for Schools-Dance、ヤング・ピープルズ・コンサート The Young People's Concert (Y.P.C.) の4つがある。指導ベースでは音楽分野での活動が中心だったが、実演ベースのものでは音楽・舞踊・演劇分野すべてを網羅しており、ジュリアード音楽院の強みを生かす活動となっている。

ダンス・マスターワークスでは、提携先のニューヨーク市立小学校の児童たちに、現代舞踊の古典からコンテンポラリーなものまでを紹介する1時間のパフォーマンスを行うものである。単なるパフォーマンスではなく、インタラクティブな部分を持った内容であることが必須となっており、条件に沿うようにプログラミングされている。

実施回数及び参加者数では一番多いのが、グルック・コミュニティ・サービス・フェローシップである。45以上の病院やホスピス、ホームレス・シェルターなどの保健施設で、年間450以上のインタラクティブ・パフォーマンスを行っており、クラシック音楽からジャズ、ダンス、演劇とあらゆる分野へのニーズがあるため、同学院で扱う専攻の誰もが参加できるプログラムとなっている。個人での参加は認められておらず、グループでのみ参加できるが、これも申請書と面接というプロセスを経てフェローが決定されている。保健施設といっても様々であるため、授業等の履修は必要ないが、フェロー合格者発表後にはオリエンテーションを数回行い、プログラムにおけるアドバイスから施設内での心構えなどの講義が行われる。また活動実施前にはアウトリーチ・ディレクター等によるリハーサル確認なども行われ、実演の質と内容、コミュニケーション方法などの確認が細かく行われる。学生に多くの実演の機会を与えるのみならず、社会に対する芸術家としての責任を自

覚させる手段として、できるだけ多くの学生が参加できるような方法をとっていると考えられる。

マッケイブ・ギター・フェローシップは、参加対象をクラシックギター専攻に限定したフェローシップで、アウトリーチ・プログラムの様々な取り組みに参加することが義務付けられている。どうしてもソロ演奏に偏りがちな楽器であるため、演奏と会話を通して子供たちにクラシックギターの素晴らしさを伝えることを目的としているため、ニューヨーク市立学校での演奏会実施やジュリアード YPCでの演奏、CLIMBに参加する子供たちのためのインタラクティブ・コンサート実施などが行われる。

PEPSダンスも専攻を限定したプログラムであるが、高校生を対象にしたものであるため、ジュリアード音楽院が行うアウトリーチ活動の中では他のプログラムとは一線を画している。同プログラムではニューヨーク市立高校生に自分たちで振り付けをした作品を、インタラクティブ・パフォーマンスとして実施している。毎年5・6月の間に行われる。

YPCシリーズは、毎年7回の室内楽とジャズのコンサートを行うもので、毎回200名のニューヨーク市立小学校の4年生が訪れる。弦楽器、金管楽器、木管楽器、打楽器、鍵盤楽器、ギター、ジャズの各テーマで45分のインタラクティブ・コンサートが行われ、出演者は在校生から卒業生まで様々だが、アウトリーチの経験を積んでいる人材を選抜している。YPCに関しては、2-1で述べたようにコンサート・フェローが各学校で準備をしていることから、何も知らずにYPCに来ることはなく、事前準備+インタラクティブ・アクティビティによって、子供たちは楽しみながら音楽の知識や聴く力を養っているといえる。

2-3. ミュージック・アドバンスメント・プログラム(MAP)

MAPは、土曜日に行われる楽器指導プログラムで、ニューヨーク市立学校に通うアフリカ系アメリカ人、ヒスパニック、ネイティブ・アメリカ人などの、パフォーミング・アーツ業界で圧倒的に少ない人種の8～14歳の子供たちが対象である。音楽を通して規律と芸術の素晴らしさを体得することで、彼らの持つ音楽的才能と生涯にわたる芸術への愛情を育てることを目的としている。

プログラムは音楽基礎、音楽理論、個人レッスン、アンサンブル、音楽理論に加えて、オーディション準備や創造的音楽表現に関するクラスを含む4年間のカリキュラムで成り立っており、対象楽器はヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、フルート、クラリネット、トランペット、トロンボーン、パーカッション、ピアノである。生徒たちは9月～5月の学年度の毎土曜日にこのプログラムに参加し、楽器の貸与システムも完備している。卒業生とMAPフェローを中心とした教員に加えて、イダ・カヴァフィアンやウィントン・マルサリス、クリスチャン・マクブライドらの特別講師による授業も行われるほか、課外活動としてリハーサルやレコーディング・セッション、コンサート見学など、音楽の様々な側面を経験できるものとなっている。また、生徒のみならず家族に対してもワークショップ開催やコンサート招待、2-1でも挙げたような兄弟姉妹に対してのリテラシー育成プログラムを行うなど、音楽への理解を深めるために周辺に対する厚いサポートも行っている。

MAPに参加するには最低6ヶ月の楽器経験と高いモチベーション、家族の支援が条件となっており、審査には楽器オーディションと本人・家族面接が行われる。年間1500～4500ドルの授業料がかかるということには

なっているが、各家庭の経済状況に応じた授業料が設定されるほか、ほとんどの生徒が奨学金を授与しているため、上に記したような実質的な授業料を支払う必要のある生徒はいない。

音楽教育を受ける機会の少ない層を対象にシステム化された楽器指導プログラムを提供することで、地域における大学の存在意義を確立すると同時に、在學生には学外における活動と教育の重要性を教える場として、卒業生には仕事の機会を与える場として、関わる人々全員に Win-Win の関係をもたらすことに成功している。

2-4. サマーグラント

サマーグラントは、在學生企画によるパブリック・サービス関連事業に対する助成金制度である。これまでに、「白血病患者のためのアメリカ中西部募金コンサートツアー」、「ケニヤ・ウガンダ農村部の子どもたちのためのワークショップやマスタークラス開催」、「女性の社会待遇に関する演劇作品制作」などが助成金を得ている。これは芸術家としての自身の持つインパクトと社会的役割の理解を深めるためのものとして設立されており、単に教育的価値が高いものだけではなく、学生にとって芸術的かつ学術的の意味があり、その他のコミュニティになんらかの利益をもたらすプロジェクトを企画することが求められている。学部長による申請書及び大学以外からの資金を含む予算書審査を経て、助成認定がおりる。毎年何十もの申請がある中から、助成が行われるのは2～3プロジェクトとなっている。ニューヨーク市周辺のみならず米国並びに世界各地でのプロジェクトとして広がりを見せており、ジュリアードとしては学生の企画に投資をすることで、単なる技術習得機関ではない教育機関として新たな評

価を得ることにつながっている。もちろん学生たちにとっても自身の実演をツールとして何ができるのかを考え、企画し、プレゼンを行い、実施するという、まさにキャリア育成の場として機能している。

2-5. アカデミー

カーネギーホール、カーネギーホール教育部門であるワイル・ミュージック・インスティテュート³、ジュリアード音楽院そしてニューヨーク市教育局の連携プログラムとして2007年1月にスタートしたフェロシップ・プログラムである。トップレベルの若手音楽家を対象とした2年のフェロシップで、今日の演奏家は高いレベルでの演奏能力とともに、地域社会へ還元能力を併せ持ち、次世代の音楽家や音楽愛好家に影響を与えることが求められてくるという信念のもと、芸術性の高い演奏を行いながらも、教育や地域社会へ密接に関わることができ、その中でもアドボカシーそしてリーダーとしてキャリアを築いていくことのできる人材の育成を目標としている。モース・フェロシップをたたき台として構築されたプログラムであるため、カリキュラムは座学に加えて、ニューヨーク市立学校での通年指導を中心としたものとなっている。実質的な運営はカーネギーホールが行っているため、ジュリアードは人的・物的リソースの提供を行っているのみにすぎない。しかし多くのモース・フェロシップ修了生を含む卒業生がアカデミーへ進学して

³ ワイル・ミュージック・インスティテュート Weil Music Institute は、当時の理事長サンフォード・I・ワイルを記念して、2003年にカーネギーホール内に設立された教育部門である。ニューヨーク市周辺のみならず、米国内外の幅広い年齢、音楽バックグラウンドを持つ人々に対して、ホールの持つリソースを活用した画期的なプログラムを展開している。日本ではサントリーホールと提携を結んでいる。

おり、音楽院の行うリーダー養成プログラムの新たなステップとしての一面を持っている⁴。

3. 大学カリキュラムとの関わり

これだけのプログラムをもつジュリアード音楽院であるが、大学カリキュラムとしては選択講座としての「Arts in Education」と「Insights into Learning」を開講しているにすぎない。しかし、この2講座の履修が、小学校での指導をベースとするモース・フェロシップとコンサート・フェロシップの必須条件となっているため、地域コミュニティ活動を行うための準備講座として機能している。「Arts in Education」ではティーチング・アーティストになるためのテクニックや考え方、プレゼンテーションの仕方についての講義に加えて、実際のクラス授業視察や模擬授業、他の芸術機関所属ティーチング・アーティストたちとの交流などの実地体験が行われ、「Insights into Learning」ではクラスマネジメントを含む音楽教授法についての授業が行われる。前述の Morse 及び Concert Fellowship はこれらの授業を履修してから取り組むものである上、単位取得はできないもののスカラシップ制度が存在することから、導入部としての2講座、実践編としてのフェロシップという2年間もしくはそれ以上のカリキュラムとして成立していると理解できる。

4. プログラム参加者の進路

実演家としてのキャリア展開は難しくなりつつある中、これらのプログラムで得たスキルと経験を基礎として、プログラム参加者たちのキャリア発展は著しい。自身で教育と実

⁴ 詳しくは、音楽系3大学による共同プロジェクト「平成21年度研究報告書」を参照のこと。

演を合わせた活動を行うグループを主催し、米国内外で活躍したり、米国で需要の高いティーチング・アーティストとして更なる研鑽を積んだり、芸術機関におけるマネジメントポジションに着いたり、その活動は多岐にわたる。ニューヨーク市内ではリンカーンセンター・インスティテュートやニューヨーク・フィルハーモニック、カーネギーセンターのティーチング・アーティストなどとして活躍するメンバーも多く、それらの芸術機関の教育プログラム・ディレクターや大学での人材育成プログラム・ディレクターになっているものも少なくない。中でもモース・フェロシップ修了生は、演奏成績優秀者でありながら、自身の活動と教育・社会貢献への意識の高いものが多いため、どのような組織においてもリーダーポジションにつくことが多い。コミュニティ・プログラムに参加した経験のある卒業生たちは、どの分野においてもプログラムを通して培った芸術性、行動力、社会貢献力の高さで、各業界の牽引力になっている。

(小島 レイリ)

参考文献

- Choi, Janey (2010 Summer Seminar Guest Lecturer / Morse Fellow recipient). Interview transcription by the author, Interview conducted on January 20, 2010.
- Hong-Park, Jihea (2010 Summer Seminar Guest Lecturer / Morse Fellow recipient). Interview transcription by the author, Interview conducted on January 21, 2010.
- Howell, L. E. (Ex Director of the Community Outreach, Juilliard School). Interview transcription by the author, Interview conducted on November 19, 2009
- Juilliard School website <http://www.>

juilliard.edu/

Juilliard School Community Program
website [http://www.juilliard.edu/
community/index.php](http://www.juilliard.edu/community/index.php)

Juilliard School, "Arts in Education"
Syllabus, 2009

_____, Outreach Opportunities for Juilliard
College Students, 2005-2006, handout

_____, Programs offered by the Office of
Educational Outreach, handout

_____, The Gluck Community Service
Fellowship Program Handbook 2009-10

_____, The Morse Fellowship Program "A
Celebration of Fifteen Years of Innovative
Education", 2009

_____, The Morse Fellowship Program
Application 2010-2011, handout

_____, The Morse Fellow Teaching Schedule
Year Grid 2009-2010, handout

_____, Outreach Opportunities for Juilliard
College Students, 2005-2006, handout

_____, Programs offered by the Office of
Educational Outreach, handout

Law, Wendy (2010 Summer Seminar Guest
Lecturer / Morse Fellow recipient).
Interview transcription by the author,
Interview conducted on January 18, 2010.

Polisi, Joseph W. "The ARTIST as
CITIZEN, Planning for the Twenty-First
Century", Pompton Plains: Amadeus Press,
2005

Wallace, David (Lecturer at the Juilliard
School / Senior Teaching Artist at the
New York Philharmonic). Interview
transcription by the author, Interview
conducted on November 23, 2009

—「音楽コミュニケーション・リーダー」養成の観点から—

はじめに

音楽系3大学による共同プロジェクトにおいて養成を目指す「音楽コミュニケーション・リーダー」には、音楽の持つ力を広く伝え、それを通して人々の心を結びつけていく役割が期待される。そして、支え合い、つながっていく地域社会に向けた一翼を担うことが望まれる。

このような人材が求められる背景として、今日、人間関係の希薄化が大きな社会問題となっている。とりわけ学校教育においては、児童・生徒の自己表現能力等コミュニケーションに関わる能力の不足が喫緊の課題とされている。そのため、「コミュニケーション教育」の推進に向けた取り組みが始まり、平成22年度には文部科学省において「コミュニケーション教育推進会議」が設置され、検討が行われている。具体的な事業としては、平成22年度「子どものための優れた舞台芸術体験事業（児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験事業）」が実施されており、その趣旨は「子どもたちに対し、芸術家による表現手法を用いた計画的・継続的なワークショップ等の実技指導を実施することにより、子どもたちの芸術を愛する心を育て、豊かな情操を養うとともに、コミュニケーション能力の育成を図る」¹とされる。芸術の持つ豊かな表現力や創造性によるワークショップが、子どもたちのコミュニケー

1 平成22年度「子どものための優れた舞台芸術体験事業」(旧「学校への芸術家等派遣事業」)[児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験事業]応募要領(案)より引用(文部科学省ホームページ:
[http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/
detail/_icsFiles/afeldfile/2010/02/05/1289958_02_3_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afeldfile/2010/02/05/1289958_02_3_1.pdf), 2011年2月11日確認)

ション能力を育むための新たな学びの方法として注目されつつある。

しかしながら、このような社会の求めに対し、十分に応えることのできる芸術家や指導的役割を果たす人材は多くなく、文化芸術関係機関や大学等においても育成の必要性が高まっている。

以上のような状況を踏まえ、本稿では、地域における音楽活動の担い手、及びその活動内容としてワークショップ等を実践し促進する人材の育成について、日本の大学における事例の報告を行いたい。

1. 音楽系3大学による共同プロジェクト参加校の取り組み

日本の音楽大学では、音楽家養成のための専門的な教育が行われ、演奏の実技教育はその一環として重要な位置を占めている。一方、教育機関としての専門性を活かして地域で行われる活動に、教員や学生等が出演あるいは企画し、地域のホールや美術館等で開催される、いわば「出張コンサート」がある。また、地域連携の枠組みにおいて、地元の自治体との協同事業に参加するなど、様々な学外活動が実施されている。

また、子どもを対象とする地域音楽活動という視点から見ると、自治体と連携し小・中学校をはじめとする各種施設へ出向き、指導や演奏等を行う活動については、近年、積極的に取り組む大学が見られる。例えば大阪音楽大学においては2006年度より、豊中市と連携し「サウンドスクール事業」が実施されている。

このような地域における音楽活動を大学の

教育カリキュラムとして位置付けていくにあたっては、授業科目としての単位認定や、指導・評価の仕組みづくり、スタッフを備えた組織の設置等、教育体制の整備が求められる。音楽系3大学による共同プロジェクトへの参加校は、これらに対し、早い時期から取り組みを行ってきた。すなわち神戸女学院大学音楽学部では2001年度から「音楽によるアウトリーチ」を、東京音楽大学では2005年度から「アクト・プロジェクト」を、昭和音楽大学では2007年度から「アーツ・イン・コミュニティ」を立ち上げている。履修の仕組みを整え、学生に対しては講義を行うとともに、実際の活動ではオーディションやリハーサル、フィードバックを通じた指導によって、キャリア教育をも見据えた教育を行っている。また、広報誌の発行やインターネットによる情報発信も積極的に展開している。

2. 音楽大学以外の大学における事例

音楽大学以外の大学、特に教育学部等を有する大学においては、比較的早い段階から地域活動やワークショップによるリーダーシップ研修等が実践されてきた。教育体制や環境の整備はもちろん、教育内容自体も音楽大学で現在実践されているものより段階が進んでいるケースもあり、中には、音楽分野への応用や、音楽大学との連携が期待される取り組みも少なくない。以下、いくつかの事例を紹介する。

2-1. 新潟大学

新潟大学教育学部の芸術環境講座では、横坂康彦教授の指導の下、アートマネジメントや地域連携に関して先進的な教育が行われてきた。とりわけ、同講座に設置されている「地域芸術実践」のように、地域での演奏活動や音楽会の企画運営、音楽に関するインターン

シップ活動等に対して単位が認定される仕組みが整っている点は特筆に値する。

加えて、横坂研究室では、Sony Music Foundation 及びヴァイオリニスト五嶋みどり氏の協力により2004年度に「トータル・エクスペリエンス in 新潟大学」を、また、2007年度から2009年度にかけては新潟市西区役所地域課との連携により「みゅーじっくろさき」を開催するなど、充実した実践の場を学生に提供している。さらに2010年度からは、新潟市西区役所、新潟県文化振興財団、アメリカ大使館、日本音楽財団、NPO法人「くらしに音楽プロジェクト」などと連携し、ニューヨーク・フィルのティーチング・アーティストたちと地元の演奏家、地域を結ぶ新プロジェクトに着手しており、今後の活動が期待される。

2-2. 滋賀大学

滋賀大学教育学部の音楽教育講座では、林睦准教授を中心とした、音楽による地域貢献プロジェクトが2005年度より実施されている。カリキュラム化こそされていないが、林氏をはじめとする研究メンバーの教員の授業と連動させる形で、学内演奏会の地域開放(ランチタイムコンサート)、地域の学校園への出前コンサート、ワークショップ、交流授業、民族楽器・和楽器のワークショップ、その他公開講座等が行われており、大学による音楽系アウトリーチとしては草分けの一つに数えられる。

2-3. 聖徳大学

聖徳大学・聖徳短期大学ではたくさんの資格・免許取得の機会を学生に提供しており、その中の一つに「レクリエーション・インストラクター」がある。「レクリエーション・インストラクター」とは、地域、学校、企業

などでレクリエーションの指導を行う専門家を認定する民間資格で、(財)日本レクリエーション協会によって主催・運営されている。通常、レクリエーション・インストラクターになるためにはレクリエーション協会が実施する養成講習会・講座・セミナーを受講する必要があるが、聖徳大学のように(財)日本レクリエーション協会に認定された大学・短大・専門学校において必要プログラムを履修することで取得する方法もある。音楽に特化したものではないが、多様なワークショップ形態を習得することが出来るため、様々な分野への応用の可能性は高いのではないかと考えられる。

3. 青山学院大学・大阪大学・鳥取大学の「ワークショップデザイナー」育成プログラム

青山学院大学と大阪大学では、文部科学省「社会人のための学びなおしニーズ教育推進プログラム事業」の委託を受け、2008年度より、人と人とのコミュニケーションの場面を創造する専門家「ワークショップデザイナー(地域教育育成専門員)」を育成するプログラムを開発、開講している。これは、コミュニケーション力を育成する基盤として地域の教育の役割が見直されている動向を受けたもので、ワークショップの企画・運営を通して、地域の教育力をイノベーションでできる人材を育成することを目指している。

カリキュラムは3か月間・全120時間で、基礎コース27時間(eラーニング15時間、演習12時間)、デザインコース70時間(eラーニング18時間、実習16時間ほか)、マネジメントコース23時間(eラーニング6時間、研修12時間ほか)の3本の柱で構成されており、全課程を修了しワークショップデザイナーに認定されると、学校教育法に基づく履修証明書が大学から発行される。

受講対象者は限定されていないが、地域教育や学校支援にボランティアで従事している者、教育やアートに関連している行政・企業・公益法人・NPOなど関係団体の職員、企業のCSRを担当している社員等が想定されている。

講師陣には、青山学院大学ヒューマン・イノベーション研究センター所長を務める佐伯胖氏、『ワークショップ』(岩波書店、2001年)の著者として知られる中野民夫氏、文部科学省「コミュニケーション教育推進会議」の委員も務める劇作家・演出家の平田オリザ氏、青山学院大学社会情報学部教授でNPO学習環境デザイン工房代表の荻宿俊文氏をはじめ、ミュージアム・エデュケーション・プランナーの大月ヒロ子氏や、ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室長の吉本光宏氏など、第一線で活躍する人々が名を連ねる。

また、提携実習先には、児童向けのワークショップやリアルコミュニケーションツールの開発を行っている「NPO学習環境デザイン工房」や、同じくワークショップのオーガナイズを積極的に行っている「世田谷ものづくり学校」、小学校へ現代アーティストを派遣しワークショップを創造する「NPO法人芸術家と子どもたち」などがあり、NPO等で即戦力となりうるスキルを培う環境が整っている。

2010年度からは鳥取大学でも開講され、さらに2011年度からは、上記プログラムを青山学院大学大学院に移設し、より科学的専門性を深めた、社会情報学研究科ヒューマンイノベーションコースが設置される。

また、上記に関連して、2010年9月には佐伯氏、荻宿氏を中心メンバーとする共同研究による「ワークショップと学び」シンポジウムが青山学院大学にて開催された。

この共同研究では、ワークショップ体験

を「まなびほぐし」(アンラーニング)²と定義しており、教育におけるコミュニケーションを従来の「教える⇒教わる」の関係から、意味を探求し深めることに向けた「考える⇔学ぶ」の関係に転換していくことをワークショップの意義と捉えている。つまり、ワークショップ自体は目的ではなく、あくまで学習者にとっての「学びほぐし」のエクササイズであり、これらのプロセスを支援するためにファシリテーター³が常に必要とされる。

おわりに

アウトリーチや地域連携をカリキュラム化している大学はまだ多くはないが、滋賀大学の林睦准教授が2007年に実施した「大学における音楽分野の地域貢献活動に関する調査」⁴によると、全国の教育学部音楽科、音楽大学・音楽学部をもつ大学、アートマネジメント系の学科を持つ大学のうち、95.6%が音楽による何らかの地域貢献活動を行なっている。しかし、小学校や中学校と大学それぞれのカリキュラム上、実施可能な日時が限定され、また環境上の制約が多いため、調整が難航するケースも少なくない。受け手と送り手が共に実りのあるアウトリーチを実施するためには、双方を結ぶアウトリーチ・コーディネーターの存在が不可欠である。

アウトリーチ・コーディネーターやワークショップのファシリテーターは「音楽コミュニケーション・リーダー」の役割に通ずるものであり、教育カリキュラムの進化によって、大学で実践を積んだ学生が、将来、音楽を通して学校や社会を結ぶ立場を担っていくことが期待される。

(布目 藍人・佐藤 良子)

² ヘレンケラーが当時ハーヴァードに留学中だった鶴見俊輔に語った言葉、「I've learned many things, But later, I had to unlearn.」における“unlearn”の鶴見流

解釈で、型通りにセーターを編み、ほどいて元の毛糸に戻して自分の体に合わせて編みなおすという情景を想起して訳した造語。

³ ミーティングやワークショップなどにおいて、その場で起こっていることに対して中立な立場を保ちながら適宜話し合いに介入し、合意形成や相互理解といった目的の到達に向けて展開をスムーズに調整する役割を担う人。参加者やデザインによっては、意見交換だけでなく、視覚に訴える手法や、身体の動きや移動を使った技法、感情を扱う介入をする場合もある。ファシリテーターが参加者の立場を兼ねる場合もある。

⁴ 林睦(研究代表者)平成20年度「大学教育における音楽の地域貢献活動に関する研究」(平成18～19年度日本学術振興会研究費補助金 若手研究(スタートアップ)研究成果報告書)滋賀大学教育学部、2008年。

IV. 3 大学連携事業学外評価員会議報告

3 大学連携事業学外評価員会議報告

外部評価委員によるプログラム全体の点検・評価を行い、その具体的改善を図るため、年2回の3大学連携事業学外評価員会議を実施した。メンバー及び開催日程は以下の通り。

外部評価委員（敬称略）：

久保田 慶一	国立音楽大学 教授
澤 恵理子	社団法人日本演奏連盟 事務局長
田村 孝子	静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」館長
原 武	サントリーホール 総支配人
善積 俊夫	社団法人日本クラシック音楽事業協会 常務理事

開催日程：

2010年9月28日（火）10:00～12:00

2011年3月2日（水）10:00～12:00

第1回、第2回ともに、会場である東京音楽大学と、神戸女学院大学及び昭和音楽大学をインターネット・ビデオ会議システムでつないで、当日会場に行けない運営委員会メンバーも3大学連携事業学外評価員会議での話し合いに参加した。

【第1回3大学連携事業学外評価員会議】

2010年9月28日（火）に実施された第1回3大学連携事業学外評価員会議においては、1. 取組の社会的意義、2. 平成22年度前期の活動、3. 今後の活動について、ご意見をうかがった。主なコメントは以下の通りである。

1. 連携取組の社会的意義について

・経済不況や少子化などの社会不安が広がる昨今の社会情勢においては、個々の利益にとらわれず、ホールと音楽大学、あるいはホー

ルとマネジメントなど、様々な団体が連携し合って、将来を見据えた手を打っていくことが喫緊の課題である。そうした中であって、今回の3大学のプロジェクトは先駆を担っており、高く評価できるのではないだろうか。

・市町村合併による事業費の削減や指定管理者制度の影響で、公立文化施設の運営が管理強化に向かっており、このままでは地域文化が活性化せずに疲弊してしまう恐れがある。この連携事業を契機として、こういった問題の解決に向けて大学を含む関係団体のネットワークが大きく広がっていくことが望まれる。

・音楽を社会に伝えていく人材は、一つの団体だけではなかなか養成しづらい。この取組が核となって音楽諸団体と連携し合い、音楽を広く理解し、それをコミュニケーション・ツールとして使えるような人材を育成することで、社会に貢献し得る一つの力になるのではないかと。

・音楽大学が「音楽そのものの力をコミュニケーション教育に生かす」というプロジェクトに着手したことは評価に値するが、以前からこの分野に取り組んでいる演劇界等に比べると、音楽界は後手に回っている感が否めない。今後はもっと音楽界と教育界が手を組んで、このことに真剣に取り組まなければならないと思う。

2. 平成22年度前期の活動評価

・授業後のアンケートによると、第2回のMC講座（小出郷文化会館 榎本広樹講師）を受講して、地方の公立ホールに就職したい、あるいは企画等の提案をしたいと思った学生もいたようなので、（授業の成果として）今後に期待が持てる。

・合同夏期セミナー3日目の「インタラクティブ・コンサート」で行われていた、子どもたちにいろいろなリズムやメロディーを体感させる活動（アクティビティ）は、子どもたちにクラシック音楽に親しんでもらう意味で大変有効ではないかと感じた。こういった活動を通して、クラシック音楽需要の底辺拡大に貢献できる人材を育成してほしい。

3. 今後の活動について

・この事業で行われている講座やセミナーに、FDの一環として出来る限り多くの教員が参加すべきである。さもないと、せっかくの取組みも全体の底上げにつながらず、非常にもったいない。

・MC講座終了後に、「今の授業についてどう思ったか」等をシェアするグループ・ディスカッションの時間を設けてはどうだろうか。授業も大切だが、それをきっかけにして、自分がどう思って、これからどうしたらいいのかということを確認していくことも大事なことなのではないかと思う。

・コミュニケーション・リーダーは基本的に集団を相手にするので、「伝える能力」や「ファシリテーションのスキル」が非常に重要になってくる。今後はこれらを磨く機会を講座の中に設けるとよいだろう。

・芸術を活用したワークショップのあり方について、この取組みの中でしっかりと考えていく必要があるのではないだろうか。

・コミュニケーション・リーダーの教育には、ファシリテーションの力を身につけさせることのほかに、さまざまな分野の音楽・芸術を見聞させることも重要ではないか。自分の専

攻楽器以外に関心のない学生も多いため、他の芸術に触れたり、他の人の意見を聞いたりすることの大切さを理解する機会を学生に提供してほしい。

・補助金の期間だけで終わらずに、さらに発展していくことが大切である。こういった取組みを継続していくには相当なエネルギーを要するが、それだけ期待も大きい。将来的には、この3大学だけの連携にとどまらず、さらに輪を広げて、コンソーシアムという形をとっても良いのではないだろうか。



【第2回3大学連携事業学外評価員会議】

2011年3月2日（水）に実施された第2回3大学連携事業学外評価員会議においては、平成22年度の活動全体については、教育、実践、研究という流れに沿って評価をいただいた。また、今後の取組についてもご意見をうかがった。

1. 教育活動について

・「ミュージック・コミュニケーション講座」では、各講義の中や前後で質疑応答や話し合いの場を設ける工夫をしているようだが、「コミュニケーションの場」として、ディスカッションの時間をより多く持たせることが重要であろう。

・教育効果測定を試みを行っていることは評価しているが、今後、履修した学生たちがどのように変化したかをきちんとフォロー（追跡調査）することも大切である。学生へのアンケートの評価項目を（現行の3段階から）5段階評価にすることについては賛成する。

・この取組で目指す「専門力」、「社会性」、「コミュニケーション力」をきちんと定義し、教育効果測定の指標としっかりとリンクさせた測定を行ってほしい。

2. 合同コンサート（平成22年10月6日実施）について

・昭和音楽大学の「声」、神戸女学院大学の舞踊との「コラボレーション」、東京音楽大学の「アンサンブル」という、3大学それぞれの持ち味を生かした企画で、学生たちの演奏や司会、運営に至るまで、エネルギーと情熱を感じた。構成・演出などについては、プロの知恵を借りるなどして、より一層洗練させることも考えられる。

・子どもたちに向き合うには、情熱・パワーが必要であるが、声による語りかけ、ダンスの効果的活用やクイズを加えるなど、3つの大学それぞれが、子どもの興味を持続させるための工夫を凝らしていた。

・司会進行にも学生らしさが感じられたが、少し固い部分もあったので、今後はプロによるトレーニングの場があってもいいのではないか。

・活動報告書（39ページ参照）の「学生のことば」からは、各大学それぞれの考え方ややり方があり、学生たちが戸惑いながら準備を進めたことが読み取れるが、互いを理解し、目標に向かって協力しあうことは刺激的な体

験であったに違いない。このような「3大学のコラボレーション」の場こそが、「大学間連携」の大きな特徴であると考えられる。

・「コミュニケーション・リーダー育成」の視点からは、このプロジェクトの経験は大変重要なものである。今後も何らかの形で継続する方法を検討してほしい。

3. 研究活動について

・「コミュニケーション」という切り口で、音楽や芸術の分野だけではなく、広く一般大学の取り組みにまで研究の場を広げていることは評価できるし、今後の研究成果を楽しみにしている。これも、大学連携による研究調査だからこそ出来ることであると思われるので、それを常に意識することが大切である。

・海外調査について、米国の事例研究はかなり詳しく調査されているが、それに比べてヨーロッパの事例が少ないように見受けられる。イギリスやベルギーのモネ劇場などは先進的な取組を行っているので、次年度以降の調査に期待したい。

・シンポジウム、学会などで積極的に発表や報告を行っているが、より広く知ってもらうためには、ホームページ等をもっと活用していく必要がある。研究が今後どのような形で進められていくのかが見渡せるように表現を工夫するとよい。

3. 今後の取組について

・音楽系大学の連携取組であるという枠組みを生かしつつ、「音楽だけではない」という視点を大切にしてほしい。他の芸術分野のみならず「コミュニケーション」というキーワードで「多様性」を担保し、他分野と交流し、

刺激しあうことが大切である。

・昨今、義務教育の中に「コミュニケーション力をつける」ことを盛り込むという動きがある。音楽は日本の教育制度の中で科目として位置づけられているので、「評価」しなくてはならず、悩ましいところではあるが、音楽は最もコミュニケーションに訴えるものである。「音楽を教える」のではなく、音楽を通じて「互いを大切にする、助け合う、人と関わる」ことを学んでいくという「音楽の力」を盛り込んだカリキュラム提案をしていくことが必要であり、この連携取組の活動からもその推進力が生まれることを期待したい。



【3大学連携事業学外評価員会議のフィードバック】

平成23年度の「ミュージック・コミュニケーション講座」では、第1回3大学連携事業学外評価員会議のアドバイスを反映して、以下のような取組を行う予定である。

・「ミュージック・コミュニケーション講座」の授業編成にあたり、「コミュニケーション」をキーワードとして、より有機的な組み立てを行い、学生が目的や流れを把握しやすくする。

・講義のスタート前に別日程でガイダンス／

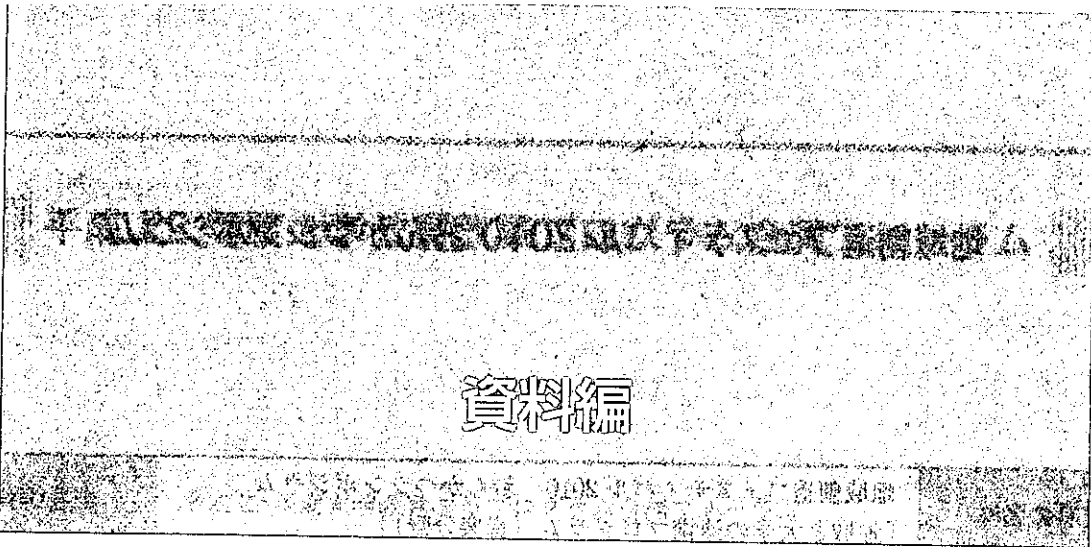
オリエンテーションの回を設定し、3大学の履修学生と教員が集まって、講座の趣旨や目的について意識を共有する場を持つ。

・ワークショップなど、双方向性を持った活動を組み込み、学生がファシリテーション能力、リーダーシップ・スキルなどを意識し、身につけることができるようにする。

・各講義の終了後に、毎回「振り返り」の時間を確保し、学生同士が感じたことを共有し、理解して定着させることを目指す。

なお、平成23年度の3大学連携事業学外評価員会議は秋（9月）と春（2月）の2回を予定している。

以上



催事の名称	地域創造フェスティバル2010 おんかつシンポジウム 「地域と大学の連携プログラム（音楽分野）」
登壇者	小澤櫻作ディレクター（(財)地域創造）、武石みどり教授（東京音楽大学）、 津上智実教授（神戸女学院大学）、赤木舞助教（昭和音楽大学） 進行：武濤京子准教授（昭和音楽大学）
実施日時	2010年8月5日（木）13:00 - 15:00
実施場所	東京芸術劇場 5階 中会議室
主催	財団法人地域創造
共催	東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
催事の概要	<p>8月3日から5日にかけて開催された「地域創造フェスティバル2010」のプログラムの一環として、おんかつシンポジウム「地域と大学の連携プログラム（音楽分野）」が実施された。</p> <p>シンポジウムは地元自治体との連携活動に先進的に取り組んできた大学（昭和音楽大学・東京音楽大学・神戸女学院大学）の事例を紹介し、今後の地域と大学の協働のあり方や、地域でのコーディネーターの役割を担う人材の必要性等について、参加者とともを考えることを主旨としている。</p> <p>はじめに自治体と大学の連携について、津上教授、武石教授、赤木助教から順に各大学の取組についてプレゼンテーションがあり、これを受けて小澤ディレクターからコメントを頂くとともに、フロアの参加者から各々の経験等のコメントを頂いた。続いて地域でのコーディネーター人材の必要性を踏まえて、武石教授より3大学連携プロジェクトについての説明が行われた。2011年度においては各大学がそれぞれ公共ホールと連携した事業の実施を計画していることがアピールされ、「大学としてはできるだけ社会と接する場をつくりたい」「大学と地域が互いに話し合う機会を増やしたい」という我々の発言に、フロアの参加者がうなずきながら聞き入る様子が見られた。フロアの文化施設担当者からは、大学と協力してキッズファッションショーを実施した経験から、音楽大学がない地域にとって地域の枠を越えた連携が必要と感じる等のご意見を頂いた。</p>



催事の名称	平成22年度大学教育改革プログラム合同フォーラム
開催日	2011年1月24日（月）・25日（火）
会場	秋葉原コンベンションホール 他周辺会場
主催	文部科学省・合同フォーラム推進事務局
催事の概要	<p>1月24日・25日の2日間にわたり「平成22年度大学教育改革プログラム合同フォーラム」が開催され、文部科学省が優れた取組（Good Practice）として支援する大学等の取組が一堂に会し、有識者による基調講演、分科会、展示会が行われた。展示会では約240大学がポスター展示による取組紹介を行い、音楽系3大学による共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」は、1月24日の「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」ポスター展示に参加した。</p> <p>会場では、来場者から熱心な質問を受ける等、本プロジェクトの紹介に努めたほか、他大学の取組についても視察及び情報収集を行った。</p>



3つの音楽系大学による連携事業とFD

音大連携による教育イノベーション

—音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて—

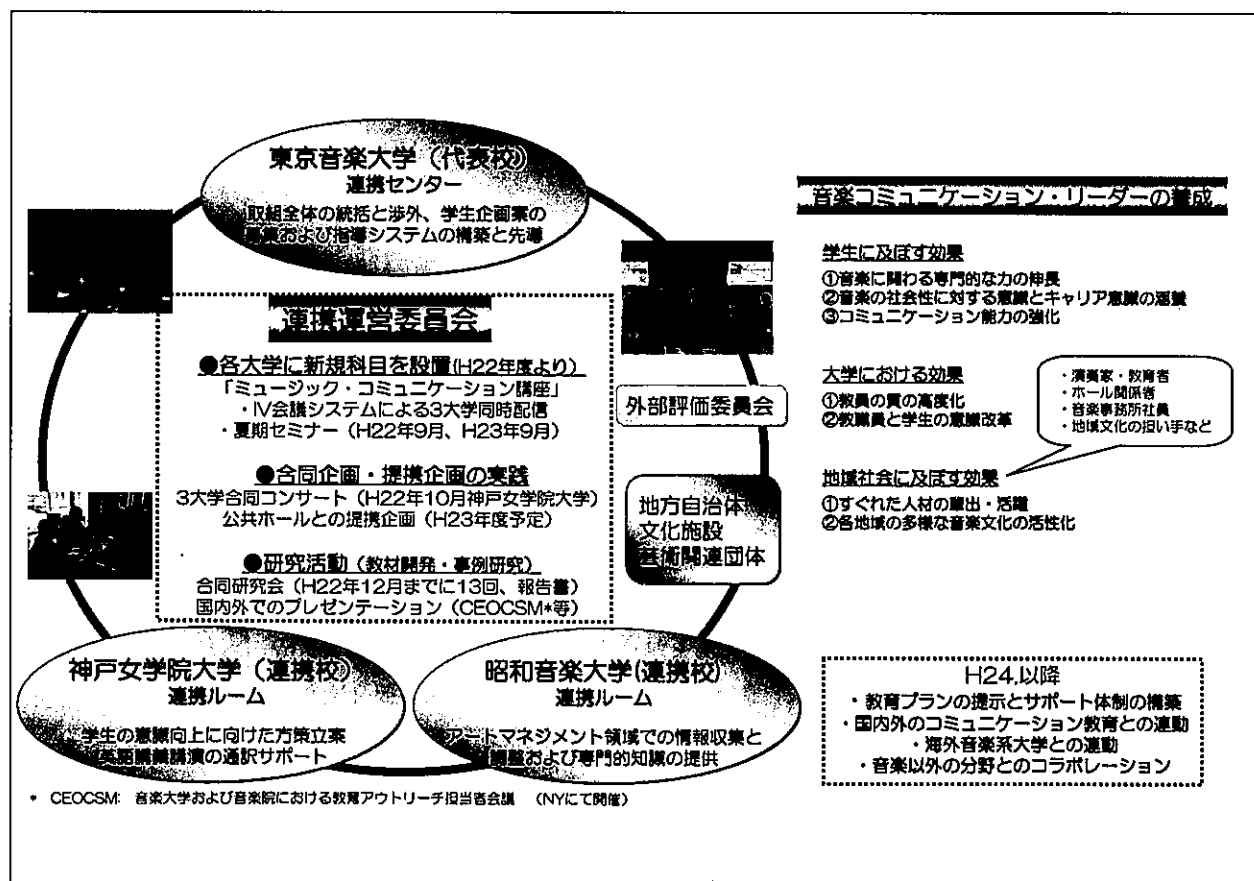
(文部科学省 平成21年度 大学教育充実のための戦略的連携支援プログラム 選定)
東京音楽大学 武石みどり (音楽学・教授)

【1】音大連携の必要性と背景

人と人とのつながりが希薄化し、特に若年層の「生きる力」と社会性の低下が指摘される現代社会においては、人の心を動かし結びつける音楽の力が益々求められている。この現状に対して、従来の音楽大学の教育は、選ばれた人々が専門技術を磨くための場としてレッスン室などの閉じた場にこもり、社会の動きとは連動しにくい傾向があった。3大学が連携することによって、こうした芸術至上主義の縛りを乗り越え、人と人とを結ぶコミュニケーションとしての音楽の根源的な力の回復に目を向けて、その力を地域社会で生

かすことができる人材(音楽コミュニケーション・リーダー)養成のための取組を行なうことは、音楽大学の教育革新のための第一歩となる。

連携事業の内容として、各大学の特性を生かしながら、①教育・研究・実践の高度化・社会化、②音楽大学の学士力強化、③地域活性化の促進を実現し、社会のさまざまな場で音楽活動を創造・実践することができる音楽コミュニケーション・リーダーの育成を目指す。また、各大学の教育改善に資するだけでなく、日本の音楽界全体の意識変革に貢献することを目指す。



【2】連携前の状況

3大学はこれまで、個別の教育改善の中で地域との共創による音楽教育プログラムをスタートさせ、それぞれ次表のような実践を通じてコミュニティへの還元を図ってきた。

表：連携前の各大学の取組 (～平成20年度)

学校名	神戸女学院大学	昭和音楽大学	東京音楽大学
教育プログラム *文科省GP選定部門	「音楽によるアウトリーチ」 *特色ある大学教育支援プログラム	「アーツ・イン・コミュニティ」 *現代的教育ニーズ 取組支援プログラム 地域活性化への貢献 (地元型)	「アクト・プロジェクト」 *現代的教育ニーズ 取組支援プログラム 実践的総合キャリア教育の推進
概要と教育目標	音楽学部の教育を大学内およびコンサート・ホールの舞台という従来の枠組みから解放し、社会の様々な分野に開くことによって、学生の主体的な学びを促す。従来のコンサート形式を越えて、聴衆との双方向的なコミュニケーションをめざす試みで、他者理解を踏まえた自己プロデュース能力、コミュニケーション能力、マネジメント能力を向上させる。4年次の実習では、主に次の三つの活動を行っている。 1. 小中学校に、楽器の体験学習などの楽しい音楽プログラムを提供する。 2. 病院や美術館などに、催しの主旨や季節にふさわしい音楽プログラムを届ける。 3. 美しいキャンパスを活用して「子どものためのコンサート」を開催する。	学生が、多彩な専門性を生かした能動的な活動を軸に、音楽や芸術の持つさまざまな力を、主体性を持って総合的に活用し、自己表現力やコミュニケーション能力を養い、今後のキャリアに生かすとともに、礼・節・技の備わった「地域と共に育つ」音楽人として成長することを目指す。このプログラムは以下の2つの柱からなる。 1. 「地域と学ぶ」：地域に開放された大学の講座や演奏会などを通じて、芸術文化の社会性、多様性について幅広く学ぶと同時に、共に学ぶ人々から多くを得る。 2. 「地域をつなぐ」：専門を生かした、地域のさまざまな場での能動的な活動を通じて、音楽の持つ力を体感すると同時に、コミュニティの一員としての社会性を身につける。	専門性が強くキャリア意識に乏しい音楽大学における実践的なキャリア教育の試み。参加学生を多学年・多専攻の小グループに編成し、異なる分野の複数の教職員の指導の下に種々の音楽業務に取り組む。 この体験によって卒業後のキャリアへの意識を喚起すると同時に、学生の問題意識と必要性に応じて特別講義を開講し、実践から理論・体系へとボトムアップ的に視野を広げることを目的とする。実技教育中心の音楽大学において、演奏者以外の立場での音楽業務体験を通して社会における音楽の位置づけを認識させるとともに、実社会での仕事に必要なコミュニケーション能力、問題解決能力、コンピュータ・リテラシーの向上を図る。
科目名	「音楽によるアウトリーチ (講義)」 「音楽によるアウトリーチ (実習)」	「音楽活動研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」	「音楽キャリア実習Ⅰ、Ⅱ」

【3】音大連携の取組内容

(<http://www.music-communication.com/>)

各大学の経験を生かしながら、音大連携では、連携によってこそ可能な以下の事業を行う。

1 複合的・実践的な 共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」の新設

音楽と音楽の場に関わる多角的な視点の講座を、学期中に6回実施（各大学から2回ずつインターネット・ビデオ会議システムで同時配信）し、夏期休暇中に夏期セミナーとして9回の授業を東京音楽大学で実施する。講師には、2の共同研究で検討された先進的な教育プログラムや関連機関に関わる国内外の人材を招聘する。



2 社会に開かれた音楽教育と人材育成のプログラムについての共同研究

国内外の先進的な教育機関の取組について研究し、視察や研究発表、

会議参加を通して人的ネットワークを構築。研究成果を1の教育の場へ還元し、学期中の講座では国内の講師、夏期セミナーでは海外から講師を招聘して（平成22年度：ジュリアード音楽院、平成23年度：ギルドホール音楽院）実践的指導を受ける。

3 3大学学生の合同企画による音楽会の実施

連携の実践の場として、「子どものためのスペシャル・コンサート」を神戸女学院大学で実施し、企画・制作・演奏に3大学の学生が参加する（平成22年度）。企画コンセプトの検討やプログラム作成等の打ち合わせにはインターネット・ビデオ会議システムを用いる。

4 公共ホールとの連携の実現

音楽大学から社会への発信として、公共ホール等の文化施設との新しい連携取組を企画し、実践する。学生との協働に意欲のあるホールを募り、企画・交渉・制作・演奏等の場面に学生を関わらせ、実社会で音楽の場を生み出す学びの機会とする。子どもの体験学習など、双方向的な企画を立案・実現することを通して、学生はプロデュース力とコミュニケーション能力を養う。将来的には、文化施設等との産学連携事業に発展させる可能性を探る。

5 連携実施のための体制整備

3大学で協定を交わし、連携運営委員会を設置。実働部署として、各大学に連携センター、連携ルームを開設し、コーディネーターを置く。学外の音楽関係者より成る評価委員会を設置。3大学間の会議は、場合に応じてオンライン・オフラインの両方で実施する。

【4】音大連携が生み出す効果

1 学生に及ぼす効果

本プロジェクトの実施により学生は、
・音楽に関わる専門的な力の伸長
・音楽がもつ社会性の認識、およびキャリア意識の涵養
・コミュニケーション能力の強化
の3点で大きく成長し、地域の芸術文化活動の担い手、コミュニケーション・リーダーとし

て活躍の場を自ら創り出すことが期待される。

2 地域社会に及ぼす効果

上記のような人材を輩出することにより、多様な音楽文化の醸成と地域社会の活性化が期待される。「クラシック・コンサート」という伝統的な形態にとらわれず、音楽が人々の心に潤いと力を与える場を多様化・増加させることにより、「音楽の力」の再認識を促したい。

3 社会における音楽大学の役割の拡大

この連携事業において音楽大学は、単に地域文化の活性化に寄与できる有為な人材を輩出するだけでなく、卒業生の活躍の場を創出するために地域や文化施設・芸術関連団体との間に立って、音楽が社会に貢献する機会について柔軟な考え方を提示し、積極的な提案を示す役割を果たす。高等教育機関としての従来の位置づけと比較すると、ここで音楽大学は「音楽による社会貢献」を目指して、自らの教育目標の幅を広げ、社会へ大きく一歩踏み出すこととなる。

4 大学における効果（FDとして）

《連携大学間》

連携にあたって、大学間の「文化」の壁は予想以上に大きく、担当する教職員は、音楽大学に従来見られた閉鎖性を打ち破り、柔軟なコミュニケーション能力を発揮することが求められる。壁を越える努力の中でお互いの大学の長所・短所、同じ問題に対処する方法や考え方の相違などが明らかとなる。共同の事例研究や報告書作成、共通科目の運営を通して、大学間の相違を感じながらも相互に受ける示唆は非常に大きい。

《各大学内》

音楽大学は「個人レッスン」を大きな特徴とし、閉じた環境で教育を行ってきた「伝統」がある。伝統的な教授法を念頭に置く教員にとっては、競合する他の音大と情報交換し教育プログラムを共有すること自体に抵抗がある。また、一般大学で行われるFDの方法（授業公開・アンケート等）は、これまで必ずしも十分な効果を上げてこなかった。

こうした状況の中で、連携事業は、他大学との連携によっていわば「風穴」をあけ、大学内での情報・意見交換を活発化させ、自大学の特性を再認識し、音楽大学の教育についての固定観念を払拭し意識改革を進めるきっかけを提供する「独自のFD」でもある。新規開設の共通科目には、常に学内外の教職員の参観者がある。

特に大きな反応を示しているのは、共通科目を履修して他大学の教員・学生と接した学生たちで、大学による「文化」の違いに気づき、自大学で学んでいることの意味を再認識する機会となった。他大学の学生との交流・討論を通して、今後自分にはどういった勉強が必要で卒業後どうしたいか、を具体的に考え始めた学生が多い。こうした学生の変化が、教員のさらなる意識改革を進めるための原動力となろう。

（本稿は平成23年3月6日に京都外国語大学で行われた2010年度第16回FDフォーラムにて報告したものである。）

新聞・雑誌等掲載記事

News 3大学が連携、インターネット
ビデオで講座を同時配信

現場を熟知するプロフェッショナルの貴重な講演を、3つの大学で同時に共有する。……ネットを通して遠隔地同士がリアルタイムにつながることもたやすくなくなった昨今、音楽教育の現場でもその活用が進んでいる。

東京音楽大学・神戸女学院大学・昭和音楽大学（順不同）と3つの音楽系大学は、共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション——音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて——」を開始、3大学が互いの教育資源を補いあい、交流を深め始めている。

去る6月9日に開催された「第2回ミュージック・コミュニケーション講座：あなたのための公立ホール」は、3大学をネット中継で結びながら、ゲストによる講演と質疑応答の時間を共有するもの。ちなみに「音楽コミュニケーション・リーダー」とは「音楽と社会を結びつけ橋となる人材」を指す造語だ。ホール関係者、音楽事務所のスタッフ、地域文化を支

「音楽の友 8月号」(2010年8月1日発行、音楽之友社)

る人……と音楽の力を聴き手に伝えるために必要な担い手は今後さまざまな新しい形でもあり得るはずだが、その人材育成を志すのがこの3大学共同プロジェクト。その一環として同時配信の講座が開催、現場での経験豊富なゲスト講師を招いて年6回開催されるというわけだ。

この日、昭和音楽大学（神奈川県川崎市）の会場に講師として登壇したのは、魚沼市小出郷文化会館の根本広樹氏。すべての公立ホールが直面する多種多様な問題に、地域住民とスタッフたちがいかなる創意工夫で向き合ってきたか、またどのような課題を抱えているか、（またどのような課題を抱えているか）、半信半疑でユーモア巧みに語る根本氏の講演が3大学に流れる。演壇の横のスクリーンには東京・神戸に集まった聴講者の様子も映し出され、根本氏はしばしば画面に語りかけて空気を共有する。回線の不具合なども回を重ねて解決されようし、3大学の学生が一堂に会する夏期セミナーで共に考える場も設けられる。（山野雄大）

Concert 3大学共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション——インタラクティブ・コンサート」

9月3日、東京音楽大学で小学生対象の「インタラクティブ・コンサート」が行われた。これは、東京音楽大学・神戸女学院大学・昭和音楽大学の3大学共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション——音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて——」の一環として行われたもので、ジュリアード音楽院で小学校へのアウトリーチ・コンサートのトレーニングと経験を積んだ3名の講師、ジェニー・チョイ(vn)、ウエンディ・ロウ(vc)、ジヘイ・ホン・パーク(p)が、豊島区立自由小学校の4年生3クラスを対象に4曲の作品を演奏した。「インタラクティブ・コンサート」とは、語りや遊びを通して演奏者と聴衆が共に作り出していく双方向型のコンサートで、演奏する作品を特徴づける美的要素——例えば楽器同士の対話、流れるような旋律と一定のリズムの伴奏の組み合わせ、音量の対比、等——をわかりやすい例で説明し、実

際にリズム打ちやゲーム、ダンス、寸劇等を用いて体感した後で演奏を行うもの。参加した小学生たちは講師たちのトークやゲームで心をほぐされ、ピアノ、エルガー、ハイドン、シェーンフェルトの作品の中の音楽的要素を聞き取ろうと熱心に演奏を聴き、また積極的に質問する姿が印象的であった。3大学の学生は、インタラクティブ・コンサートの作り方について講師から3日間指導を受けた。コミュニケーションに重点を置くこの教育方法は、今後、音楽と社会が関わる様々な場面で活躍できる人材の育成を目指している。（東京音楽大学教授・武石みどり）



東京音楽大学、神戸女学院大学、昭和音楽大学による共同プロジェクト「インタラクティブ・コンサート」

「音楽の友 10月号」(2010年10月1日発行、音楽之友社)

インタビュー
プラス

■本社社会部
〒650-8571
神戸市中央区東川崎町1-5-7
TEL:078-362-7040
FAX:078-360-5501
e-mail:kobe-ban@kobe-np.co.jp

■編集室
〒670-0964 姫路市豊沢町78
TEL:079-281-1125 FAX:079-281-9277
e-mail:himeji@kobe-np.co.jp

■東播室
〒675-0031
加古川市加古川町北在東2311
TEL:079-422-2073 FAX:079-421-1023
e-mail:toban@kobe-np.co.jp

火事や事故の通報、写真・映像提供、身近な話題、生活情報を社会部・各支社へご連絡ください

（ごみセンター）



神戸女学院大音楽学部が16日、3大学連携し演奏会を開いた。ネット活用し打ち合わせ

神戸女学院大音楽学部が16日、3大学連携し演奏会を開いた。ネット活用し打ち合わせ

おわりに

音楽系大学ではじめての教育連携の取組がスタートして1年半、歴史も個性も異なる3つの大学が、試行錯誤しながらも、充実した活動を行ってまいりました。

取組に参加した学生たちは、「ミュージック・コミュニケーション講座」でのインターネット・ビデオ会議システムによる意見交換や、夏のセミナーでの直接交流を通じて、多様な音楽の場やニーズ、考え方があることを学び、今後の音楽活動への幅広い考え方を身につけました。我々教員もまた、大学間の相互交流、研究活動を進める中で、新しい知見を得ることができ、この取組の効果と可能性を改めて認識しているところです。

これらの成果をふまえて、平成23年度は、「音楽コミュニケーション・リーダーの養成」に向けて、さらに一歩進んだ取組を計画しています。「ミュージック・コミュニケーション講座」では、「コミュニケーション」をキーワードとして、より有機的な講義と夏期セミナーを実施する予定です。実践活動では、昨年度の合同コンサートの実績を生かして、各大学それぞれが公共ホールと連携した企画を推進します。また、これまでの研究活動のまとめとして、新しい音楽大学のあり方、音楽教育への提言を行いたいと考えています。

この連携取組の目標として掲げている「専門力、社会性、コミュニケーション能力」を備えた人材養成のために、連携センター、連携ルームが協力していきたいと思いますので、今後もこの取組に対するご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成23年3月

武石みどり (東京音楽大学)
津上 智実 (神戸女学院大学)
武濤 京子 (昭和音楽大学)

東京音楽大学 連携センター

〒171-8540 東京都豊島区南池袋3-4-5

Tel : 03-3982-3513 Fax : 03-3982-3227 tokyo-ondai@music-communication.com

神戸女学院大学音楽学部 連携ルーム

〒662-8505 兵庫県西宮市岡田山4-1

Tel : 0798-51-8588 Fax : 0798-51-8588 kobe-c@music-communication.com

昭和音楽大学 連携ルーム

〒215-8558 神奈川県川崎市麻生区上麻生1-11-1

Tel : 044-953-9867 Fax : 044-953-1311 showa@music-communication.com

音楽系3大学による共同プロジェクト

音大連携による教育イノベーション

音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成22年度 活動報告書

平成23年3月

発行 東京音楽大学 連携センター

〒171-8540 東京都豊島区南池袋3-4-5

Tel : 03-3982-3513 Fax : 03-3982-3227

<http://www.music-communication.com>

編集 昭和音楽大学 連携ルーム